
リリカルなのか？無を有する剣

たかB

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リリカルなのか？無を有する剣

【Zコード】

N7035V

【作者名】

たかB

【あらすじ】

なのはとユーノがレイジングハートでジュエルシード封印。リリカルなのは。でも、もし、この二人の前に一人の少年がジュエルシードを封印していたら…。少年は魔力はないけどとても中途半端な魔剣を持っていた。特別な才能がないことが魔剣所持の条件。つまり、少年は特別な力は持たないただの少年。ただし、彼の境遇は決して普通ではなかつた。そしてこれからも…

序章 ハラグロキャラ説明を兼ねているから序章が長いんだよね。（前書き）

間違つて短編に乗せてました。これからゆっくり更新していきます。
作者はビギナー。冷やかし、中傷、苦情はお断り。

序章 ハラグロキャラ説明を兼ねて いるから序章が長いんだよね。

みなさん、こんばんわ。俺の名前は月野ツルギです。

一応、小学生三年か四年生だ。なんであやふやなのかといふと、拉致されたから。

幼稚園の頃に。

身内に。

母方の祖母に。

特訓という名の拷問を受けたから。時間の流れに鈍感になつた。教育という名の洗脳を受けたから。精神が早熟した。諦めの意味を知つた。

修行という名の虐待を受けた俺はこれといった特別な力は何一つ手に入れることがなかつた。ついたといえば、瞬発力とスタミナ。反復横飛びには自信あるぜ。それ以外？…ないぜ。ちなみに反復横飛び端から端までの距離は一般人の平均ぴったりだぜ。

あ、忘れるところだつた。あと、危機察知能力。要するに「…嫌な予感がする」というのが直感的に感じ取ることだ。それを避けきれたことは一度足りとてない！…忘れていたかつた。

拷問のあつた最後の晩に俺は「お前本当に才能ないから、従兄弟のサカサの手伝いしてこい」と祖母に言われた。それから一年間、サカサの世話（家事手伝い）をすることを条件に解放された。あの拷問から解放されるのなら俺はなんだつてできる。

従兄弟のサカサは二十歳になつたばかりの研究員で後に世界に五人しかいないとても偉い科学者だと判明した。茶髪のロン毛で後ろから見ると女にも見えることもある程体は細い、背も高く、イケメンで、文武両道、いつも白衣と色の濃いサングラスをついている。常に周りにきれいなお姉さんを連れていたプレイボーイ。だが、同じ日本人の月村というお姉さんに近寄らなかつたな。何故だろう？　凄い美人なのに。本人いわく「なんかやばい」らしい。サカサに連

れられて世界中を旅しながら様々な研究施設を巡った。

その間にホテルでテロリストが襲つてくる。ジャングルで猛獸に襲われる。ハンターに間違つて撃たれる。その娘にも撃たれる。中でも一番ひどいのは

ある遺跡調査中で

サカサ「トラップ発動！ツルギが咳き込むことにより」の遺跡に入っている人は生き埋めにされる！」

ツルギ「俺のせい？！ゴホッ、条件がおかしくない！」

何とか死人は出ませんでした。調査員から白い目で見られた。母さん、実家に帰りたくない…（実家のほうがやべえもん）世界は外も内も俺に厳しいと思い知らされた。…生きていけるかな俺。

しかし、その人も三日前に面白そうな反応を示した町があるからお前行つて調査してこい。と、言われた時、猛獸のいるジャングルなのか、何もない（水もない）砂漠なのか、白銀（白熊と氷の世界でサバイバル）の世界、南極なのか。と、思案していた。

注意：クマがいるのは北です。

びくついている俺が聞いたのは日本だった。しかも実家からは離れた海鳴市というところらしい。以下、夕方の便で日本に帰国して空港から海鳴市までに行くまでの出来事です。

サカサ「住む家、家財、その他もう準備しているから、一人でのんびりやついていいぞ。金は気にするな。腐っているやつをやる。いざとなつたら月村を頼れ」

ツルギ「…そこ腐っている金って。どんな金だよ」

「腐れ外道から鬼畜な真似してぶんどつた金だから。まず土木用ハンマーで相手の行動を…（省略）：ん、ツルギ。どうした？」

「（ガクガクブルブル）お前、人間が考えられる拷問という拷問をしたのか。情状酌量の余地なしで死刑は確定だろ。人を殺しても殺されるぞ。いくら相手が人の不幸を主食に悲鳴をおかずにしている身内のような奴だからって、ん？（嫌な予感がする）」

キン。

まるでグラスを弾いたかのような音が響くとあたりが急に暗くなつた。次の瞬間。

ズドオオオオオオン！

俺とサカサの横を三角錐のようなものが通り過ぎ、五メートル前にあつた電柱にあたり、爆破炎上した。

「あ、花火。日本に帰ってきた感じだな、ツルギ」

「ンなわけあるかつ！どう見てバズーカーランチャーの砲撃だろう！こんな日本、テロリストが普通に出てくる空港なんて俺は嫌だ！こんな近くで人を殺すために放たれる花火なんか大嫌いだ！」

俺がわめいているとサカサは足元に置いていたケースから一メートル以上はする黒光りの大剣と手のひらサイズで琥珀色に染まつた水晶玉。その水晶には三本の弓矢がまるで魚のように動いていた。

「はつはつはつ。よし、早速この試作機でも使うか。なんかこの間見つけた変な石に妙なエネルギー反応があつたからそのまま動力

炉代わりにした。凄いぞ、みんなの憧れ。空を飛ぶことが出来んだぞ。…首が（ボソッ）」

「今、物騒なこと言わなかつたか？」

「言つたよ」

「否[定]しろよ、この野郎つ。て、なんで俺に馬鹿でかい剣を渡すんだ。よく警備の目をこまかせ「手回しした部下がいるからな」た、おいつ「[冗]談だ。札束で目と口を開じさせた。最後は銃で「もつと駄目だろー」」

チュドオオオオオン！

「今度は反対側の道路から爆音が鳴り響いてあたり一面が炎に染まる。

「たく、またあの国からの技術提供申請か？ようし、くれてやろうじゃないか。俺の技術の結晶を。ミネルヴァ起動「リョウカイ、テキノセンメシヲサイユウセ」違うぞミネルヴァ非殺傷モード。「リョウカイ」非殺傷レベルでないとあとで尋問（食事）が出来ないじゃないか」

ジャリイイン。

鎖がしなつたような音が響いた次の瞬間、サカサの左腕は丸みを帯びた白いガントレットで被われる。左手の甲には三つのビー玉（赤、青、黒の三色）のような物がはまつてあり、なおかつ機械的な白のボーガンがついていた。

「しばらく絶食（注：人の悲鳴や苦痛に満ちた顔も見ることを食事。見ていないことを絶食と月野の一族は使います。ドゥナ一族です）してたと思ったら、お前こうなることわかつていただろ。はあ、もう、その機械的なボウガンもどつから出したんだよ。なんで喋るんだよ。というかそれとこれが狙いで来たんじや」

渡された剣は見た目と違いかなり軽い。それでありながらものすごく硬そうに見える。明らかにこれもオーパーツもしくは最先端技術を使っているのが分かる。

何でボウガンが喋ることにそんなに落ち着いている？決まっている、それ以上に驚きと脅威を月野の家。そして、サカサの手伝いをしていると嫌でも落ち着くからさ。西洋の屋敷にあるガーゴイルって石像を知ってるか？関西弁で喋つてくるんだ。とてもシユールだつたぞ。

「まあな、壊れかけていた機械がオーパーツだったから俺なりに回収修理したら、なんか昨日の夜から喋るようになった。新しい相棒だ」「ミネルヴァデス。ヨロシクデス」。まあ、カタコトだけどな。その大剣はミネルヴァよりもさらに深い層で見つかって、尚且つ百パーセントオーパーツ。ミネルヴァの話じゃお前ならできるんじやないかと言われてな。というか、発見したのが恐竜の時代よりもさらに深い層だからミネルヴァよりもレアで不可思議なのは確実だな。ミネルヴァ、ツルギのサポートと素敵。あと結界内の敵勢力の把握

「リョウカイ」

白いガントレットから淡い光の球があたりに飛び散る。白い光の球は空港内の炎や瓦礫の間をすり抜けていく。そして、いつの間にか俺の足元には幾何学的な模様の円陣が描かれる。周りは瓦礫に囲まれているせいか、ここからだと誰がどこにいて、何がどこかわか

らない。

「それより空港なのに俺たち以外に人がいなのは、その結界とやらのおかげか？」

「ああ、緊急的な避難や物資の補給用に作り上げた。任意の人や物以外は入れない空間。いわゆる避難空間なんだが、どうやらやつこさんは暗殺用に仕立て上げたらしい。結界内で起こったことは生物のダメージや生き死に以外はすべて元に戻るからな。たく、リオストーンを見つけ次第仕掛けてくるとは思つたが存外早かつたな」

やれやれ。と言わんばかりにため息をつくと

「ツルギ。ナマエヲ。ソノコニ。サカサ、テキタイセイリョク、ジユウゴ」

「名前? 無いのか、この剣。てか、俺でいいの」

「ほかに信用できる奴がないんだよ。俺は月野の人間だが武術はてんで出来ない。できるのは医療とか毒ガスとか重火器とかハッキングとかなら使えるけど…。お前ならギリギリ肉弾戦でも勝てる。他の月野の人間に渡したら国が一つ滅ぶ」

十分だと思うぞ? うちの家系でパソコン使えるのは俺とおまえぐらいだし。てか、俺になら勝てるって、どういうことだ! そのままの意味ですか(泣)。どうせ、根性オンリーですよ。畜生、たしかにお前の腕なら死人でも生き返らせそうだけじよ。神様は才能を当てる人を間違っている。しかも与えすぎだ。チートだ。

「!! ネルヴァ、会話からするとお前の仲間だこの剣。お前がこ

の剣を知っているんじゃないのかよ

「ワタシハ、サカサ一、アウマデノ、キオクガ、ナイ、デス。セイカクニハ、シュウリ、サレルマテ、デスガ。ソレー、ワタシハ、サカサカラ、モラッタ、ナマエヲ、キニイツティル、デス」

「そうか、それじゃあこいつの名前は避来矢 ヒライシ なんてどうだろ?」「

避来矢。

昔、ある都で大暴れしていた巨大な人食いムカデを倒した恩賞として、武将が川に住む龍の神様から頂いた鎧。その鎧は持ち主の体に傷をつけることなく度重なる戦をぐぐり抜けたという伝説とされた甲冑の名前だ。その名の通り、放たれた矢が何故か甲冑には当たらない。まるで矢が避けていくようなことからあらゆる災難を躲してくれる素晴らしい防具の名前だ。これは剣だけど甲冑と同じよう守る武具になってほしい。

「…ヒライシ。イイナ、デス。アリガトウ、ツルギ」

ミネルヴァはいい子だね。サカサから今のうちに取り離したほうがいいかもしれない。この性格破綻者から。こいつの性格が感染しないように祈つておこう。むつ、右後方から殺意が

「+ * % # !」

炎の中からスース姿の男が銃を（トカレフだつたか?）を発砲してきた。

バンッ。

ふつ、甘い。お前の気配は少し前から読めていたのだよ。その場にしゃがんで弾道を回避する。サカサは捕獲対象であるから滅多なことにはならない。というか、酔鈍で眠らそうにもあたりどころでは死に至る。となれば邪魔な俺だけを殺せば、サカサの相手が楽になる。しかし、俺からしたら弾道なんて、発射される角度を見ればわかる。テロリストに襲われるなんてことを何度も経験すれば、……何度も経験したらわかるんだよ、ちくしょおおおおー！

チューイン（近くの瓦礫に当たり跳弾する弾丸）

バキイツ（跳弾した球が俺の真上にあつた看板の一部を碎いた音）

グチャ（壊れた看板が落ちて俺をつぶした音）

そうです。俺は嫌な予感はしても「んな感じに一度避けきつても一次的な被害をこらめるのです。

ガクリ。

ツルギが潰れたのでここからはサカサ視点に移ります。

「...*.-」

「ああ、うぜえな。こんなに明かりをいわいと灯しやがつて口つて言葉知つてんのか、お前ら」

せっかく面白動画を間近で見て陽気だったのに一気にクールダウ
ンだよ。

「…ヒライシ、キドウジユンビカンリョウ。ケツカイ、コウコウ、
ハンイ、メノマエノ、オトコノ、ハンケイ、イチキロ。ヒライシ、
スタンバイ、カンリョウ。ツルギ、ガ、ナヲヨブダケテ、ジドウコ
ウシン、スル、デス」

ツルギは見た感じ氣を失っているが重体ではないな、むしろ軽傷
に近い。調べたら命や脳に異常があるかもしれないがまあ、何とか
なるだろ? それより、こんなにも興味のないマネをするとはこいつ
ら使いないバカなんだな。

「*・^—。・サカサ博士、我々とともに

「うるせえ。ミネルヴァ、連白の矢。遠い奴から射づける

左手に付いたボウガンをツルギに銃を撃つたバカに向ける。

「リョウカイ、レンパク、ハッシャ」

シユ。

布がわずかにこするような音が鳴る。ボウガンからは矢の形を
した光が男に向かって発射される。

「つ！」

「メイチュウ、レンケツ、サクテキ、サイカイ」

男は腕を盾にするかのように自分の顔と胸を抑えるが、何事もなかつたかのように光の矢は男の体をすり抜けていった。ただし、その光は薄紫色になり、背中から軌道を残している。男はそれを知らない。

「く、くはは。あなたのよくな頭脳を持つ人でも失敗はするのですね。博士」

「…ニ、サン」

半径一キロメートルの結界内を紫の光が瓦礫や炎の中をすり抜ける。結界内にいる人間の数だけミネルヴァはカウントを重ねる。そこに気づかない男を見てサカサはため息をついていた。

しかし、バカだね。こいつ。まあ、ツルギが特別面白いバカだから仕方ないか。あいつみたいに【才能がまるつきりないバカ】じゃないからここまでつまらないんだな。

「どうやら、それはただの子供のおもちゃですね。ですが、あなたの発明には驚かされます。常に百年、二百年先を見通しているかのように作り上げる兵器は最高のものですよ。まあ、あくまで兵器だけですけどね」

「ロク、ナナ」

そして、よく喋るなこいつ。ミネルヴァがカウントしていることに気づいていないんだからな。まあ、あっちこっちで悲鳴が上がっているから聞こえないのか。ということは何人か一般人を巻き込んだな。まったく。

「ああ、妙な氣を起しそうでござりぬやうのやうぢやを下げてくだ」

「お一けー、わかつてゐるからもつ牒るなつぜえ」（ミネルヴァ、カウント終了とともに赤犬発射）

「ジユウ、ジユウイチ」（カウントハ、ドウシマスカ？）

頭でものを考えるだけで意思疎通ができる念話といつものをしながらミネルヴァに指示を出す。男は俺の態度に腹を立てて「もうしくミネルヴァのカウントに気づく気配すらない。まあ、ここまでバカだとこいつはそのままの向ひの側にいるやつもバカなんだろ」。

（あいつが氣づくまでやつてみ。まあ、もつそろそろ終わりだろ）

（リョウカイ、ア）

「どうした？」

「ジユウ」「ジユウロク」

「ああ…」

ミネルヴァが何やら異常に氣が付いたらしい。そしてその反応に俺は声を出してしまった。やべ、念話に慣れてないからつい声に出しちまった。

相手側も不審がつてこるようだ。こにはもう少し時間を稼ぐか。

「はやく、拘束しないのか。まあ、警戒してるのはわかるが今俺はお前のいう玩具しかつけてないぞ」

「…いいえ、あなたは嘘をついている。あなたがこのまま済ますはずがない」

まあ、その通り。ということはこいつ、この間取り逃がしたテロリストの残党か。たしかあそこの国は…。

「ニジユウ、ニジユウイチ」（イノチニベツジョウハナイデス、ガ、イッパンジンガ、マキコマレティマス、デス。ハッポウイシ、ナナ。イカク、サン。サツイハ、ゼロデス）

やつぱり一般人がいたか。まあ、こんな派手なことをしながら威嚇のほう確率高いとはけつこう気のいいバカもいるもんだな。こんな大規模なことをすれば皆殺しは確定なのに。

「人質がいます。ついてきてくれますね？」

「はあ？ 断る」

「…やれ」

何で見ず知らずの役立たずの人の為にお前についていくの？ バカか。俺はそんな人間じゃないっての。そんなバカは月野の人間ではツルギしかいませんよ。皆、親しい人間以外に対しては、特に敵に対しては鬼畜ですよ。

ドオン。

「ニジユウサン、カウント、シュウリョウ。アカイヌ、ハッシャ、ケツカラ、クラウ」

カウントと銃声が鳴り終えると同時にガントレットにあつた赤いビー玉から色が失せてガントレットと同じ白になる。

(イチメイ、フショウ、セイタイ、ハンオウ、イジョウナシ。ツギ、サツイ、ハチ、イカク、二)

(ほう。珍しいな。今、銃を撃つた奴はミニアムだ。残りはレア、そいつを食つか)

大きなものが地面に落ちたかのような音がすると、結界内の悲鳴がさらに大きくなつた。

「どうやら、もう一人殺さないといけないようですね」

ズドオオオオオオーン！－ズガアアアアアアツ！

[ジムウエーブ、ジムウカン]

先ほどよりも大きな轟音が結界内に鳴り響き、悲鳴が悲鳴を呼ぶ
という連鎖が起こる。

〔ジュウ一、ジュウイチ〕

「おやおや大変だ。どうやら一人死んでしまった」

あざ笑うかのように男が汚い顔で笑う。まるで罠にかかったウサギを見るような目で。あ、やつぱりバカだ。人を殺すのにあんな爆音が出るものは使わないだろう。

そう思つたんびに。俺は少し興奮していた。

「いいや、死者はゼロだ」

ヒィイイイイイイイ、バ、バケモンダアアアアアア。

「キュウ、ハチ」

「氣でも狂いましたか？博士。つ！」

俺は笑つてゐるんだろう。自分でもわかる。氣が狂う？ ああ、お前らのいつ通り狂つてゐるぜ、お前らからの觀念からいえばな。

ドゴオオオオオオオオンツボゴオオオオオオオオンツ――

「な、何だつ、どうしてこんなに爆音が近くで。な、何ださつきからのカウントは」

「ゴ、ヨン、サン」

ミネルヴァのカウントがゼロに近づくほど爆音と爆炎と悲鳴は俺たちのほうに近づいてくる。そして男もよつやくミネルヴァの声が聞こえたようだ。

「なんであなたは笑つていられる……？」

「二」

ガオオオオンツヅウドオオオオオオオオ、ズガガガガツガガツ
ガガ！！！

「お、気づいていたのか。せつかくだ、最後まで聞いていけ。ミ
ネルヴァ。赤犬をこいつの前に」

「リヨウカイ、サカサ」

ギャアアアアアアアツ！！

ミネルヴァの同意とともに後ろの瓦礫から悲鳴と爆炎が舞い上が
った。

「イチ」

さあ、食事を始めようか。

テロリスト視点からお送りします。

「ゴ、ヨン、サン」

日本語で何やら変声機を使つた声に気が付いたときは多くの仲間
と連絡が取れなくなつていった。そして、ターゲットである博士も笑
つていた。調査資料によるとこんなにまで顔を歪めているところな
ど一度も確認されていない。まるで悪魔のように笑つて…。

[]

カウントは残り一つ。まるで私の命が尽きるのを数えるかのように。この圧倒的不利な状況でなぜ彼は笑つていられる。

キヤ
ア
ア
ア
ア
ア
ア
ツ！

〔八〕

「か」が「か」で、金事の罷を始める。

これは夢なんだろう。しかし、炎の熱さは変わらない。
これは幻想なんだろう。しかし、振るえは止まらない。

これは現実なんだろうか。そうだ、そうでなくしては右ひじから無くなっている。この痛みは感じられない。

んだと。

三メートルはある炎の魔狼が仲間の一人と私の腕を睨み、前に現れた時、私は笑っていた。もう、終わりだと…。

それから私の四肢は炎の魔狼に焼かれ裂かれ食われてしまつた。まるでこの意識を最後まで残していくように。さい、ご、には

も...え、
て

•
•
•

「なあ、お前。もしかしてこれで終わりと思っていたのか？」
意識が戻る、赤に戻る。これは夢じやない。現実は終わらない。
終わらせてはくれない。

「殺して、頼む、もう、俺を殺してくれえええええええ
ええええええええええええええええええええええええ
ええええええええええええええええええええええええ
ええええええええつ！……！」

サカサ視点

「ま、こんなもんか」

赤犬をミネルヴァの中に戻し、手のひらサイズの水晶に戻す。
廃人と化している男をひっくり返して、その懷から結界を張つて
いたリモコンを拝借、操作し、結界を解除する。すると結界内では
瓦礫と化していた空港が何事もなかつたかのように元の平和な空港
へと変化していた。

「ソノニンゲンノ、ツミト、アナタノ、シコウ、ニヨツテ、ゲン
カク、ツウニ、ヨル、カリヨクヲ、チョウセイスル・アカイヌハ、
イツミテ、モヒドイ、デスネ」

おおう、いきなり索敵と赤犬。ツルギのサポートのおかげでミネ
ルヴァがバグりかけていた。ミネルヴァもう寝てていいぞ。

「ラ・ジャアアア」

ツルギも寝ているし、見たところ頭が悪いし運もないし顔も悪いし。
…いつもの通りだ。

「…てめえ」

ツルギよ。氣絶していながらもツッコミを欠かさないのはすごい
な。

しかし、このままじゃ、ここに普通の小学生はできやうにない
な。仕方ない。とりあえずいったんとんぼ返りでもして、こんな
馬鹿な真似した奴らの頭でもつぶしていくか。

問題はツルギヒライシをどうすべきか？目的地のアパートに郵
送でもするか。

そんなことを考えていると、後ろの空港入り口から誰かやってき
た。

「あれ、もしかしてサカサ君。…と、ツルギ君！」

「ん？あ、バーニングスさん」

そこにはイギリスで知り合った世界屈指の大富豪バーニングス氏と

「ツルギ？！なんであんたが日本にいんのよつ、通行の邪魔よ！

！」

その娘、アリサ。そつ、彼女たち親子はイギリス初となる月野剣
を射撃したハンターである。

「誰がハンターよ！」

というか、見てとれるようにツルギは頭から血を流しているのに
だけとは、この子も月野一族なんじゃないか。

回想にまで突っ込みを入れるとは。恐るベシバニングス。

序章 ハラグロキャラ説明を兼ねて いるから序章が長いんだよね。（後書き）

序章終わり

ツルギ・アリサ「『長すぎると…』」

たかB「しゃーねえべや、キャラ紹介と原作ブレイクの為にいろいろやつたらこうなった」

サカサ「まあ、俺は構わないよ。主人公より目立てたから」

ツルギ「目立ちすぎー！そして、怖すぎー！作者ああ、これリリカルなのは一次にしてもいいの。初心者なのに」

アリサ「原作あんまり知らないくせにつ」

たかB「何とかなるぞ」

サカサ「ところで赤犬とかいう魔法、あの某力ナヅチ海賊漫画の」

たかB「断じて呑み、オリジナル魔法です」

ミネルヴァ「ジャア、ドウイウマホウ？」

アリサ「どうせチート仕様でしょ。一次につきものの絶対必中とか」

たかB「そうでもないよ？まずサカサの最初に使った連泊の矢。あれはただの索敵用。半径五キロ以内の人間を敵・味方・どちらで

もない・絶対ブツコロ・最高のおもちゃの五段階に分けられるよ。ちなみにこの弓矢は何でもいいから魔力を当てたりするとすぐ消えるし、当たつてもダメージゼロ。ホームング機能はついているけど頑張れば子供でも避けることが出来ますよ。スピードもそんなにないしね」

サカラ「ふむふむ。つまり、視界が悪い夕方の空港で連泊の矢は見づらく、魔法使い対策がなされていなかつたから、または魔法使ひがいなかつたからワンサイドマッチになつた。と

たかB「そそ」

アリサ「じゃあ、あの薄紫色の矢の跡は?」

ツルギ「赤犬は?」

たかB「順番にねー。まず、薄紫の矢なんだけどあれは【最高のおもちゃ】のペインントなんだ。ゲームで言うとモンスターのボスにペイントをつけた状態と思つてくれればオーケーです」

ミネルヴァ「ホカノ、イロダト、ドンナカンジ?」

赤：敵

青：味方

どちらでもない：黄色

絶対ブツコロ：黒

最高のおもちゃ（ツルギ）：薄紫色

たかB「」んな感じ。あれ…？」

サカサ「ん？（黒い笑顔）」

ツルギ「どうした？（注意：本人は気づいていない）」

アリサ「…次に行くわよ」

たかB「（コクコク）さて、赤犬なんだけどまづはこの公式を見てほしい」

赤犬に襲われた人の罪悪感×サカサ独断の法律÷（サカサの慈悲+1）＝幻覚痛。

アリサ「なにこれ？」

ツルギ「なんかの公式？」

サカサ「なるほど。要は試せといふことか。ミネルヴァ、赤犬」

ミネルヴァ「アカイヌ、ジュンビ、カンリョウ」

たかB「どうせ、次でネタバレするんだし目標はアリサで」

アリサ「つーあたし！ツルギじゃないの？」

ツルギ「…ああ、あれか」

アリサ「なによ！」

ツルギ・サカサ「「銃撃」」

ミネルヴァ「アリサ、ヒトゴロシ、ミクナイ」

アリサ「あんた、自分の主人に言いなさいよー!」

たかB「一応、まだサカサもツルギも人一人殺していないよ」

ツルギ「まだ。て、なんだ」

サカサ「俺もだ。というより殺さないぞ。ムカつくやつほど俺は殺さないぞ(楽しめないから)」

ミネルヴァ「アカイヌ、ハツシャ」

アリサ「きやあああああ」

たかB「おお、アカイヌがライオン並の大きさでアリサに向かっていく。幼女が猛獣に襲われる」

ツルギ「おいおい、やばくねえ」

サカサ「いや、あれは」

ふにふに。

アリサ「え?」

ミネルヴァ「ヌイグルミ?」

たかB「つまつ」「う」「う」と

赤犬に襲われた人の罪悪感×サカサ独断の法律÷（サカサの慈悲

+1）＝幻覚痛。

（ツルギを撃つた罪悪感＝ライオン）×（サカサから見た罪の重さ。まあチョップ一回でいいよツルギだし）÷（むしろ面白いものを見たから80点+1）

=ライオン×チョップ一回÷81で

ライオンのヌイグルミチョップ一回分。の幻覚ダメージを受ける。

たかB「サカサの慈悲が70以上だとどんなに強そうな魔物もヌイグルミになります。襲いかかってくる赤犬の大きさ＝罪悪感の大きさです」

ツルギ「…俺って」

アリサ「サカサ…あんた」

ミネルヴァ「ワタシハ、アリサ、ノザイアクカンガ、スゴイト、オモウ」

サカサ「ああ、俺も凄いと思う。ライオンは最高レベルだからな」

ツルギ「…え」

アリサ「どうこう」と?」

たかB「えーと、たしかこれも五段階で上からライオン・鷹・赤犬（大）・赤犬（小）・ハムスターになっています。テロリストより罪の意識が高かつたみたいですねアリサさん」

ツルギ「…………」

アリサ「なんでそんな田をするのー・田畠の涙流すの?」

ツルギ「結婚してくださいー!」

アリサ「いやーーーー?ー!」

サカサ「おおひ、まさかの逆フラグ」

ミネルヴァ「マダ、ゲンサク、ヒロインガ、デテナイノー!】

たかB「一応本編とは関係ないので行けるといつままでいつてい
ですよ」

アリサ「止めないの?ー!」のバカ主人公!ー!」

サカサ・たかB「「面白!そりだし」

ミネルヴァ「みたいし】

アリサ「ミネルヴァ、あんたまでつ、なんでカタコトじやないの
つ」

ツルギ「俺を幸せにしてねー!」

アリサ「ふつう逆でしょおおおおおー!」

ミネルヴァ「チナ!!!、アカイヌ、ノイイメージハ?」

たかB「狼。毛皮の部分が燃えている感じに思つてくれ」

次回 第一話 もう少し短くまとめるよ

サカサ「これって、田標?」

たかB「はい」

第一話 もう少し短くまとめるよ（前書き）

たかBからの追加補足。

「避来矢のイメージは西洋の剣。ブロードソードといった方が想像しやすいかもせんが刀身は一倍近くの1・5メートル。幅が0・8メートルのかなり巨大な剣です。刀身から柄まで黒一色。モンハ〇の大剣をイメージして読んでくれれば幸いです」

第一話 もう少し短くまとめる

「で、ツルギ君。君はここで本当にいいのかね？」

「はい、構ないです」

氣を失った俺はバーニングスさん親子の車で目的地であるアパートまで送つてもらつた。時刻は午後十時前。サカサは空港で俺のことをこの人たちに任せて何やら出国手続きを行つてゐるそうだ。こんな夜中に子供を一人にするなど考えられない。と思っていたバーニングスさんが、そこまでお世話になるわけにはいかない。後からサカサから安全（テロリストの殲滅、及び繫がりを絶つまで）確保ができるまで行動を共にしないのがベストだ。

「頭の怪我は言いわけ？」

「構わないで、アリサ」

思い出すだけでも恥ずかしいんだ。

「それにご飯はお風呂は着替えは、ていうかあんた学校に行くの、市役所に行つた、お金はテレビはそれから

彼女とはイギリスの山奥で知り合つた。ちょうど熊狩りが解禁になつた山で彼女たち親子に獣と間違われ、銃で撃たれてた時に知り合い、たまにサカサとアリサの親父さんの会合の間、子供たちである俺らは近くの公園で遊んでいた。そのせいもあってかアリサは俺に遠慮がない。

「ああ、大丈夫です。生活面はばっちりです。伊達にジャングルや氷山に登つてつてませんから。心配してくれてありがとうござります」

日本での野宿なんて簡単ですよ。猛獸はいないし、いきなり銃を突きつけられることなんてないだろうし。…あるかも。

「心配なんかしてないわっ、ただ、あんたが夜中にお腹をすかせてコンビニに行つたところで、深夜の路上で野犬に襲われて、その野犬がお腹を壊さないか心配なだけよ」

心配はそっちかよ。

パニングス親子が帰るのを見送つて、俺は改めて自分の寝泊りするマンションに入つた。

しかし、一戸建てを借りるなんて小学生では大きく過ぎるんじや。周りは雑木林で周囲一キロ民家どころか何のお店もない林の中にポンとある一戸建て。マイクロバス四台は止まれそうな駐車場。あまりに豪華すぎる…。そんな疑問もありながらため息をついた。部屋のカギを開けると家電。生活雑貨の詰まつた段ボールが三箱ある。その中に黒い小さな金庫があつた。が、それは隅に置いておくことにした。段ボールから取り出した布団を敷いて今日は早々に眠ることにした。

グーグーグーグー。「キュンキュンキュン」はつ、嫌な気配。

眠りに入つてまだそう立つてない頃、外から何かが大きく回転しているような音に目を覚ました。音がするのは玄関ドアの向こう側。すつごく開けたくないけど。

「…どちらさま。て、近い近いっホバリングが近い！」

「おー、ツルギ悪いナビ!」これのこと頼んだ。あと忘れもんだ。受け取れ

迷彩色のヘリコプターがマンションの駐車場でホバリングしていた。どうやら、そこは駐車場ではなかつたらしい。その乗り降り口にはサカサが一台のパソコンと避来矢を持つてなんか言つていた。

「これから「キュン」のと」「キュン」行って「キュン」をして
く「キュン」から。任せた。「キュン」テロリストは「ピー」を「
ピー」で「ピー」したから大丈夫

そう言葉を残すと「出してくれ」とサカサの言葉に従いヘリは上昇していく。サカサがパソコンと避来矢を放り投げると迷彩色のヘリコプターは深夜の空に消えていった。あと、会話の途中でホバリングの音じやなくて放送禁止用語で規制が入ったのは気のせいだろうか。

従兄弟のとんちんかんな行動に目が一発で覚めた。ちくしょう、今度こそ寝てやるからな。パソコンとヒライシは明日だ明日。あのテロリストに明日は来るのは…。来ない方が幸せか。

そして深夜二時。にも関わらず俺は布団に入つてはいなかつた。お腹が減つたのでコンビニに行くことにした。だつて、丸一日まと

顔を赤らめてそっぽを向くアリサはかわいらしく見えた。が、帰り際にあんなピンポイントなことを言われたからだろうか。弁当を買った俺は外に出たとことを後悔していた。

「本当に遭遇したああああああああああああああああ！」

なにこれ、フラグだつたの？

一匹の大型犬に追われ、必死に民家が立ち並ぶ道路を疾走してい

た。深夜一時だからか人っ子一人いない。

ギャルウウウウ、グオウゴウガウゴウツ。

しかも追つてくる野犬があまりにも常識はずれな風貌、とにかく
デカい。毛皮が分厚い。微妙に動いていないか、なんかこう炎みた
いに。

？？？「こっちだ

ん、人の声？

？？？「はやくっ」

人の声がした方向を見るとそこに喋る黄色いかまぼうとフチトマ
トが落ちていた。

：なんで？

しかし、考えている暇はない。

かまぼこ？「早く。つ、きゅえつ」

全速力で野犬から逃げ出しながら、俺はその黄色いかまぼこの
真ん中を掴み、

かまぼこ？「ちょ、ちょっと」

百八十度ターンをしながら追つてきた一匹の野犬にぶん投げた。

かまぼこ？「う、うわあああああつー」

「すまん。かまぼこ。お前の犠牲は無駄にはしない」

「どうやらアパートも一緒にくつこむようだし一人では死はないよ。よかつたね、かまぼこ」。

後にこれが引き金に白い死神と戦うなんて思つてもいなかつた。

かまぼこ? が一匹の野犬当たると、当たらなかつたもう一匹の野犬に噛まれた。その隙に逃げ出そうと再度全力疾走する。そして俺は見事逃げ切ることに家まで成功した。
そう家までは。

「はあ、やつとつー」

ドアノブを回し、足を踏み入れた瞬間だつた。

「がつ

背中に強い衝撃を受けて思わずそこへ倒れこむ。背中に当たつた物体は勢いそのままに部屋の中に入つていつた。

すぐに立ち上がると黄ばんだ歯がすぐ目の前に迫つていた。

「危なつー」

思わず両手を使ってその牙をもつ口を閉じる。泥くさい匂いが鼻を突き刺す。そこでようやく自分の背中にあたつたのが先ほどの野犬だと気付いた。もう一匹とは離れてしまつたようで背中からは何も気配を感じない。

「おう、うひうひゅああああ、なめんなああああー。」

こう見えてもサバンナでジャッカルの群れと格闘したことがあるんだよ。負けたけど。レンジャーの人がいなかつたら死んでたな俺。体を半回転ハンマー投げのようにして犬を再び、玄関の外にぶん投げる。投げられた犬を確認してから急いでドアを閉めて鍵、鎖をかける。

「えーと、あ、あつた」

散らかった段ボールの下に黒い剣 避来矢 を手に取る。そして、ドアに向かつて剣を構える。こいつであの野犬をたたいてやるぜ。ドン、ドカンッ。ドアに野犬が体当たりしているのか、ドアにぶつかるたび亀裂が入る。

「てか、室内で避来矢は圧倒的に不利じゃ」

絶対に部屋のどこかにぶつかるし。と、考えていたら避来矢にわずかな振動が走る。

「問題零。遠慮無用。状況把握」

振動とともに頭の中から何とも拙い声がする。骨伝導？

「否定。我、所持、汝、主。許可、要請」

許可？何の？てか、誰？…まさかっ。

「肯定、我、黒ノ大剣。避来矢。主ノ剣、認可、要求。…了解？」

「この声は避来矢！？なんかすごい堅苦しい感じの剣だな。というか機械の武士？騎士？凄い真面目そうなやつだ。

「主…」

不安そうな声を出すな。俺なんかでよければこれからよろしく、
避来矢。

「了解！主、目標、撃破、優先？逃走？」

決まつてんだろそんなこと。

ドン、バカン。

錠前が壊された。あと一撃で扉はごじ開けられるだらう。その前に避来矢に伝える。最初の命令。それは、

ズガアアアアン！

扉が壊されると同時に野犬が飛び込んでくるがそれに合わせて俺も野犬に向かつて踏み込む。

グゥルルオオオオオオオオ！

「ぶつ飛ばすぞっ、避来矢！」

「了解！目標、無力化、最優先！」

野犬がドアを突き破って、玄関に足をつける前に避来矢を下から上に掬い上げるかのようにフルスイング。再び玄関の外に追い出し、

俺も外に出る。

ギャンツ。

野犬は悲鳴を上げて表にある駐車場に転がるが、すぐに起き上がり俺を睨みつけ、威嚇の声を上げる。威嚇するたんびに野犬の毛皮が一段と盛り上がっていく。そして、その姿を暗闇に溶け込ませる。野犬を一瞬にして見失うが、

「主、頭上！」

「おひつ」

避け矢が野犬の居場所を教えてくれる。その指示に合わせて避け矢を振る。

「左側方」「はつ」「右後方、足元」「せい」「臀部」「で、え？」「尻」「うおおおお、危なかつたあ」「正面」「ぜえいやつ」

野犬の攻撃を避け矢の指示で回避しながら時折、避け矢の腹の部分で殴打する。が、このままだと……避け矢。俺の考えていることが分かるなら次で決める。今度、俺の上半身を狙ってきたら、飛び込んでくる方向だけを教えてくれ。

「主！作戦、変更、推奨。別：」

悪いな避け矢。これ以上長引かせたら相手に逃げられる。野犬、猛獸は自分の攻撃が通らないと学習すると一目散に逃げる。ライオンやチーターが象の子供を襲わないように彼らの牙や爪が通らないから襲わない。もし、ここで野犬を逃がせば、他の人を襲う可能性

だつてある。今、ここで、仕留める必要がある。次の一合で決める。

「…主。…了解！」

避け矢の了解も得て、俺は気合を入れなおす。さあ、どこからくる。

グゥオオオオオオオオオオオオオオオオンッ！

「主、正面！」

避け矢の声を聴き、正面へ意識を高めると、あちらも最後の一撃と意気込んでいるのか今までの攻撃で一番鋭く素早い攻撃。その攻撃に合わせて俺は、

左足の裏で受け止めた。

血が噴き出て、肉が避ける。下手すれば骨へと達しているかもしない痛みに耐えながら俺は野犬ごと左足を地面に叩き付ける。

ガフッ。

あまりにも深く食い込んでいるせいだろう。地面に叩き付けられた野犬は食いついた状態のまま押さえつけられる。

「『めんな

そして、俺は野犬ののど元に向かつて避け矢の切つ先を全体重を乗せて突き下ろした。

「ゴガツ。

野犬は苦しんでさらに俺の脚に食い込んでくるが、それも一瞬だつた。野犬は体をしばらく震わせるとクタリと体中の力が抜けたかのように意識を失つた。

「目標、無力化、成功。次。選択。主。扉。修復。又ハ。リオストーン。回収命令。我。回収。希望」

「…ああ、回収たのむ」

いつの間にか首元に押し付けていた避来矢に野犬の毛皮がまとわりついている。野犬とは別に意思を持ち、避来矢に染み込むような動きが何とも不気味な光景だった。

「ヴォン。

まるでパソコンが起動した音を響かせた避来矢は野犬の毛皮を吸い込んでいった。

「了解。回収、開始。……番号、三十三。回収、完了。予備、熱量。使用。扉。修復。開始」

避来矢の声が鳴り響くたびに部屋の惨状が逆戻る。避来矢から放出された青白い光に包まれていく全ての物が癒されていく。野犬なんていなかつたという具合にその摩訶不思議な光景をみつめながら。

「…サカサ、俺に何をさせる氣だよ」

俺は足の痛みも忘れながら、驚嘆のため息をついていた。

ちなみに、それからしばらく経つと、毛皮を吸い込まれたせいで一回りほど小さくなつた野犬は日が覚めると大急ぎで俺の目の前から去つて行った。

「…どうこいつわけだよ。これは？」

〔主、現実。我自身。証明〕

部屋に戻り、散らかつた部屋の中で足の手当^てをし終えた後にパソコンを起動した俺は呆然としていた。

避来矢とミネルヴァはオーパーツであること。これは事前に知っていたことだが、問題は作られた理由が判明。その理由が、

異世界からの災厄を防ぐための兵器。

更にアイコンの中には異世界の災厄が既にこの町のどこかにあるかもしないということ。その災厄を利用している国家があるかもしない。その国家をつぶすためサカサは自分の部下を引き連れ奔走していること。

サカサとミネルヴァは一時的に封印は出来ても、その災厄を鎮めることが出来ることも探知することもできない。しかし、避来矢なら封印・浄化することが出来る。

これらの情報は避来矢に名前を付けたことにより避来矢のブランクボックスの一部が解放された情報だ。解放された情報の中に異世界の災厄。その災厄が凝縮された石。リオストーンの引き起こす怪現象が記されていた。

あの遺跡での崩落事故もこのパソコンに映し出された角ばつた植物のような種で、あの金庫の中にはパソコンと同じ種が二つ入っていた。このリオストーンとやらが原因らしい。

サカサは遺跡でリオストーンを発見。普通に触らうとすると電気を放電するのでダイナマイトで爆破して持ち帰ることにしたらしい。そのかけらを用いてミネルヴァを修理した。ちなみにミネルヴァに使用しているリオストーンは粉々になっていたため避来矢でも浄化も封印もできない何とも不安定なものになった（ミネルヴァ談）。今のところはサカサがこれから毎日メンテナンスをしてリオストーンを抑えていくらしい。

他にも、サカサの部下たちが（世界中にいるらしい）アメリカで身長三メートルを超えるミノタウロス。フランスで五メートルを超える人魚の目撃、撃破したそうだ。この二つはサカサの作った現代兵器（ロケットランチャー及び違法改造したバッテリーを使った長距離レールガン）で仕留めた。そのとき回収した二つのリオストーンを使用し、一昨日にミネルヴァ。今日、避来矢を起動させることに成功したらしい。金庫のリオストーンはその時の物だ。

しかし、避来矢自体起動はしても使えない。パソコンの電源はつくけどメニューを開くことが出来ない状態に近かった。そこで白羽の矢にあたつたのが俺というわけだ。

「…主」

避来矢は申し訳なさそうに声をかけてくる。その声に対しても俺はため息交じりに答えた。

「はあ、まあ。やるしかないよな」

たつた一つしかないアイコンをパソコンから消去し避来矢に向き直りながら、避来矢に金庫の中についたリオストーンを回収させる。

ちなみに番号は一十七と十二だった。

「驚愕。主。質問。何故。疑問、提示、行動、皆無？」

避け矢は俺の行動に疑問を持ったのか、即座に質問してくれる。

「避け矢。俺はサカサに一年間とはいえ付き添つた。あいつはいつもだつて破天荒で女好きなまけもの。それなのには人を楽しませて、いつも人のそばにいたけど。誰一人として心から信じたことがない。自分の部下ですら。そんな人間が俺を頼つてくるなら答えてやるのが入つてもんだろ」

俺は軽く笑い、パソコンの電源を落とし、眠りについた。明日は小学校に顔を出しに行く予定だ。早く寝ないと遅刻するかもしれない。

「おやすみ。避け矢」

「…主」

避け矢はまだ疑問に思っていたみたいだけどこれは避け矢への宿題つて、ことで。

翌朝。田覚めると同時に避け矢に聞きたいことがあったことに気づいた。

「なあ、避け矢。なんで俺なんだ？別に俺じゃないとダメとかいう理由もあるの？」

「肯定。理由。主。才能皆無」

「へ、どうじう」と？

「我。使用条件。才能皆無ノ人間。他ノ才能。所持者。使用不可】

「家事や勉強とかスポーツの才能を持っていたらお前は使えない？」

「肯定」

えーと、わかりやすくいと。

お前は何やっても上達しないし、なにやっても才能ない。何やっても失敗する。つまりバカなんだよお前（笑）まあ、そのおかげで避来矢が使える。 訳：サカサ

「て、ことか。避来矢？」

「…………」

「避来矢」

「……ファイト」

「うわあああああああんつ」

避来矢が初めて普通にしゃべった言葉は慰めの言葉だった。

現在 リオストーン 回収数3 すべて浄化中
避来矢 バリアジャケット展開不可 飛行不可 結界展開不可 認識阻害不可

攻撃手段 避来矢自体を用いた直接攻撃のみ

スキル 物理的修理装置 避来矢自身の自己修復も兼ねているため専門的なメンテナンスが不要となる。また、余ったエネルギーで他の物体を治すことが出来る。生命体には効果はない。

第一話 もう少し短くまとめるよ（後書き）

あとがき

たかB「…疲れた。今回も長かった。目標未達成」

アリサ「で、いきなりネガティブ発言しない！」

ツルギ「すこし間がある分切実なんだろ」

ミネルヴァ「シカタナイ、デス。ワレワレ、オリジナル、デバイスノ、モジヘンカン、ヒトクロウ、デスカラ」

サカサ「まあ、俺はしばらく出る予定がないから少しは楽になるんじゃないかな」

ツルギ「避来矢は殆ど漢字ばっかりだもんな。出番があるたんびに作者は大変なんじゃないか」

避来矢「肯定。作者、変換、下手。主同然。才能皆無」

たかB・ツルギ「「うるせーーーわかってんだよそんなことーーー」」

サカサ「そういうふうやく原作にかかわってきた感じだよな」

アリサ「ツルギが投げたかまぼ」」って…」

サカラサ「まあ、ある意味フラグだよな」

避来矢「想定。主。淫獣。対戦」

たかB「漢字で書くと大変だよな。早口で言つと意味合ひが」

アリサ「それはそれでいいんぢやない才能ないから客寄せにもなるし」

ツルギ「さーせんした（棒読み）」

サカラサ「そういえば赤犬について追加質問いいか？」

たかB「どうぞ」

サカラサ「序章で放つた赤犬。あれ、テロリスト全員を蹴散らしたよね」

ツルギ「でも、ミネルヴァは一般人もカウントしてたということは一般人にも赤犬が？」

アリサ「連泊には色を付けていたからそれが目印なんぢやない」

避来矢「敵。味方。判別後。赤犬。行動。詳細求ム」

たかB「はいはい。たとえばこんな風にカウントしたとしよう」

テロリスト（以下・テ） テ 一般人（以下・？） テ テ ？
テ。

アリサ「ふんふん」

ツルギ「赤犬は最後に最初のテロリストを食つたよね」

たかB「うん。ミネルヴァが言つてたけど ケツカラ、クラウ
は後のほうからつぶすという意味。だから赤犬は」

テ ? テ テ ? テ テ。

たかB「こうなります。さらに連泊の矢は色が違う人から色が違
う人に移ると自動的にその人たちを矢の軌道から外します。つまり」

テ ? テ テ 。 テ テ。

たかB「こんな感じになる」

ツルギ「でも普通なら最初の奴から赤犬にやられるはずじゃ」

避け矢「疑問提示。何故。後続、優先」

ミネルヴァ「サカサノ。シユミ」

たかB「ああ、先に答えられた。まあその通りです。赤犬は連泊
の矢でつながれたとこからならどこからでも召喚できます。逆に連
泊の矢で射ぬかないと赤犬は使えません（この前のあとがきで出た
赤犬はその時だけの特別仕様です）」

ツルギ「…ああ、なるほどね」

アリサ「じうじう」と…」

サカサ「持ち上げられるとここまで持ち上げて、相手を突き落す。その相手作る絶望の顔。俺はそれがたまらなく好きだ」

避来矢「…外道」

サカサ「ちがうだ。そんな小さい奴らと同じにするな」

アリサ「鬼畜ね」

ミネルヴァ「ソレハ、ホメコトバ、デス」

サカサ「ついでだから言うがツルギ。お前の危機感知能力だが、あれ、ほとんどが俺関係だから」

ツルギ「は？」

サカサ「だつて、そうだろ。そんなものもついたら避来矢使えないじゃないか。今までの出来事のほとんどは俺が一時的に敵をまくためにお前を利用した奴だから」

アリサ「…なんといえばいいのか」

避来矢「推薦。悪魔」

ツルギ「いくら従兄弟でも酷すぎやしないかっ！」

サカラ「何言つてんだ。そのおかげでどんな奴とあつても怯まない胆力が付いただろ」

ツルギ「トラウマともいうだろ！」

サカラ「メンゴ」

アリサ「軽つ」

たかB「もうそろそろいいかな」

ミネルヴァ ジカイ、ヨコク

サカラ「おお、あとがき短い」

たかB「疲れたんで」

ツルギ「良い夢見うよ」

次回 第一話 しょっぱいケーキと傷だらけのかまぼこ

アリサ「ヒンヒで殆ど。って、ことは本当に感知したものもあるの？」

サカラ「ああ、あるぞ。とある外国人墓地で…（省略）…の心靈現象は本物。あれは本能に近いな。生き物だったら誰でも気がつく。今も時々…」

アリサ・ツルギ「……え？」

避来矢「主、背後。疑似、生命？反応。有」

アリサ・ツルギ「ギャーーーー！」

第一話 しょっぴにケーキと魔だらけのかまぼこ（記書き）

原作ヒロイン登場。でも、すこません。かなり原作ブレイク狙って
いるので、しまじらへ活躍せなんやつです。

第一話 しょっぱいケーキと傷だらけのかまぼこ

「えーと、これでいいんだよな?」

市役所に行つて住所登録を行つ。この時はサカサから事前に渡されたUSBメモリーを受付の人へ渡したら、五分後市長がタクシーを飛ばしてやってきて、豪華な部屋に招待された。

以下、VIP対応の部屋での出来事をお送りします。

「はいっ、すべてこちらで用意します。あつ、転校手続きとかすべてこちらで、ええ、はい、何もお手間は取らせません。きみつ、はやくここの子、いや、この御方お菓子を。むろん最高級の物を。ああ、すみません。すぐにすぐに手配します。ですから、ですから…」

一泊間を置き、市長は震えながらおれの手を取り。

「…家族にはどうか手を出さないでください」

サカサ。お前は何やつてんだよ。本気で世界征服できやつじやないか。

(主。学ビ専。確認。現在地。ヨリ、距離。1キロ)

避来矢と念話をしながら現在地と学校までの道のりを確認する。

おお、サンキュウ。避来矢。ナビ頼む。

俺は今背中にあの馬鹿でかい剣。避来矢を背負っている。が、周りの人間からは避来矢自体、見えていない。何でも今朝方、リオス

トーンの一つの浄化が終わると、避来矢は機能を一つ解放する仕組みだつた。そしてブラックボックスの一つを解放。その中についた認識阻害のプログラムを起動したらしい。というか、今の避来矢は俺にも見えないんだけどね。目印に剣の柄の部分にとても小さな鈴をつけている（パチンコ玉サイズ）。

別の機能も解放できるらしいがこの性能を他人にばれるわけにはいかない。という避来矢の判断でまずは認識阻害を選択した。

ちなみに残りのリオストーンはまだ浄化中。もうすぐ2つ目の浄化が終わり、防御のプログラム。俺のバリアジャケット（その人にあつた防具）とやらを制作してくれるらしい。避来矢様バンザイ。だが、一つ困ったことがある。

（主。通路。通過。注意。後方。二名。接近中）

それは避来矢の図体の「力」さ。普通の道路はもちろん狭い道なんかを通り際には電柱や人にぶつかりかねないこと。それ違う際には大げさに道を開けなければならぬのだ。おかげで周りから変な目で見られることもしばしば。三つ目のリオストーン浄化でサイズの縮小とかあればいいな。

（浄化、完了。主。バリアジャケット、作成、一時停止。機能、変更、可能。縮小拡大、機能。選択。即時対応可。ガ、選択後。バリアジャケット、作成。完了ハ。明日。深夜。一時。変更後、更新不可。了解？）

うつ、コンパクトにすることはすぐにできるが、バリアジャケットは明日になるのか。防具は欲しいのだが移動しにくい。移動を取るか、防具を取るか。むー、悩むな。

「つ。（何かが避来矢にぶつかる音）

あらわるるるるる。(ツルギがその場で「ママのよつて回転するママ」)

交差点付近で考え方をしていると左後方からやつてきたトラックに
避来矢をぶつけられた。認識阻害が効いているからだらう。トラック
はぶつかったことに気づくことなく通過。俺はその場で「ママのよ
うに大回転。転倒。周りの人の視線が痛い。

ぴっぽー。ぴっぽー。

信号が青になつたようだ。しかし、俺から見れば世界は回つてい
た。前に歩くことは出来ない。そしてほかにやるべきことがある。
それは。

「…今すぐ、更新して」

「…了解」

避来矢の機能をバリアジャケットから縮小拡大に変更することだ
った。

???"×3サイド

???"あいつは何やつてるの?」

???"どうしたの、アリサちゃん?」

????「あ、男の子が倒れているの」

アリサは目の前で突然大回転をしたツルギを呆れていた。今日の午後、昼休み時間に理科室でガス爆発（負傷者はゼロ）があり、急に工事が必要となつた。修繕のため、生徒達は全員帰宅するように言われたのであつた。そして、その帰り、友人である月村すすかと、同じく友人である高町なのはの親が経営するケー・キ店、翠屋によるところでツルギを発見した。

ツルギ「…て」

なのは「だ、大丈夫」

倒れていたツルギになのはが声をかけて、ツルギは顔を上げる。涎（胃液？）が出ていて格好悪かつた。そんなツルギを見たすすかがハンカチを渡す。

すすか「怪我はない？」

ツルギ「うん、ただ。…周囲の目が痛い」

気にする余裕はあるんだ。

アリサ「あんた、こんなところで何やつてるの」

「え、そりゃあ、トラックにて、げえ、アリサッ」

私は関羽か。

「いや、どちらかといえば六天魔王、織田信長」

「あなたの頭蓋骨でジュースでも飲もうかしら」

回想にツツ「//」を入れるな。

「すみませんでした。一つの意味で」

倒れていた姿勢から土下座にフォームチェンジしたツルギの所要時間は一秒にも満たない。それでいながら完璧に美しい土下座だった。

「わかればいいのよ。で、あなたは何でここにいるの？」

「え、それは…」

「アリサちゃん。知り合いなの？」

なのはがツルギと私を交互に見ながら少し慌てていた。栗色のツインテールも心なしかピコピコと動いていた。男の子に土下座をさせることにためらいがあるのだろう。そして、少し言いよどんでいるツルギは顔を上げて何か言いたげであったが、ここでは人目が付かすぎる。

「まあ、残りは翠屋で聞きましょう。ツルギの奢りで」

「賛成。ツルギ君甘いのは好き?」

すずかが手をたたいてツルギに聞いてくる。て、なんで顔を赤くしてんのあなたはっ。そんなに紺色のおさげが好きなの。

「俺これから用があるんだけど」

「あんたに意思決定の権利なんてないのよ」

「え、でも」

「頭蓋骨」

「あなたに一生ついていきます」

再び土下座のフォームに移行するツルギ。その姿に世間の目線など気にする余裕はなかった。

わかれればいいのよ

なのは視点

「へえー、お姉ちゃんとも知り合いなんだ」

「お兄ちゃんと会う前の忍さんて、海外にも行っていたんだ」

今、私たちはツルギ君も合わせて四人。季節限定のケーキをつづいていた。なんでもアリサちゃんはツルギ君のことを知っているようすぐに打ち解けたの。だけれど。

「まあ、俺はあの人人に人の可能性を垣間見た」

その時のツルギ君はどこか遠い目をしていた。

「なに格好つけているのよ。あんたは」

アリサちゃんは呆れ顔にツルギ君にフォーケークを向ける。アリサちゃん、行儀悪いよ。

「あんなに優しくされたんだ。仕方ないだろ。初めてだつたんだぞ、体温が四十度超えるまで休むことも眠ることも許されなかつた俺にあの人は微熱状態の俺に休みなさい。と声をかけてくれたのは。人は、人はまだ捨てたもんじゃない、と」

その時、ツルギ君はマラリアとかいう病気だつたらしいの。なんだかツルギ君と打ち解けるほどに目の奥が熱くなつてくるの。

ツルギ君は忍しおぶさんに看病されたこともあつたらしく、その時から忍さんにぞつこんだつた。が、お兄ちゃんと忍さんの関係を話した時の落ち込みようはなかつたの。まるで告白する前にふられたかのように。

「……あはは、でもすごいよね。ツルギ君もアリサちゃんのこと簡単に許しちゃうんだもの。初対面の人そこまでおおらかな人はいないと思うよ」

すずかちゃんもおおらかなの。でも、ツルギ君はおおらかというよりも淡泊というべきなのかな？

イギリスの山奥でアリサちゃん親子に銃で撃たれた。

致命傷は避けられたもののかなりの恐怖と痛みがあつたはずなのに、運ばれた病院でツルギ君は謝るアリサちゃんたちを見て、言った言葉が。

「いいよ。許す。死なかつたし、後遺症無いし。全治一週間ぐらいたつたから」

アリサちゃんもその時は怒鳴られる覚悟で来たのに呆気にとられていたの。私やすずかちゃんでも怒鳴つたり怒つたりしたかもしれない。今までこそ親友だけれどでも初対面の子にそんなことをされたら…。

「うーん。そうはいってもな。あの時のアリサは本当に心の底から謝っていた。別に取り返しのつかないことをしたわけでもないから、いいと思うんだけどな」

「まあ、あの時の人たちは本当に馬鹿だった。いえ、今でも馬鹿なのよね」

呆れ顔のアリサちゃんに、ツルギ君は半眼で睨んで愚痴を垂れる。

「一応被害者で、あなたは加害者なのですが…」

「否定できる?..」

と、質問されたツルギ君は、

「できないぜ」

とてもさわやかな笑顔で返していた。あれ、おかしいな。食べるケーキがなんかしょっぱいの。すずかちゃんもツルギ君から田をそらしていたの。うん、しょっぱいケーキがあつても今はおかしくないの。

ツルギ視点

「む、理科室が爆発か。…もう日本は平和に飽きたのか」

「そ、そんなことはないよ」

「それでツルギ君も同じ学校に来るの？」

「まあ、ここの流れじゃそうよね」

上から俺、すずか、なのは、アリサの順で翠屋を後にする。ケキの支払い時に対応していた親父さんとひと悶着があつたがどうにか話をつけた。血まみれの諭吉。たしかに受け取りづらいよな。俺でも嫌だ。…サカサ、今度からクリーンなお金を小遣いにしてくれ。物理的にも社会的にも。

(主、報告、問題、発生)

「いや？」

「へ？」

収縮拡大機能で1・5メートルはあつた避来矢は五センチほどに小さくなっている。避来矢は今、胸ポケットに入れている。その避来矢から念話が入った。と、同時になのはがネコのように何かに反

応した。どうした避来矢？そして、どうしたのは？

(認識、阻害、使用、不可。機能、同時、使用、不可)

(え、つまり小さくなつたのはいいけどお前は見えるよ！になつたと)

(肯定。認識、阻害、使用、想定。：縮小拡大、使用、不可)

「ん、疎外。數か？」

念話のやりとりをしていると隣にいたなのが首をかしげる。が、お構いなしに避来矢は報告を続ける。

「どうしたの。なのさちやん？」

「んー、なんか変な声が聞こえない？しよう。とか昨日とか（つまり、片方使えばもう片方は使えないわけか。厄介だな。じやあ、バリアジャケットの展開なんかしたら）

(想定。：十中八九、残存、機能、使用、不可)

「中学？ソニー？」

「なのは、大丈夫？ぼやぼやしそぎて変な電波でも受信したの？」

(つ主、念話、傍受、可能性、大。帰宅後、再度、報告)

(ん、避来矢？傍受つて、誰に？)

「ねえ、ツルギ君」

(おーい、避来矢。どうしたんだ)

「ツルギ君つてば」

「つあつ、どうした。えーと、高町?」

避来矢から念話が途切れたことに疑問に思っていたところではなのが急に声をかけてきた。

「うん、なんか変な声がない? ツルギ君にも似ていそうな声がしたんだけど」

「それは俺の声が変な声ってこと?」

シコツクだぜ。確かに美声ではないが変な声だなんて、しかもこんなにいい子な感じのなのはから言わると効果大だ。凹む。

(…井)

(わかっている。傍受だろ)

なのはが俺たちの念話を傍受したといづわけか。

「ほり、また」

「何言つてんのなのは。ツルギが変なのは説明したでしょ」

「そうだよ、なのはちゃん。モスキート音じゃないんだから」

モスキート音。

蚊のだす羽音のことで大人には聞こえない微量な音。 談・サカサ

てか、すずかああああ、おまえもかあああああつ。

「むー、本当なの?」

「大丈夫、私のうちが経営している病院行く?」

「恭也 もうやさんに何かされた?」

「ついでに俺の声帯もよくしてくれない、月村」

むくれるのは、本当に心配するすずか。からかうアリサ。呆れる俺に。腕を振つて講義をする。原因である俺がいつのもなんだがこのままにしていよつと思つていた時だった。

助けて

「いやー。」

「おー。」

(…-.)

助けて！！

「つ」

「ちよ、ちよっとなのは」

「なのはちゃん」

いきなり駆け出るのはを一人は追いかけた。俺もそれにならうが、どこかで来たことのある声だな。避来矢は三人娘に気づかれるかどうかの音量で報告を行う。

「主、広域、念話。又、避難、信号、及び、生体、反応、感知。生体、反応、微弱。：魔力、反応、消失」

わかった。とにかく助けを求めているのはそいつだな。避来矢、俺だけに聞こえるように声を小さくできるか。

「信頼度、九割。了解、主。音量、効果、最少」

三人娘の後を追い、交差点付近でうづうづしているなのはに声をかける。

「どうした、なのは？この辺になんかあるのか？」

探し物はわかっているが、あえて質問する。リオストーンだった場合、三人娘をすぐにでも逃がせるようあたりへの警戒を緩めない

ようあたりを見回す。

「魔力、消失、座標、検索」

「誰かがよんでたの。助けてつて」

「え、本当?」

「本当なら早く探すわよ。手遅れになつたら氣分が悪すぎるわ」
すずか、アリサも周りを見渡す。避来矢も先ほどの声の主を探して
いた。

「…判明。主、正面、交差点、右折。30寸」

「ちょ、ツルギあんたどこに行くのよつ」

避来矢の声に従い、正面の交差点へ足を進める。アリサが何か言つ
ていたけど気にしない。て、寸?

「約、1、メートル」

わかりやすくなつた。ところで避来矢、もう少しわかりやすく喋
れない?

「てか、次の角曲がつたらすぐつす」

「ごめん。俺が悪かつた。なんか凄い軽い感じでいやだ。なんだろ
うナンパ男というか、チャラい?パネエツす。元に戻つてほしいつ
す。」

「了解」

交差点を曲がるとすぐ落ちていたものに気づいた。普段路上でないものがそこへ落ちていたから。

「…サクラエビ入りのかまぼこ?」

「主、空腹?」

「…（嘔にならない悲鳴）

まあ、もうそれなりに夕食の時間帯だから。て、かまぼこが動いた。

「…おまえか?」

かまぼこへを拾い上げてみると、それに鼻と口と足と二つ
ぽ。ところどころに傷がついており、アクセサリーのようプロチ
マトがついていた。どこかで見たような?

「わ、その子、イタチ?」

「離我してくるよ。早く病院」

「で、でも」

アリサ、すすか、なのはがイタチに気づく。すすかはイタチを病院に連れて行きたがっていたが、なのはは声の主を見つけられないまま病院に行くのも気がかりなのだろう。イタチとその周辺をぐるぐると田を回しながら周辺を見渡していた。

「…主。動物、病院。西方向、三百メートル。…警告、未確認、魔力、反応、感知。南方向、一里先、沖合」

避来矢ナイズ。そして、警告？…あの時の野犬かつ。

「…よし。声の主は俺が探すから三人はこいつを病院に連れて行ってくれ」

「え、でも」

なのはは未だに迷つてゐるようだから後押しする。正直に言つならここに迫つてくるかもしない野犬を相手するにはこの三人は邪魔でしかない。

「聞き違いかもしれないし、本当かもしない。だけど、このまま…じやなくて、イタチをまず何とかして。さいわい動物病院も近いようだし」

「あ、あつ」

なのはにイタチを渡し、進路を南に取る。するとアリサが声の主探索（発見済み）に名乗りを上げる。

「つ、ツルギ。じや、じやあ、私も残る。すずか、このへんならいつも行つている病院が近いわよね」

「いや、アリサも行つてくれ。俺とアリサは携帯電話番号を知っている仲だから連絡取りあえるだろ。もう遅いから」

「シャラップ！それならすずか、私の携帯もつてて。代わりに私がすずかの携帯使うから。ツルギ、あんただけに格好いい真似はさせない。というか、似合わない」

「…酷い」

なんだか展開が怪しくなってきたぞ。なんだか、アリサはついてくる気満々だ。すずかは携帯を交換するとなほと共に動物病院へと向かう。

「一人とも、この近くにいてね。すぐに戻るから」

「お、おねがいなのー」

二人が角を曲がっていくのを見送ったアリサはふん。と鼻息ひとつ立てて俺に宣言する。

「さあ、イタチを見つけたのはあんただけど、勝負はこれから。早く重傷者を捕獲してエーシー（緊急治療室）に引っ張っていくわよ」

地である負けず嫌いが出たのか、夕焼けに向かつて指をさしている。なんか和むわ。と、和んでいたら避来矢からの報告が状況を一変させる。

「主。未確認、反応、付近、生体、弱小化。：結界！効果、範囲、一里！主、アリサ嬢、効果、範囲内！」

ちょ、結界は任意の人とモノしか通れない。特別な空間じゃなかつたか。そんな空間にもし、アリサだけが入つたら…。やばいやばいやばい。嫌な考えしか思い浮かばない。

「アリサッ、手を！」

とにかく少しでもここから遠くにアリサを連れて行かなければならぬの。」。

「え？」

キンッ。

アリサは夕日で大きくなつた陰に飲み込まれるように、海からやつてきた灰色の結界に取り込まれた。

「な、な……」

結界は俺の目の前まで来たのに、まるで俺を避けるかのように効果範囲が足元で止まつた。下手したら十センチもない超至近距離なのに。灰色の結界が薄まる。アリサの表情はまるで時間を停止したかのように止まっていた。そして、ゆっくり水に溶けるようにアリサと結界は俺の目の前でその色を消していった。

アリサを掴もうとした手は空を切つていた。

「あ、あ、ああ……」

「主ー！」

避け矢が俺に呼びかけるが俺には……。

「アリサアアアアアアッ！…！」

ただ、アリサの名前を叫ぶひとしかできなかつた。

第一話 しょっぱいケーキと傷だらけのかまぼこ（後書き）

あとがき 避来矢チャラ男期編

避来矢「てか、いまの主じやちょーヤヴァクね」

ツルギ「うちの避来矢がぐれた！」

なのは「ツルギ君。避来矢君に」飯あげてる？「

すずか「お手入れだと思つよ。ちやんと返り血拭いてあげないと
錆びちゃうよ」

アリサ「で、避来矢は何食べて動いてんの？」

たかB「え、えーと？」

避来矢「考えてねえの？ヴァカなの？」

たかB「じゅ、ジユエルシード？」

ツルギ「すげー燃費が悪そудだし、暴走しちゃうだぞ」

なのは「しかも原作知識もつている人だつたら何となく気づくだ
らうけども」

すずか「リオストーンが、もがもが」

たかB「じゃあ、いまはちょっと黙つてもらえるかな」

アリサ「まあ、いいけど。じゃあ、次が重要。…私は…助かるの？」

たかB・ツルギ・なのは・すずか「…大丈夫だよっ！」

アリサ「何、この微妙な間は…作者…」

たかB「…次回予告」

アリサ「じりあつ、これまで一番短いあとがきじゃない！逃げるなー！」

なのは「そつぱんしても私はまだ戦えないし」

ツルギ「作者も俺にどう行動をとらせるか考えてないし」

かまぼこ？「僕も名前が出てないし」

すずか「あ、かまぼこ（仮定）君。よかつたね、ここでは普通にしゃべれてよかつたね」

避来矢「てか、いたの？かまぼこ（仮定）？」

かまぼこ（仮定）「あの、僕はここじゃ語られてないけどフューレットだから。…せめてイタチって呼んで」

アリサ「かまぼこ（断定）はいいから。作者、何とかしなさい。ひとつと、これを更新して私が活躍するネタを考えなさい」

かまぼこ（断定）「ちょっと待ってなんか僕の名前が凄い」とことなつてているよ。疑問系から断定されてきているし

「かず」
ツルギ一眞頭でのアレはこれだつたんだな。
すまない、今晚のお

たかB「じゃ、今度」
「次回予告」

避来矢「ジカイ
ナガイ、イチニチ」

たかB 「何が長いだろうな？」

ツルギ「考えてないの！？」

第三話 長い一日（前書き）

バトルよりも残虐性が濃い話になつております。バトルの文章力は徐々についていきます。たぶん。避来矢の機能解放数ぐらいには…。この話には金髪娘が出るよ。

第二話 長い一日

アリサが結界内に閉じ込められてすぐに俺は八つ当たりで避来矢を地面に吊り付けて、思考を加速させていた。

「アリサッ、くわっ。どうする！…考える…サカサ。そうだ。あいつなら」

携帯電話を鳴らし、サカサが出でくるのを待つがコール音が十回流れてもサカサは出てきてくれない。

「…王」

「お願いだ、サカサ出でくれ」

願いが通じたかはわからない。ただ、電話だけはつながった。ただ、電話の相手がサカサではなく。

「ドウシマシタ。ツルギ？トラブル？ハッセイ？」

「ミネルヴァー！」

あの水晶玉、じつやつて携帯に出でているのかは不思議だがそんなことより…

「サカサ、イマ、シユウシンチュウ。ヤツカイナ、ヤツー、カラマレテ、ヒロウコンパイ。ワタシガ、キコウ」

アリサを救うのが先決だ。ことの顛末をミネルヴァに相談すると。

「…シツモン、ガアル。ツルギ、ケッカイハ、ミエル？モシクハ、サワレル？」

「いや、見えないし。触ることもできない」

もし見えるのならアリサを探していた。触ることが出来たら避来矢を使って結界を破壊していた。

「…ヒライシ、イル？」

「あ、ああ、すぐ足もとに。すまない避来矢」

足元に転がっていた避来矢にハツ当たりしたことを謝りながら避来矢を拾い上げる。

「主、問題無。主ノ、胸中、ニ比較スレバ。…ミネルヴァ。策有？」

「ニンシキソガイ。ハ。ツカエル？」

「肯定」

「認識阻害？それなら最初に避来矢が獲得した機能だけど。それで何をすればいいんだミネルヴァ？」

「…アル、モノヲ、ソガイシテ、モラウ」

ミネルヴァが言い出した策はあまりにもぶつ飛んだ策だった。

「…もひ、何なのこの空」

ツルギが何か声をかけると同時に何か灰色の壁がツルギと私の間に割つて入ってきた。壁が動くわけでもないのに私にはそう感じ取れた。もう、一時間以上たっているというのに灰色の夕焼けは今もまだ目の前にある。

いや、一時間はきっと気のせいだ。何故ならすずかから借りたこの携帯電話は先ほどからまだ一分しかたっていないのだから。それでも。

「…夢なら覚めてよ」

誰もいない空間。見慣れていた町はとても薄い紙を張り付けたかのように全体的に灰色がかっていた。赤いはずの夕焼けすらも灰色。人の声も車も風の音も何も聞こえない。すべてが停止したかのようなこの空間にいつまでいればいいのだろう。

「…う」

涙が出そうになつた。まるでこの世界に一人だけだといわれている気がしたから。思わず上を向いて零すまいと堪えるが、その視線の先にあるのは灰色の空。涙があふれる。涙が一筋零れ落ちかけた瞬間。停止していた灰色の世界に動きがあつた。それは轟音。海の方からだった。

「泣く…もんか」

海の方に行けば何かが分かる。たとえそうでなくともいざとなれば泳いででも帰つてやる。帰つて、なのはやすすかとまた翠屋のケーキを食べよう。仕方ないからツルギも誘おう。もちろん荷物持ち兼財布代わりに。今は楽しいことだけを考えよう。なのはには悪いけど声の主を見つけることは出来なかつたことは謝ろう。ツルギが足を引っ張つたとでもいえば何とかなる。そう、考えながら動かす足は先程より少しだけ軽くなつた。

ツルギ視点

アリサが海に向かつていつた。その五分後、アリサのいた場所。いや、空間に靄がかかる。その靄は無色ではあつたが、写真の上にとても薄い膜が張られたかのようにじわじわとその空間を濁していつた。しばらくして、今度は靄が現れた時とは逆にその靄が晴れていくと油絵のよう人に人の輪郭と黒い棺桶のよつなものがにじみ出てきた。

「認識、阻害。効果、最大、維持。主、結界内、侵入、成功。以後、他機能、使用、不可。要注意」

「…ありがと!! ネルヴァ。サポート本当にありがと、避来矢」

ミネルヴァが出した指示はいつには簡単だが改めて考えてみると無茶苦茶なことだった。

結界を認識阻害で騙す。

正確には結界の周波数に合わせた認識阻害電波のようなもので結界を透き通つてきた。

もともと避来矢はミネルヴァ同様オーパーツである。それを他人にばれないようにするにはまず知らないこと。人には見えないが機械越しに見たら見えてしまうこともある。だからこそ、ミネルヴァはそこに目を付けた。ミネルヴァ自身にも認識阻害が備わっている。しかも、阻害中は世界的に最新のカメラ（サカサが自作したのを除く）でも姿をとらえることが出来ない。その上、自分よりも出力の高い避来矢なら結界をだませると考えた。

…侵入した後の二つの問題を残して。

一つは認識レベルの最大の維持。これは結界を張った何かが少しでも異物を抱え込んだと探知してしまえば即追い出されるかもしれないからだ。

そしてもう一つは、全裸で結界内に突入することだった。

「なんで全裸？」

「仕方、無。阻害、レベル、低下、原因、排除」

…わかっている説明してもらつたから。阻害している方から見つからないようにするには、できるだけ身軽になつた方がいい。量が多くれば多いほど結界侵入は失敗しやすい。思わずターミーネーターのポーズをとつたのはご愛嬌だ。

「…結界内、衣類、装着、想定、…レベル、低下率、零」

なるほど、この結界内の服なら來ても問題ないのか。

アリサを探しながら服を拝借しよう。避来矢、アリサはどうにい る？

「検索…海岸、方向。アリサ嬢。リオストーン、反応、地点、移動無。アリサ嬢カラ、リオストーンへ、接近中」

まじかっ、急ぐぞ。全裸でもあいつのもとに行くぞ。急いで追いつかないと。

「了解、前方、交差点、左折。残り、直線」

おし、待つていろよ、アリサ。すぐにお前の所に行くからな。

「…全裸、テ？」

それは言わないで避来矢。

アリサ視点

「…蟹？」

私は目の前の光景に思わずつぶやいた。轟音が鳴り響いたと思われるところに行つてみればそこは漁港近くのビーチだつた。夏を目前としているとはいえ今の時期、こんなところに轟音が鳴り響いたり、人がいるのはおかしい。最近では花火もなければ祭りの予定もない。それなのに複数の男女をこの目で見つけた時は安心した。声をかけようと思ったがその光景があまりにも不気味だったので思わず電柱の陰に隠れる。

サイズとしては成人男性とほぼ同じくらいの背丈に全身赤色。だが、それに不釣り合いなほど両腕。自分の胴体よりも太く自分の二倍はあろう両手。まるで下手な絵描きが書いたボディービルダー

だつた。

私が何故蟹かとつぶやいたのは、この赤いボーティービルダーは目の前にあつたトラックタイヤを片手で両断した場面を見たからだ。それは蟹が自前のハサミでものを切断するかのようにいとも簡単にやつてのけた。

「オオオオオオオオオオオオ」

蟹はタイヤを切つたことに満足したのか獸のように遠吠えをした。ちなみに蟹男（性別は分からないうが）の前には若い男女と中年の男、そして若い男性が三人ほどいた。何やら蟹男の登場に呆気を取られているが、しばらくすると男性陣のほうから蟹男に声をかけてきた。

「は、はは、なんだそれ。マジックか？俺にも教えてくれよ。いきなり呼び出すかと思えば……」

「そうだぜ、どこで買つたんだその着ぐるみ？まるで特撮の怪人みた（ゴキン）だ…え」

蟹男が、目の前の男の腕をへし折つた。何の躊躇いもなく。その大きな両手で彼らの腕、足を碎いていく。
そこからは阿鼻叫喚の地獄絵図だった。

「え、ちょ、ちょ、ま、て。まつてくれええええ！」

「い、いや、死にたくない。だ、誰かああああー！」

「俺は関係ないつ、関係な、つああああああああつー！」

肉を先骨が砕ける音。耳に残る悲鳴。
うじやなきやこんなことはありえない。

「ち、ふざけんなあああああつ」

一人の男性が海岸に落ちていた石で蟹の後頭部を思い切り殴るも、蟹男には何の反応はない。筋肉の壁があまりにも厚すぎて効いていない。

かはあ

蟹大きく息を吐きながら後ろを振り返る。岩で殴りつけた男の両腕を取る。ま、まさか。

「あ、あが、あがああああああああ」

ばちんつ。

「けははせ」

蟹は笑いながら男性の胴体と腕を持ち思い切り引き延ばした。

お願い。お願いだから。
夢……なら覚めて。

あ、あは、あはははははは。

やつぱり本当だつた。夢じやない。あの石が僕に力をくれた。いや、もう、僕の物だ。先週、道端で手に入れた青い石が今の僕の体を作り上げたんだ。赤黒く鬼のようになつたこの両腕。岩の攻撃にもびくともしない体。軽々と人を握りつぶせる握力。すべてが僕の体だつた。

「…じょ、冗談じやないぜ」

残つた男は逃げ出そうとするが、甘い。この灰色の世界の王は僕だ。僕はこの世界の王なんだ。

逃がさない。この砂浜から逃がしはしない。

キンッ。

新しく、灰色の世界を張る。この世界は本当に最高だ。なんせ、自分の許可したものじゃない限りこの世界には入り込めないし、立ち入ることすらできない。しかも時間が引き延ばされているのか、ここでの一時間がむこうでは五分にも満たない浦島太郎のようだ。

「が、な、なんで先に進めないんだ」

逃げ出そうとした奴の前に見えない壁。正確には結界を張る。それ以上逃げられないように。もう、お前が進める道は僕に向かっていくだけなんだよ。

こんな素晴らしい石を一つも手に入れた。あの青い石の一つは体

の中にもう一つは首にひもでぶら下げている。この一つで強固な体と世界。両方手に入れた。この力を使いながら全世界すらも取れる。だが、その前に、

「な、な、勘弁してくれよ。マルダイ。も、もうバカにしないから。陰口をたたかないから、だ、だから」

がたがたと震える肩に一步一歩近づいていく。圧倒的な力を両腕にぶら下げながら。

「…信用できるか。お前の考えは手に取るようにわかる。どうせ助かつても誰かに話したりするんだろう?まあ、信じられない話だしな。それでもお前は僕に逆らつ。てか、ムカつくから、死んじやえよ」

「…いつも職場で威張り散らしていたまじムカツく、お前の頼みなどだれが効くものか。」

「や、やめ」

「死ね」

今まで僕のことを見下してきたやつの顔を泣き顔でぐちゅぐちゅしみだ。

そんなことを考えながら拳を振り下ろした瞬間だった。僕の灰色の世界が初めて悲鳴を上げた。

ガキイツ。

「認識、阻害、成功。主つ」

「いよっしゃつ！避来矢、リオストーンをぶんどれええええええええ
ええええつー！」

目の前に急に現れた見たこともないクゾガキが巨大な黒い剣で僕を殴り飛ばした。それと同時に僕の世界は砕け散った。

ツルギ視点

「主、結界、封鎖。通常、空間、強制、送還」

「え、まさか。ばれたのか？」

海岸沿いを走っていると避来矢から急な報告を受け、俺は近くにあつた駄菓子屋の陰に隠れる。と、同時に結界が音もなく解除され、灰色の世界に夕焼けの赤が戻る。もし、ばれたのなら俺に攻撃が来るかもしれない。サカサから相手に近づく際には常に相手に見つからないように。と、言われてきているのでこの動作を取るのに躊躇いはなかつた。全裸になるのは少しためらつたけど。

「否定。可能性、零。再度、結界、展開。有効、範囲。先程ノ、
結界ノ、半分」

よくわからん。が、アリサはどうなんだ？

「アリサ嬢。結界外。サレド、結界付近。危険性中」

よし、結界外なら一安心。でも、俺の存在という危険度はかなり上がつてますけど。全裸だよ全裸。今なら確實に補導される。どんな弁解をしても連れて行かれるのは確実だろう。今の俺はまさに丸腰「理由・全裸」。…避来矢、お前余裕だな。「銃刀法違反?」全然余裕だった。

「認識、阻害、使用?」

なんで?もう結界内じゃないのに。

「今、主、全裸。外観、全裸。阻害中、外観、着衣中」

えーと、つまり俺は今裸だけど認識阻害を使えば服をつけているよ!に見られる?

「肯定」

「よし、じゃあそれで」

「阻害、開始」

避来矢の声とともに俺の体に黒い袴が羽織られる。おお、なんと便利な。

「主、実際、着衣、デハ無。効果、阻害ノミ。防御、能力、皆無。了解?」

「了解だ避来矢。…と、一応念のため」

駄菓子屋の前に、ぶら下がっていた「氷」と書かれたのれんを腰に巻いて行こう。阻害が切れたら再び全裸、は避けたいからな。ふんどしのように腰に巻くとその上から再度袴が装着された（認識阻害で）。

駄菓子屋を出てから十秒もたたないうちに電柱に寄り掛かったアリサを発見。と同時にアリサが崩れ落ちるように倒れた。

「アリサ！」

急いでアリサに近寄つて頬をペチペチと軽くたたく。

「アリサ嬢、状態、確認。…異常無。気絶中」

「う…」

アリサは苦しそうに顔をゆがませるが、避来矢の言葉を信じてあたりを見渡した。

「本当だな、避来矢。それじゃあ…」

アリサには悪いが電柱に寄り掛かるようにアリサを座らせ、あたりを見渡す。そこで信じられないものを見た。

「な、ゴリラでも暴れたのか！」

「主、リオストーン、反応。負傷者、付近、発生。結界、反応、極めて縮小。サレド濃厚。生体、反応、二」

血まみれになつた男女。中には両腕がぐぢゅぐぢゅになつた人間

もいる。…サカサじやないと治せない重度の怪我人もいた。みんな
気絶しているうえ致命傷になつてているやつもいる。

春の時期に海岸、夕暮れ時もあつてか、こんな惨状にもかかわらず
まだ誰も気づいていなかつた。

避来矢、忘れないように覚えていて。これが終わつたら速攻でサカ
サに連絡をつける。あと、リオストーン回収急ぐぞ。

「了解。認識レベル。効果、最大。干渉、開始」

砂浜に降りて怪我人のほうへ走りながら避来矢に指示を出す。俺
からの指示に従つて避来矢が答えると、黒い袴が消え、避来矢が小
刻みに震える。すると田の前に灰色のドームが見えた。直径は十メ
ートルといつたぐらいの小さなドーム。中には赤い大きな蟹?と
一人の男。その巨大すぎる腕を今まさに振り下ろそうとしていた。

「主、蟹、首元、リオストーン。速攻、奪取、推薦！」

あの蟹がこの人たちをこのようにしたのなら急いでこれをぶんど
らないと。避来矢の案に俺は賛成した。

「了解だ避来矢。突つ込むぞ！」

「了解！結界、干渉、突入」

走つた勢いそのままに結界へ、そして蟹に向かつて避来矢を振り
下す。結界はもう俺には意味のないものだつた。

「認識、阻害、成功。主つ」

「いよつしゃつ！避来矢、リオストーンをぶんどれえええええええ

えええつ！！」

ガキイツ。

避来矢で蟹をリオストーンごとぶん殴ると蟹は数歩下がって驚いた顔を取った。て、顔あつたんだ蟹。

「な、クソガキッ、どこから湧いて出てきやがつた！？」

しかも喋った。よく見ると人間の腕が異常なまでに膨れ上がりつていて、手が大きく、全身が赤い奇妙奇天烈な格好だった。

「はつ」

『じつ。

相手が驚いている隙に相手の横に移動してもう一撃。今度は相手の膝の後ろを避来矢で殴るように振りぬく。

「があつ」

「せいつ」

『ばしんつ。

バランスを崩したところで振りぬいた避来矢を持ち替えて、顔の部分を殴りつける。これで相手を倒す予定だつたんだけど。避来矢が蟹の大きな手につかまる。

「なんだおまえはああああああああ！」

「え？ ぬあああ」

「ぶおんつ。

蟹の方向と共に避来矢^ビと持ち上げられる。一応、俺、体重三十キロはあるんですけど。

「おおおお！」

「じすんつ。

「がふつ」

凄い加速感と共に避来矢^ビと仰向けに砂浜に叩き付けられる。下が砂浜とはいへれは……。

「潰れるー！」

「ゴガンッ。

巨大すぎる腕と拳が田の前に迫つてくる。避来矢を盾にその拳を受け止めるがあまりにも衝撃が強すぎて、拳の勢いそのままに赤黒い腕と共に砂浜に埋まる。

「もう一撃つ」

やばいっ、これ以上はあまつこもあつかう。

「あやつ。

「ぐお」

「脱出つ、いほ、がは。うあ、かはつ、きつこつての」

砂を足でけり上げ、相手の顔にぶつけた。ややつけて相手が怯んだうちに逃げ出すことに成功したのはいいがあまりにもダメージが大きすぎる。何度も咳き込んで息が整わない。俺の隣で蟹に殴られた男は氣絶している。そちらに注意がないかのようにできるだけ自分に注意を引く。なんてことはせず、無視して戦うのが一番だ。自分より各上かもしれない相手にそんなことをするのは無理だから。蟹はまるで興奮剤を投与したゴリラと殴り合いをしているみたいだ。やつたことあるのか？あるよ、実家で。ナイフ一本で。なんでもそのゴリラ何人ものハンターを殴り殺したらしい。勝てた？いや、逃げてばつかでしたよ。実家が竹林に囲まれた道場で完全監視のもと無理矢理戦わされた。最終的に両者疲労困憊による氣絶という結果で幕を閉じた。

〔主？報告？〕

「気にするな、避来矢。向こうの人に伝えただけだ。

「てめえ、なんだ。…なんだその恰好は？」

「あー、気にしないでください」

さすがに薄い布でできたふんどしが無いか。思いつきり変態だもんな。

ひきつ、パキイいいいイン！

ガラスにひびが入るような音と共に灰色の結界が飴細工のようにな
碎け散つた。

「主、リオストーン、回収。番号、十一。結界、崩壊、確認」

「な、僕の世界が！」

「今」

避来矢の報告と同時に碎け散つた結界を見て驚く蟹。その呆けた口に避来矢を叩き付ける。ただし……。

「避来矢、縮小！」

「了解。一寸サイズ、縮小」

なのは達といいた時と同じサイズに避来矢を小さくして右手の中に収める。そして、相手に飛び移り、そのまま右手を相手の口に突っ込んだ。

「がつ」

俺の手が口に入った時にようやく蟹も俺に気が付いた。でも遅い。

「元に戻れ！」

「了解！」

ドガアアアアアアン！

大きな鐘を突いたかのような轟音を響かせながら、蟹の口から避来矢が突き出る。どうやら固くなつた筋肉は見た目通り金属のように固く貫くことは出来なかつた。もしスローモーションで今の映像が放映されたとしたら蟹の口から避来矢をツルギが引き抜くといった人間ポンプならぬ蟹ポンプといった映像だらう。

「「」「」ばああああああ！」

避来矢が突き出た勢いを生かして蟹から距離を取る。それから一瞬遅れて蟹の口から大量の血が吐き出された。貫くことは出来なくともかなりのダメージはあつた。これで封印を。

「やつたか！？」

「主、マダデス！」

蟹から距離を取り避来矢を構えていると蟹は海の方向に走つて行つた。

「がああああああ！」

海にざざざざぶとす”い勢いで潜つていいく。て、このままじゃ逃げられる。

「逃がすか！」

「主！追撃、危険！撤退、推薦！」

蟹の後を追おうとした俺を避来矢が引き止める。その意見に反論しようとした。「

「がああああああ」

「げつ」

「ぶあん、『』があつ。

蟹が海の中についた岩を俺に向かって投げつけた。思わずそれを避来矢で受け止めて難を逃れるがその隙に蟹は海の中へと消えて行ってしまった。

「…逃げられた。か」

「主。海中、戦闘、不利。無理、禁物。バリアジャケット、完成、以降、水中、戦闘。了解？」

助かつたからか逃げられたからかは自分自身でもわからない。だけど、何とも言えない感覚にため息をついた俺に避来矢は注意していく。

「…うん、そうだな。『』めん」

「主、認識、阻害、使用」

避来矢が認識阻害の機能で黒い袴を再び装着している映像を体にかける。

「すまん。今度から気を付ける

「…サカサ、連絡」

「…そうだな」

本当にできた相棒だ。こいつに見合つようにもう少し自分自身を鍛えないとな。というか、俺にはそれしかできないから…。反復を繰り返して体に染み込ませる。それだけだ。

避来矢はその姿を認識阻害で消して、俺は近くを通りかかった車を呼び止め、救急車の手配。そして、携帯電話を借りて（結界侵入の際おいてきたため）サカサへの非常用のメールを送った。サカサが来てくれればこの人たちも何とか日常生活に戻れるだろう。

俺はアリサの所に戻り、彼女を背負ってなのは達のいる動物病院へと向かった。無論、脱いだ服を回収し、着替えてからなのは達と合流した。途中でアリサが起きなかつたのは不幸中の幸いだった。

あと、備考として

アリサはあの時の惨状をショックで忘れたらしい。まあ、思い出すだけ気持ちの悪いことだし、だれも信用しないだろう。ただ、この日以来、アリサはボディービルダーが嫌いになつたそうだ。

？？？視点

ツルギがなのは達と合流した同時刻。とあるビルの屋上に月の色と同じ髪をした少女と赤い狼がいた。

？？？「……お母さんが求めているものが……」

少女は一見、死神めいた衣装に白いマント。そして、死神の鎌のよつな機械を片手に一枚の写真を見つめていた。

？？？「フェイト、早速だけど反応があつたよ。どうやら海の方みたいだ。かなり弱まっているけど、無理は駄目だよ」

赤い狼は少女に寄り添つように話しかける。それは今から行う作業よりもここまで来た時の疲労を考えて少女に寄り添つていた。

フェイト「うん、ありがと。アルフ。行こうかバルディッシュ」

「イエッサー」

日が沈み、紺色に染まつた空を取りのよつにゅっくり飛び立ちながら、私はバルディッシュに指示を出す。アルフもこの世界に来たばかりの私を気遣つてくれている。だけど、私は一刻も早くこの青い石、ジュエルシードを手に入れなければならぬ。

アルフ「フェイトは封印だけでいいよ。こんなに弱つているなら私だけでも……」

「大丈夫。無茶はしない」

嘘だ。

管理局が動き出す前に何が何でもジュエルシード三十七個を全部集めなければならない。これだけ大量にばらまかれている上、今のようこそこの世界に来てから探索できるのなら早い方がいい。

「せめて、私に運ばせておくれよ。封印でミス。とかほごめんだからね」

「…うん、じゃあちょっとだけお願ひアルフ。バルディッシュも休んでいて」

「スタンバイモード」

私はアルフの赤い背中に抱きつぶように身を任せた。バルディッシュも小さくしてポケットにしまっておいた。これでこの子も私も少しだけ休んでいられる。

アルフが私を落とさないようには優しく運んで十分足らずで反応のあつた地点へと訪れる。そこには一人の男性が海から上がってきました。がうかがえた。ひどくたびれた格好に不信感を覚えながらアルフは結界を張る。

「管理局に感づかれないと隠密性の高い結界でいいかな?」

「うん、いいと思う。まだここに来たばかりだし、それにあの人もかなり弱っている」

アルフが結界を張ると男の人が急に笑い出した。

「気づかれた?」

私はバルディッシュを手に取りセットアップに取り掛かる。

「いや、それじゃないと思つよフェイト。だって、私らは空にいるのにあいつはこっちを全然見ていない」

男の人はなにやら「ははは、まだ残っている。まだ使えるじゃないか」と笑いながら皿の上に上がっていく。そしてそのまま街中へ移動しようとしていた。

「とりあえず交渉は無理そうだね」

「うん。残念だけどあの人、ジュエルシードを取り込んでじやつているから、大人しく封印されるのを待つてもらつか、ある程度のダメージを『えないと封印できない』

それにあの人目の。あの人目のは私の…。

「じゃあ、フェイトは少し待つていておくれ。私が一応掛け合つてみるから

「バリアジャケットセットアップ」

「…フェイト」

私がバリアジャケットを着こんだことに悲しそうな眼をしてみるアルフ。

「大丈夫、アルフを信じてないわけじゃないよ。でも、もしもの時の為に援護くらいなら…いいよね？」

「…すぐ終わらせるからね」

「うん」

アルフは私の言葉に応じて、再び鬭争本能むき出しの皿になり、

男の人の前に降りたつていつた。

蟹男（仮）視点

スルガノミカタ

あの変態クソガキをこの手で殴りつぶすまでこの怒りは収まらない。不意をついて必ず後悔させてやる。足を腕を、顔をぐちゅぐちゅになああつ。

キンツ。

ガラスを弾く音と共に一瞬にして、町からこぼれる光が弱弱しい微弱なものへと変化する。人の喧騒も車の音も聞こえなくなつた。これは、僕の世界？

ははは、さすが僕じゃないか。選ばれた人間は違うということか。そうだろうつ、そうだろうつな、あの石を一つも見つけた僕は神に選ばれたんだ。

「まだ、残っている。残っているじゃないか。」そのまま、あのクゾガキを

「悪いね、兄さん。ちょっといいかい。あなたが持っている石、大人しく渡してもらえるかい？」

目の前にいきなり変な女が下りてきた。オレンジの髪に犬耳としつぽをつけたコズプレじみたバカそうな女だがスタイルだけはいい。

「はつ、何言つてんだ。あれは僕のだ。犬の姉さん。あれは僕の物で渡すつもりはないん」「そうかい」がはつ

血の混じつた唾を吐きながら犬女に苛立ちの目を向けた瞬間にはもうそいつは僕のみぞおちに拳をたたきこんでいた。

「じゃあ、奪つままでだ。恨んでくれても構わないよ。さうすれば、すぐ忘れるだろ?」

この女も、あのクソガキも、ビートまで、ビートまで僕をなめるつも
りだ。

「ふうけんなんああああああああああああああ」

「…ち、まだ変化できるのかい！」

。犬女は身をひねつてその場から逃げ出そうとしたがそうはいかな

۱۰

「にがすかあああああああああああつ」

「なつ、なんて力だ。くう」

石が強く光ることを体で感じながら犬女の腕を掴む。先程のダメージで腕の巨大化までとはいからくても身体の強化はまだできる。強化した左腕で犬女の腕を掴む。

そう、僕が今まで欲しがっていた。頑強な体。僕が最初に石を拾った時、ちょうど会社の肩どもといさかいを起こしてむしゃくしゃしていた。あいつらをぐちゃぐちゃに潰せるほどの体が欲しい。しかし、あいつらは多少体を鍛えていて今の自分では敵わない。今から体を鍛える。なんてことはせずにあいつらの不幸だけを祈つていた。しかし、それをかなえたこの石。体の中にすでに入り込んで渡すことは不可能だが、渡す気など微塵にもない。やっと手に入れたこの体。それを奪おうなど命を取られた方がましだ。

「潰れろバカ女！」

「があつ」

「ゴキイツ。

今持てる全力の力で女の手首を握りつぶす。骨が砕けた音だろうか。いい氣味だ。だが、右拳を固く握りしめ今度は顔面をつぶす。

「これで終わりだとおも「サンダーブレード！」があ

「ズドンッ！」

な、ま、また。不意打ち。今度は幼女の声が。

「な、フェイトッ！」

しかも、今度は犬女の頭上からまるで雷が落ちてきたかと思うほどの光が襲いかかってきて僕を白い光へと誘う。この光の衝撃で体が痺れる。

犬女は僕がしごれている間にバックステップで距離を置いたこの光景は、マズイ。早く逃げなくてはまた…。

「バルディッシュ！サンダーブレードフルパワーーー！」

そう思つた時にはもう遅かつた。犬女と僕の間に金髪の幼女が空から舞い降りて死神の鎌を突きつけて叫んだ。

「イエッサー、サンダーブレードフルパワーー！」

ズガガガガガガガアアアアアンッー！！！

鎌が少女に答えるかのように僕の目の前を金色の光で飲み込んでいった。

アルフ視点

「…ジュエルシード、ナンバー？。封印」

フェイトがジュエルシードを封印したと同時にフェイトが倒れた。やっぱり無理していたんだ。

「フェイト！」

「……めん、アルフ。でもアルフが危ないと思つたらつい
ついじゃないつ、魔力も回復していないのにあんな真似するな
んで！」

男に外された手首の骨を無理矢理つなぎながら私はフェイトの元に走った。心配させないように笑つているその顔には明らかに魔力負荷による疲労がみてとれた。

「うん、『めん』

「私は謝つてほしいんじゃないつ、フェイトお願ひだから……フェイト？」

「……スース」

フェイトは……眠つてしまつたようだ。

「ごめんよ、フェイト。私がしつかりしていればこんなことには……。使い魔でありながら主を助けきれてない自分に悔しさを感じながら私はフェイトを背負つた。すぐにフェイトが休める場所へ移動しよう。そんなことを考えていると。

「……あー、深刻そうなところ悪いんだけどさ」

田の前に見たこともない男の子が巨大な剣を持つて私たちの前に立っていた。しかもその位置は私の張つた結界のギリギリ外の部分だった。まるで待つていたかのように。……まさかっ、もう管理局が！

「わー、待つて待つて怪しい奴だけど。信用できないかもしねないけど。話を聞いて」

FHイトを背負っている以上蹴り飛ばして気絶させるのが一番だろ？けど管理局の人間相手にうまく立ち回れるかどうか。

「わかった。武器を捨てます。なんなら上着も脱ぎますから話を聞いて」

巨大な剣を私たちのほうに投げると、男の子は両手を上にあげて抵抗の意思がないことを示すがまだ信用できない。

「…………」

怪しいそぶりだが敵意は感じないし、管理局にこんな子供がいるとも聞いていない。だからといって油断するわけには……。

「……し、下も脱ぎます……から……」

「いや、そこまでしなくてもいいよ」

なんだか馬鹿らしくなった。

「……あんた、何の用だい？」

警戒を緩めそうになつたがこいつを信じるのはまだ情報が足りなすぎる。

「えーとな、簡単に言つや。その子病氣がなんかだる？ こんなと

「ううでウロウロするよつ、うかに来ないか?と誘いに「何だつて…」
「わあつ、お姉さん。顔が近い、近いです!」

今、病氣とか言わなかつたか。そんなもしフュイトが…。

「おいつ、あんたの家はどじだー。」

私は襟首を掴んでここの田を見る。嘘は言つてはいけないがすこ
く動搖している。かといつて何か陥れようとしているわけでもなさ
そうだ。

「む、むといつのあたりを一キロほど行つたといふです」

「よしつ、すぐ行くわ。案内しなー。」

まあ、少しでも座つてといふを見せたらガブリとかせてもらひ
けどな。

「はつ、はー」

どもりながらも返事をすると、こつは剣を拾つて私たちの前を
突つ走つて行つた。あの小さな体でフュイト並みに走れることに驚
きながらその後を追つ。

あんな大きな剣を持つて、結界のことを知つていて、おそらく結界
の中で起つたことも知つているはずなのに。怪しい奴なのに。

「…あんた、なんで私らを助けよつと思つた?」

ふと、自分でもどうしてそれに答えたかはわからない。その意味
が知りたくて声をかけた。

「…その子と同じ理由かな？」

あたしの背中で寝ているフェイドを見て答えた。

「同じ？」

やつぱり結界で起こったことを知っている。それでもこいつは敵じゃない。少なくとも敵にはならない。直感だがそう思った。そして、理由を聞いてそれは正しいことだと確信した。

「なんとなく、助けたくなった。助けられそうだから助けた。：
じゃ駄目ですか？」

困り顔で頬を書きながら答えるその顔に嘘くそとは微塵にも感じなかつた。だから、

「あんた、名前は？」

「俺？俺はツルギ。月野ツルギです」

これが私とフェイドが初めて仲間だと思える人間との出会いだった。

第二話 長い一日（後書き）

ツルギ「何があつた作者?」

アルフ「かなり長い話だつたから疲れているんじやないかい?」

邇來矢一書定仕其修正計一月使用

フヨイトー凄い疲労感だらうね」「

たか田 一
・ おあね

ハ川元イシシニ [# \$ % & ' % \$ % & @ (,) & 4 * > : 4]

「フライト」「どうしたのバルディッシュ？！凄い文字化けしているよー」

たかB「私、エイゴデキマセン」

ツルギ「じゃあ、この後出るであろう魔王様のデバイスも」

アルフーのあとがきには出れないのかねえ」

週刊文庫版『ミネルヴァ、元バイス、代表、演説、予定?』

バルディッシュ「イエス」

フロイト「そんな。はい、いいえ。だけだなんてかわいそぶりが
るよ」

アルフ「作者（の脳）が、バルティッシュが？」

たかB「リョウホウ、イエス」

ツルギ「言つちやつた！？」

避来矢「今回、質問。……後付？」

たかB「ナンノコトヤラ？」

フロイト「その、あとがきといつ頃の言い訳といつか…」

アルフ「まあ、ちやちやつとこいつか」

ツルギ「おう。じゃあ、質問いきます。認識阻害で結界突入は無理があつたんじゃないのか？」

たかB「あい、説明します。結界とはいっても所詮は魔力の塊で
できた壁だからね。避来矢ならどうとでも侵入できます。以上」

フロイト「も、もう少し詳しく」

たかB「了解。さつきも言つたが結界は魔力でできてる。いい
まではいい？」

アルフ「まあ、それはそうだね」

ツルギ「それはわかるけど、普通、困いや策なんか超えるときはどうしてもその道を遮っているものに必ず触れるだろ？」

避け矢「同意。追加、想定。有刺鉄線、赤外線。反応、必至。結界、相違点有？」

フェイト「そうだよね。物理的センサーと魔力でできた相違点で、何があるの？」

たかB「んじゃ、相違点について話すけど。簡単に言うと最終的判断は人が判断している。物理的センサーは機械やそれそのものが外敵もしくは侵入してきたものに対して迎撃対応する。しかし、結界は人が操っているからね。つまり、結界を通す。人が感知する。その人が結界から追い出す。という手順」

ツルギ・アルフ「だから？」

フェイト「なるほど」

たかB「フェイトはわかつたみたいだけど。さらに簡単に言うと。スイカお断りの人には、この写真はメロンです。と渡されたものだが、実はうまくペイントされたスイカだった。ということ。受け取った側にしてはそれは受け取った時点でメロンであつてスイカではない。と、考えてしまふし、確かめる手段は写真に写った実物触つて確かめるしかない。つまり、受け取る側の人（結界）はメロンにペイント（認識阻害）されたスイカ（ツルギ）を招き入れたということ」

避け矢「騙ス。…認識、阻害？」

アルフ「なんか、無茶苦茶な気が…」

ツルギ「まてい、じゃあ俺は？全裸になつた意味あるの？」

たかB「ほほないよ」

ツルギ「ないの」

フェイト「でも、私たちは侵入するのに苦労するよ」

避来矢「我、フェイト嬢、アルフ嬢。相違点、有？」

たかB「避来矢はチート仕様です。内容は秘密です。でも今のところ機能は一つずつしか使えません。使わせませんつ！」

アルフ「また、ぶっちゃけたね」

ツルギ「あのさ、一回目の結界突入の時なんだけど、どうして俺は奇襲が成功できたの？たしか追い出されるはずじゃ」

たかB「結界に突入。感知。追い出す。という手順で追い出される。ツルギが攻撃を加えた時、は感知の段階。追い出す前に避来矢が回収。結界が崩壊。というわけ」

フェイト「あ、あの最後に質問。…いいですか？」

たかB「どうだ？」

フェイト「このあとがきに来れる人の選別つて？」

たかB「十文字以上喋った人が入ってこれます。あと、新ニューカマーキャラを優先に四名ほど。今回、ミネルヴァとアリサがいな
いのはそのため」

ツルギ「次回予告」

たかB「未定!!」

作者を除く全員「「「「」」」ああああああああああああつ---」」」

第四話 天然少女とベタレ少年。（前書き）

これからしばらくは「メモテイー」に入りますよ。

第四話 天然少女とベタレ少年。

「破傷風による高熱だと思つ。あと貧血。煮干しや海藻は食べれるか？」

「あ、はい大丈夫です」

私、フェイトは使い魔のアルフ（犬モード）と共に田の前の男の子の部屋で看病してもらつっていた。アルフ曰く「問題なさそうだから」とのこと。あの警戒心の高いアルフをどうやって納得させたのかはわからぬけど、私はされるがまま彼の出してきたおかゆを食べている。私も何となくだがこの人を信じてもいいと思っているのかもしねりない。

バルディッシュ・避来矢「…………】

「ツルギ、このカニ缶食べてもいいかい？」

「えーと、アルフさんは蟹食べても大丈夫なんですか？」

「なんでそんなこと聞くのさ？」

「いや、だつてさつきまでドックフードをモリモリ食べていたから。犬や猫はカニやエビを食つと中毒になるとか…」

「あたしは使い魔だつて。そりや、さつきは脅しのつもりでそんな格好もしたけどさ」

「ああ、またしても…どうして俺が好きになる人はみんなこう

なんだ（ボソッ）」

「…メンテナンス。コンプライート。システム、オールグリーン。
サンキュー、ヒライシ」

「修理、完了。バルディッシュ、情報、提供。可能？」

「何やつてんだい、バルディッシュ。まだ、ここつらを信用して
いいわけじゃ」

「あ、アルフさん。リンクありましたけど食べますか？」

「食べる」

「アルフ、もしかしてご飯で釣られた？
バルディッシュも大きな黒い剣の上で青白い光に包まれていた。
どうやらあの光はメンテナンスと修理を兼ね備えていたようだ。

「まあ、おかゆを食つたらこの薬を飲んで、コーワーブッシュ?
だつたかな。こいつには俺も散々お世話になつてゐるから多分効く
と思う。ただし、眠くなるからおかゆを食べながらでいいから話せる
だけ話してもらえるか？」

「あ、はい」

ツルギと呼ばれる男の子から水の入つたコップと小さなカプセル
を受け取る。彼に敵意はもちろん裏があるようには見えない。何よ
り、こんな不思議な空間にいられることがとても嬉しかった。どれ
くらぶりだわ。こんなに優しい空間は。

「んじゃ、俺から。アルフさんには話したとは思つけど名前はツルギ。…ああ、構わずおかゆを食つてくれ。俺は従兄弟からりオストーン。君等のいうジュエルシードをあの避来矢に封印・浄化をするのが目的でこの町に来ている。で、ジュエルシード反応があつたから、封印をしようと思って海の方に再度来てみれば君らがいて、代わりに封印していた。その光景を見ていたらいきなり君が倒れて、見た感じだと俺でも手当が出来そうだからここに運んだ。オーケー？」

「ムグムグ。…はい、オーケーです」

「私はその間にツルギからジュエルシードを一個ぶんどつたよ」

「へー、て、アルフ！」

「わわ、落ち着いてくれよフェイト、もうひん同意の上でだよ」

「そうだぞ。えーとフェイトさんでいいか？一応信じてもうつために俺もそれなりの誠意は見せるさ。ここに来る途中でアルフさんに一個ジュエルシード（浄化済み）を渡したぞ」

「フェイトでいいです。それよりツルギはどうして助けてくれたの？」

「助けられそつだから」

「それだけ？」

「それだけ。ところでフェイトは何のためにリオストーンじゃなくてジュエルシードを集めている？」

「……すいません。あなたのことを疑うわけではないのですけど

「……わかった。話してくれたらもう一個ジュエルシー^ド。そういう納得のいく理由だったらもう一個あげる」

その言葉に私は耳を疑う。彼はまだジュエルシー^ドを少なくとも一つは持つてること。そして、その一つを私に譲る気でもあるといふこと。

「いいんじゃないかい? フェイト、私はツルギが管理局とは無関係だと思ひしゃ」

「……アルフ」

「それに私たちがこのままジュエルシー^ドを集めていたら大変なことになっていたかもよ。ねえ、バルディッシュ」

「え?」

「アシトアウト」

バルディッシュからジュエルシー^ドが一つ出てきた。一つは写真通り青い石。そしてもう一つは白い石だった。

「なに、これ?」

私は一つのジュエルシー^ドを手に持つてみる。青い方は未だに力が中で渦巻くように動いているのが分かるのに対し、白のジュエルシー^ドはとても穏やかな気配を感じさせていた。

「フェイト嬢。御粥、食事、優先。主。説明、及び、情報、提供
？」

「そうだな。避来矢。説明を頼む」

それからツルギと避来矢はいろいろと話した。

私とバルデイッシュが行つていたジユエルシード回収。あれではまたジユエルシードが暴走することがあること。避来矢の浄化機能でようやく機能を完全停止することが出来たということ。避来矢曰くあの状態はエンジンがかかつたままの車と同じでいつバッテリーが上がりてもおかしくない上にちょっとしたことで急発進がある。可能性としては少ないけれどもゼロではない。浄化して白のスタンバイ状態にまで持つていかない限り完全には安全といえない。現に手を持っているとわかる。青より白のほうがとても安心できた。

「…というわけだ。もう、俺が説明することはないと思つんだが」

「…本当に管理局の人ではないんですね？」

「少なくとも入った覚えはない。よな、避来矢？」

「同意」

「…わかりました。お話しします」

「んじゃ、避来矢。もう一個」

「了解」

「あんた、どこでこんなに手に入れたんだい？」

「郵送されていたんだ」

「…バカにしている?」

「アルフ嬢、事実。我、主、以外、追加、一組、封印、可能」

「えーと、避来矢の話す言葉は難しいね」

「すみません。一応説明したと思うけど今、外国を飛び回つている従兄弟が送ってきたんです。サカサとミネルヴァというんですけど。あっちも管理局ではないと思います」

「どうして?」

「あいつは人に使われるのが心底嫌いなんだ。使おうものなら」

「なら?」

「」の世に生まれたことを後悔させられるね（断言）

「…どんな奴なんだい」

「弁護士、医者、考古学者、調理師、世捨て人、尋問官」

「それから獄卒鬼で遊び人で女好きでイケメンで、重火器やハッキングが得意で文武両道なやつかな」

「本当にどんな人なんですか？」

「それは俺も知りたい。ただ、敵に回したら一番後悔する人間だ
るわ。… フィイトも気をつけろよ」

「へ、うん」

あまりの真剣な顔に私は思わず頷いた。… サカサさん。怖い人な
のかな？

避来矢からもう一つのジュエルシードを受け取りバルディッシュ
に渡す。そして、ふと思った。暴走の恐れがあるのなら今のうちに
避来矢に頼むべきなのではないかと。

「あの…」のジュエルシードも浄化してもらいますか？」

私は青いジュエルシードをツルギに渡す。その行動にツルギは首
をひねって尋ねた。

「…？構わないけどいいのか。そのまま持ち逃げするかもよ？」

「構いません。ツルギは返してくれますから」

何か苦い顔をしながらツルギは頬を搔いていた。どうしたんだろ
う？

「まあ、逃げても無駄だし。あたしらから逃げられない。それは
自覚してんだる？そ・れ・に、あなたの匂いはばっちり覚えたか
らね」

「ま、まあね」

「それにあたしもあんたを信じていてるからね」

「……うう」

ツルギはフレッシュナーを感じてはいるのか、お腹のあたりを手で押さえながらつむじてしまった。まるで顔を合わせることを怖がっているかのように。

「だ、大丈夫だよ。べ、別に怖いことをしようなんて思ってないから」

「…井」

避け矢も自分の「主人様を心配して声をかけてきている。

「そ、それじゃあ、私がジュエルシードを集めている理由はね。お母さんのためなんだ」

「お、お母さんですか？」

「うん」

それから私はいろいろと話した。ジュエルシードのことをしつて襲撃したこと、それがどうしても必要であること。そして、いつの間にか私はお母さんが普段私に対してどんなことをしているのかを話していた。

「私はお母さんに笑ってほしいんだ」

「す、すまん」

「いいよ、気にしないで」

[...主]

ツルギは涙を眼に浮かべていた。私の身の上について話して同情したのかな？

「…でも

私は一度言葉を切つて、ツルギにできるだけ優しい笑顔を向けた。

「ありがとう。こんな私のために泣いてくれて」

するとツルギは全身をブルブルと震わせながら大粒の涙をこぼしながら私の顔を見る。そして、

「す」

「す？」

何故か土下座を行つた。

ツルギ視点

フェイトからジュエルシード（浄化前）を受け取つて俺は焦つていた。何故なら、こつそり避来矢に頼んでできるだけ友好的な雰囲気を認識阻害で作り出すようにお願ひしたからだ。現にアルフさんの懷柔に成功。そして、その主人であるフェイトを懷柔しようとしていた。しかし、これって、詐欺…だよな。

そんなことを考えている最中にフェイトからの信頼しきつた行動に良心を痛めていた。

「構いません。ツルギは返してくれますから」

フェイトの攻撃。どかつ、「せやあ」、良心に二十一のダメージ。
残りライフ148／170

なんだ？今の不可思議なモノローグは？と良心を痛めている俺にさらなる攻撃。

「それにあたしもあんたを信じているからね」

アルフは追撃した。がすつ、「ぐう」、十八のダメージ。

「だ、大丈夫だよ。べ、別に怖い」としようなんて思つてないから

フェイトは擁護した。どじん、「おつふう。お、俺は君をだましているのに、な、なんて優しいんだ」、効果は抜群だ、四十三のダメージ。

「…主」（序盤、同情、作戦、水泡）

わかつてゐるが、避来矢。そつだともこの子は俺たちの敵になりうるかもしぬないのに、こ、こんなことで負けてたまるか。

「私はお母さんに笑つてほしいんだ」

フェイトは身の上を聞かせた。グウツサツアアアア。「ぐうううううおおおおおああああああ！」痛恨の一撃、六十八のダメージ。

「…主」（挽回、心、変貌、鬼）

わかつてゐる。わかつてゐるんだ避来矢！心を鬼にしないとこのままじややられる。わかつてゐるんだ。こ、これで会話は終われば、

「ありがとう。こんな私のために泣いてくれて」

フェイトは極上の微笑みを放つた。ペツカアアアアアアアア。「…ひ、光が見えるよ」急所に命中、九百九十九のダメージ。良心は死んだ。そして、

「すみませんでしたああああああああああああああああああ！」

俺はフェイトに屈服した。

翌朝。

「…い、行つてきます」

「おう、行つて來い。帰つたらO・SIE・O・KI再開な」

「…はい」

アルフ（呼び捨てでいいと言わされたので）に見送られながら本日、初の登校日。転校してアリサ達の通う学校へと向かう。

あの後、俺は全部ぶっちやけた。アルフに殴られた。フェイトにはバルディッシュで感電させられた。避来矢には呆れられた。ごめんよ、こんな主人で。でも、友好的に話せる場を作りたかったこと、ジユエルシードのこと、管理局とは関係ないことは本当のことだと信じてもらうまで必死に説得（自己弁護ともいう）を行い、フェイト達に全面協力の元、ついさっきようやく解放された。

フェイトは暴れて疲れたのか今は布団でお休み中。アルフは看病。俺はシャワーだけを浴びて登校。一応、避来矢は小さくして鞄のアクセサリーにしている。これでいつでもバルディッシュを通じて会話することが出来る。携帯いらずだ。

「うう、何がなんでこうなった？」

青空に浮かぶ太陽を見て俺は涙した。

余談ではあるが、なのはがフェレットから受け取った宝石でツルギを追いかけていた野犬のうちの一匹を昨晩仕留めたそうだが、フェイトとアルフはツルギをボコついていたので気づかなかつたそうです。

第四話 天然少女とヘタレ少年。（後書き）

あとが「バスタアアアアアアアアアアツ！なのー！」なのー、なー、なのー。（反響している）

たかB・ツルギ「『ぎやあああああああああああああつー』」

କବି ଦୁଇ ରହିଲା ତାଙ୍କୁ—

今回のあとがきは雑に扱われたなのはさんによる砲撃により作者が致命傷を負つたためお休みさせていただきます。

避来矢〔次回、予告〕

アルフ「避来矢、あんたの主人も一緒に吹き飛んだんだけど」

避来矢〔次回、予告〕

「が」

避来矢「次回、予告」

アルフ「ああ、もう諦めていいんだね」

フエイト「じゃ、じゃあ、次回、転校初日・午前。テイクオフ。
でいいのかな、避来矢?」

第五話 転校初日・午前（前書き）

たかB 「投稿してからずっと編集。といづ、一ことが続く。何かおかしいなと思ったら教えてください。できる限り早く治しますので」
お願いします。

第五話 転校初日・午前

事件は現場で起きている。じゃあ、じゃあ裁判はとこう。
私立聖祥付属小学校三年A組。時間にして午後五時。ここで起き
ている。

「判決死刑。で、何か言い残すことは」

裁判官 アリサ・バーニングス

被告 月野ツルギ

被害者 月村すずか

第一発見者 高町なのは

「滑つて転んで月村の衣服を縦に破きました。でも、事故なんです。無実です。上訴します」

「却下します。そんなことが通ると思つてんの！」

カツ。

暗い教室の中で机を一つはさんで白熱電球の光をツルギの顔に付
きつけるアリサ。アリサさん。それでは裁判官といつよりも尋問か

「ああつ」何でもないです。

「なのはの話じやねえ。いつなつていいのよー。」

高町なのはは語る。（田元に黒い線が入っている）

私、見たの。遠くからだつたからわからないけど、あれは確か

にツルギ君だつたの。すずかちゃんと何か話していると、すずかち
やんがツルギ君の鞄から何かとつたかのようなじぐさを見た、次の
瞬間 -

なのはは震えながら言葉を紡ぎだした。

ツルギ君がすずかちゃんを廊下の角の向こうに押しあつた瞬間に、何かを引き裂くような音がして、私がそこに見に行つたときは

「あくの、え、え、エッチな本の上に服を破かれたすずか、の上に、息を荒くしたアンタがいたつていいじゃない？」

「事実です。が、事情があるのです」

「どんな事情よー」

「どうでも知られたくない物を円村さんが触れようとした。否、触れたのでそれを取り返そうとしたら滑つて転んで以下略です」

「知られたくない物つてこののは…」

「俺にとつて大事なものです」

「あのエッチな本のことかああああああー」

白熱電球をツルギの頬に押し付けながらアリサはぐいぐいとツルギに問い合わせる。

「あつ、熱いって、アリサ。もう刑を執行しているの?ー」

「うるさいうるさいうるさいあああいっ！」

パリン。

あまりにも強くやりすぎたせいか、白熱電球は割れてしまうがアリサは気にしていない。気づいていない。

「いたばばばばばばばばばば」

「ツルギのバカアアアアアア！」

「…主。我、謝罪。生還、希望」（小声）

割れた電球を押し付けられて感電しているツルギと涙目アリサ。そして、その二人を近くで静観している避来矢はツルギの生還だけを祈っていた。

「本日、休憩時、想定外、事象、勃発。主、被害者。サカサ、主犯。主、同様、すずか嬢、本日、災難」

避来矢は思い出す。事件の真相を。

今から三時間ほど前。

ツルギ視点

「…とこつわけでじばらくの間にここでお世話になります

職員室で校長及びこれからお世話になる四年B組の渋谷先生に頭を下げる。特技は料理。奥さんと一人の娘さん持ち。見た目は気のいいメガネのオッチャンである。

市長（サカラの情報操作。本当に何やつたんだ？）が保護者代行を務めながら職員室に案内された。担任及びほかの先生方は極めて普通なのだが、その後ろで。

がたががたがたががたがたがたがたがたがたがが。

零下十度の下を裸で歩いている人のように震えている校長と教頭、そして理事長の学園トップスリーがいた。三人とも結構な年齢を言った人たちなのに震えに震えまくっていた。ちなみに摂氏四十度でもあそこまで搔かないであろう汗（冷や汗？）を流していた。

ପ୍ରକାଶନ କମିଶନ ଅଧିକାରୀ ଏବଂ ପରିଚାଳକ

「...は?」

「ムジウミ」

「ひ？」

「よろしく頼みますっ！ですかうっ！」

もしも。

「「「家族（自分）には手を出さないでください…」」」

サカサ、お前本気で何やつてんのーつ！大の大人が土下座をして

まで俺をバックアップするほどの何を握っているの？！逆に怖いよ。こんな脅迫がらみのバックアップ。しかもどういうわけか頂点がそれに準ずる人たちにのみ効果を及ぼすだけで他の先生方には及んでいない。あまりにもプライベートすぎて他人に相談できないほど代物なのか、身内に被害が出るほど。怖いすぎるつ、あいつの情報網！

「……じゃあ、行こうか？」

「し、渋谷君。そ、粗相のないよう」

「そ、そうだぞ。体罰は許されるがそれ以外は出来るだけもみ消すよ」

「彼を無事に卒業（もしくは転校）させたら特別給与を貰えるからな」

体罰は許されるのか！反抗するぞ。いざとなつたら胸ポケットに入れている避来矢で…。

「……主」（音量最少バージョン）

「冗談だ。避来矢。認識阻害を使ってから…。

「完全、犯罪？！」

…………「冗談だ。

「……主？」

〔主、熟考、推薦、倫理、要、勉強〕

仕方ないだろ。身内が身内なだけに敵対する輩には容赦なく拳がふれるんだから。逆にふらないとなめられることだつてあるんだ。…女の子や自分より弱い人（悪人を除く）は別ですよ。忍さんと言われたからね。避来矢とそんなやりとりをしながら俺は教室に入る。それからは滞りなく挨拶を行い、転校生恒例の質問攻めにあう。

「得意なものは何ですか?」 「持久走です」 「好きな食べ物は?」「いなむるぢ（沖縄の豚汁）」 「好きなタイプは?」 「綺麗なおねいさん」 「…年上好き?」 「どちらかといえば年上、でも髪がきれいな人も好きです」 「どうして転校してきたの?」 「平おひ、じゃなくて従兄弟の手伝いできました」 「今までどこにいたの?」 「…海外。でもハイゴテキマセン。あそこでは従兄弟が通訳してました」 などなど。

そんなことをしていると、渋谷先生が段ボール箱二つを持ち込んできた。それぞれに男子用女子用と書いてあつた。

「それじゃあ、これをおみんなに配つてくれるかな?月野君」

「なんすかこれ?」

「君の保護者がみんなに配るよつこと。たぶん、差し入れじゃないかな。本来はいけないんだけど特別にね。あと、手紙も預かっているから、ついでに渡しておくな」

周りのクラスメートがわざと騒がしくなるのを肌で感じながら、

先生から封筒を受けとり段ボール箱を片手で開けていく。封筒の中には三枚の封筒が入っていた。まず一枚目を読みながら女子用と書かれた段ボールの開封行つ。

剣へ

お前は今、日本とはいえ俺の課した任務にあたつていることだろう。小学生に怪物と國家。どちらを担当させようかと思ったら、ファンタジー小説なら怪物だな。と、思い出した。ので、引き続き怪物退治及び回収・淨化頑張つてくれ

いや、思い出したじゃねえよ。まだ、相手にしたのは野犬と蟹男と狼お姉さんと電気な鎌を持った女の子。十分ファンタジーだな。と、手紙の一枚目を見ながら段ボールの中身を取り出す。

「えーと、じゃあ。つまらない物ですが…でいいのかな?みんなに喜んでもらえると光栄です」

さて、そんなお前に小学校での思い出作りの手伝いをしてやるために面白いものを用意したからクラスのみんなに配るといい。きっといい思い出になると思つ。まず、女子には

白のブライジャーとパンツ(少女用)

そして、時は動き出す。

時間にして0・3秒の間があった。

俺はそれを目で確認した後、急いで段ボールに詰め戻し、その段

ボールを持つて避来矢のナビの元、焼却炉のある裏庭へと向かう。そして、焼却炉に段ボールを丸ごとつっこみ火をつけた。

「まったく、あいつは何を考えているんだ」

そう言いながら焼却炉から戻つてくるとクラスの皆は苦笑いを浮かべていた。これは聞かない方がいい。満場一致で暗黙の了解だつた。

「すみません。何かの手違いがあつたみたいで使えない物が入つていたみたいです。では、続いて男子には」

クラスの皆さんに謝りながら、男子用と書かれた段ボールを開ける。ちなみに手紙の続きをこう書かれていた。

男子には

ピンクのブラジャー。青と白の縞パンツ（少女用）

再び、時は動き出す。

時間にして0・1秒の間があった。

俺は以下略。

「あいつは本気で何考えてんだあああああああああああああ！」

従兄弟の俺を破滅させたいのか。ちなみに手紙の封筒にはこう書

かれていた。

手紙一杯に、三文字が、でかでかと、じら、書かれていた。

馬鹿め

「ふつ飛ばしてやるー今度会つたら絶対にふつ飛ばしてやるわ」
「ひつひつひつーーー」

魂の咆哮を教室で上げ終えると、事情をくんでくれたクラスの皆から励まされた。俺の転校初日の朝は明けていった。

なのはサイド

「じやつ」

「ひやつ」

「なじつ。じの声は…ツルギ?」

授業を受けていた私たちは聞き覚えのある叫び声に身をすくめた。隣では私同様に肩をすくませたすずかちゃんと首をひねつているアリサちゃんがいた。

「ツルギ君、もひの学校に来たんだ。でも今の叫び声は一体?」

「うん、大声を上げるよくなーい…よね、アリサちゃん」

「…うん、特殊な場合を除いてね」

私たちは小声で話し合つ。幸い、先生や他の皆もシルギ君の雄叫びに驚いて気づいていない。

「特殊って、どんなことなの?..」

「二一つあるわ。一つは自分の身に何か危機的な状況に陥つた時。例えば熊とか、ね」

「それは悲鳴なんじゃ…」

私もそう思うの。しかし、すずかちゃんの問いかけにアリサちゃんは首を振つて言葉をつなげる。

「ううう。あの時は「熊鍋じゃあああああ！」て、叫びながらサカサと一緒にナイフ一本で狩りを行つていたわ。三日間、何も食べてなかつたらしくて。…私、びっくりして猟銃を暴発させちゃつた。」

「あー、あの時の話の真相はそれだったんだ」

「じゃあ、もう一つは?..」

私たちはアリサちゃんの顔を窺つていると、アリサちゃんはぽつりと呟いた。

「いたずら。しかもたちの悪い悪戯よ。サカサには、私も一緒によくいじられていたからわかるわ。何かとんでもない悪戯に巻き込

まれているときに放つ咆哮ね。これは「

「サカサ？もしかしてあの月野逆さん？関係した会社は盛り上がるか倒産する。ううん、社会的にだけではなく、物理的にも崩壊するのが多くて、陰のある重役や役員が一族郎党行方不明になるあのサカサさん？」

だれなの？そのサカサさんとかいう人？怪獣？はつ、もしやジュエルシード！？ユーノ君つ、…は、さすがにないか。たった数日でそんな大それたこと…

「ええ、そうよ。彼曰く、物理的になら三時間もあればどんな会社も粉々にできる。とか言っていたわね」

(ユーノ君！ジュエルシード所持者かもしれないよ！大変だよ、怪獣だよ、怪獣に変身しているよ！-レイジングハートを急いで持つてきて)

(…え、なのはーほ、本当、ジュエルシードをこの世界で扱える人間なんて信じられないよー)

私は急いで昨日引き取ったフェレット。ユーノ君に念話をを行う。レイジングハートはユーノ君から受け取った小さな赤い宝石。これはデバイスで、簡単に言うと魔法のステッキなの。

これは一大事なの。なにせ、会社どころか関係者にまで手を出す極悪非道の人なの。

「まあ、サカサとツルギのおかげで私たち親子は助かつたんだけどね」

「あ、もしかしてあの誘拐事件。非公開で解決したのは」

「ええ、サカサがスナイパーライフルで援護射撃を行いながら、ツルギがスタン機能搭載（サカサ特製）の警棒で誘拐グループを叩きのめして、私を助けてくれたの」

（…ごめんユーノ君。なんだかよくわからない人らしいの？いい人かも？）

（え、もう来ちゃったよ。今、屋上なんだけど）

（ちょっと待つてて、もう少し詳しくなつたら連絡するから）

「えーと、どういう人なの？」

私は混乱してきたので尋ねる？サカサさん。どんな人なの？

「えーと、確かマジシャンでミュージシャンで商社マンでスナイパーでイタコで靈感が強くて、あとなんだっけ？ハンター？」

本当に訳が分からないの一。その人、本当に一人？グループ名じゃないの？何人かで分担しなきやそんなにできるはずがないの一。最後は疑問系だし。

「とにかく、味方としても厄介だけど、絶対に敵に回してはいけない人ね。敵対しようものなら、物理的にも社会的にも消える。って、本人が言っていたけど冗談には聞こえなかつたわ」

「……」

すずかちゃん。無言にならないで。なんだかとつても真実味がつて怖くなるの。アリサちゃんの絶対の部分はかなり力が入つてたし。

「まあ、次の休み時間にでもツルギを捕まえて話そうじゃない」

「そ、そうだね。ツルギ君、どこのクラスなのかな？」

(とりあえず、ユーノ君。ツルギ君を探してくれないかな。次の休み時間でお話ししたいから)

(……う、うんわかったよ！なのは！必ず見つけておくよー…)

(ユーノ君、何をそんなに怯えているの？)

(……いや、その。何故か体に悪寒が走つて…)

やけに力が入っているユーノ君。風邪なのかな？

第五話 転校初日・午前（後書き）

あとが

アリサ「あとが？」

ぴろりろりーん。

すずか「あ、何かメールが来ているよ。なにに？」

頑張つてあなた様が書けるようになりますので今しばらくご容赦ください。たかBBBBBBBBBB…（このあとBがずっと続いている為省略）…

なのは「仕方がない作者なの」

アリサ「…作者（書いている途中で力尽きたのね）」

すずか「…今日は魔法はなかつたね（）の間のあとがき。まだダメージが消えてないんだ」

今晚のおかず。だつたもの「コーンです。イタチです。食べ物ではありますんつ、正しくはフュレットです、もう一度言います、食べ物ではありません！」

なのは「次回は活躍しそうな予感。やつとリカルなのはの一次らしくなってきたの。これだから駄作者は…。今回もなんだか出番が少ないし…」

レイジングハート「スタンバイレディ…」

すずか「ちよ、なのはちゃん。なにでバイク起動させているの？」

「…」

なのは「ちよ…………と、作者さんのいるところのお話に行くだけだよ」

アリサ「…止めるわ、全力で止めてみせるーなのは、まだそれは早すぎるわよー…」

なのは「あ、アリサちゃん、返してっ。私のじつもムームーっ」

なのはの口及び四肢に光の輪つか（バインド）が装着されました。

ユーノ「ごめんっ、なのは！でも、まだローマ字じゃないんだ。漢字が使われている状態を維持したいんだ！」

アリサ「ナイスバインド、ユーノ！すずか、レイジングハートをあとがきの外にぶん投げて！」

すずか「わかった。えーい！ユーノ君！」

レイジングハート「ジャイロシユート？！」

キラーン（レイジングハートは星になつました）。

ユーノ「了解！結界展開！」

キンッ。（結界を展開しました）

すずか「これで一安心」

なのは「みんなひびいの一」

アリサ「仕方ないでしょ、あんた。ここはまだ無印なのよ
なのは「ぶー。…仕方がないの。でも、やっぱり納得いかないの
ー」

すずか「まあ、今回のは確かに

ユーノ「アリサがといつよりサカサガ最後を持つて行っちゃった
よね。本当に何者?」

なのは「最後どころか最初からいたのつ。姿かたち表していない
のに、作者は身内びいきなの!」

ユーノ「まあ、彼は魔力と身体能力以外はチート仕様らしいから。
シリアルス・コメディー両方にけるらしこし」

アリサ「まあ、手紙一通での出来事だものね。まさに才能の無
駄遣い」

なのは「今度は私が絶対目立つのーー!次回予告ー転校初日・昼
休み!テイクオフなの!」

すずか「作者さん。本気で頑張ってください」

ユーノ「でないと次は本気で危ないから」

アリサ「次は止められる自身がないわ」

第六話 巨大な天使と魔法少女 + 。(前書き)

？？？「作者さん、私に嘘の次回予告させたので減点十ナノ

たかB「すみません！でも、…後悔はしていない！」

？？？「ほう？」

たかB「すいませんすいませんすいませんすいま

？？？「あとがきに続くの」

第六話 巨大な天使と魔法少女 + 。

「…つ、疲れた」

ようやく昼休みという休憩時間に入った。俺は机に突っ伏し頭から湯気を出していた。

疲労困憊の原因はサカサの悪戯で半分。そして残りの半分勉学によるものだった。考えてみれば幼稚園の時に武芸一色に教育を施され、ここ一年はサカサの研究の手伝い及びハチャメチャな生活に付き合っていたせいか勉強をする時間なんてなかつた。おかげでノートに日本語と数字をただ書き写しただけでも脳みそはオーバーヒート寸前。食欲もわかない。野菜ジュースだけで事足りそくながらくに俺は疲れていた。

「…大体、九九ってなんだ?一桁の掛け算?テロリストの持つ機関銃の弾ぐらいにあんな数字、お目にかかることなんてあるのか?」

「主。反復。我、音量、効果、最少、教鞭。 2×1 、 2^o 、 2×2
…」

ぎやあつ、避来矢。後に、後にしてくれ。今にも脳みそが焼け付きそうなくらいに熱いんだ。お願「否、主、教養、不足。 4×3 」
うわあああん。

「ツルギくん。ちょっとといいかな? 可愛い彼女が来ているよ?」

そんなければいけない人いたかな? 避来矢が呪詛のよつな九九を唱えていると、女子クラスメートから声がかかった。顔を上げて指さす方を見るとそこにはアリサがいた。白を基調にした我が校の制服。

特にアリサの長い金髪は清楚な制服とロングスカートにあって確かにかわいらしい。つ、！なにつ、なんかものすごい気配を感じたんだが。まるで狙っていたウサギを横取りされたライオンに睨まれた妙な感覚は（実体験）。思わずミニ避来矢を右手で取つて、周りに注意を向けるとクラスの男子が睨んでいた。

「ち、違うぞっ、確かにアリサは可愛いが彼女ではないぞ。そりや、恋人だつたらエブリディいやつほ。だけど、そういうのではないぞ！」

「そ、そうよ、そういうのではないわ。ツルギと私は奴隸とその主人よ！」

疲労を押し殺しながらクラスの皆に弁明するとアリサもそれに続いて追加弁明を行う。…奴隸か。言ひえて妙だ。確かに俺はアリサに逆らえないんだよな。…せめて友人とかだったらよかつたのに。

「えー、顔も赤いし、怪しいいなあ。あ、わかつた。友達以上恋人未満って、やつでしょ。いいなあ、そのいじらしさが何とも」

「違うわよつ、友達未満恋人未満よ！」

「…アリサ。それではただの知人。もしくは他人だ」

俺はせめて友人でいたかった。

「う、うるさいっ、とにかく中庭に行くわよ

「はいはい、了解しました。ご主人様」

「『リサ』」

女子から興味の対象として、男子からは殺意の対象として、俺は避来矢をポケットに突っ込んで教室を後にした。帰るのが怖いんだが…。

なのは視点

「おーい。昨日ふりだな、高町。月村」

「やほー、昨日ふりだねツルギ君。失恋の痛みはもういいの？」

「す、すずかちゃん。それは言こ過ぎ」

その言葉を聞いたツルギ君はその場に崩れ落ちかけていた。片膝までついて涙目になっていた。

「うう、もう勘弁してくれよ。月村。病院で声を聞き間違えただけなのに…」

「それは駄目」

「うん、それは私も同感なの。女の子をほかの人と聞き間違えるなんて最低なの」

ツルギ君はフェレット。ユーノ君が運び込まれた病院で合流した

ときによずかちやんの声を聞き間違えて忍さんと勘違いにしてしまい、「あれ、忍さん？」と言葉を滑らせていたの。

「「ひつ、だからお詫びもかねてジュースを奢るから、月村も高町も勘弁して」

ツルギ君の右手にはビニール袋が一つ。中にはオレンジジュース、いちごミルク、ウーロン茶、牛乳、野菜ジュース。の五つの飲み物が入っていた。

「うーん。まだ少し足りないかな。ツルギ君」

「まだ何か奢れと」

「そういうことじゃないわよ。馬鹿ね。ツルギ」

「やうなのツルギ君」

「どうして？」

アリサちゃんは未だに渋田なツルギ君の様子にため息をつきながら私たちのいるベンチに腰を下ろし、お弁当箱を広げた。私たち三人もそれにならいお弁当を広げる。席順としてはアリサちゃんの隣にツルギ君。四角テーブルを挟んでツルギ君の向かいが私でその隣がすずかちゃんの構図だ。お弁当をみんなで食べ始めてからすぐにつるギ君にお弁当がないことに気づく。

「で、ツルギ。あんたお弁当は？」

「んな器用な物俺が作れるわけないだろ。できるのはカレーか、

おかゆとかぐらいだ。それに今は食欲ないし、野菜ジュースとじーかつぶで十分だよ」

「 「 「 ぶふふ 」 」 」

私たち三人はツルギ君からもらつた飲み物を噴出した。

「 … なあ、高町。海外暮らしのせいで間違つてこるかもしけないが人に向かつて飲み物を吹きかけるのは良くないことだと思うのだが? 赤い物を吹きかけていいのはレストランだけだぞ」

ツルギ君の所為なのつ。なに、じ、ジーかつぶ。て、牛乳と書いているよね、それ。

「 つ、ツルギ君。これはなんて書いてある? 」

顔に吹き付けられたオレンジジュースをハンカチでふき取りながら、すずかちやんは野菜ジュースと書かれたパックを指さす。

「 ん? やむじじゅーす。だろ? 」

「 じゃあ、あれは? 」

同様にアリサちゃんはすずかちやんの持つていたウーロン茶の缶を指さす。

「 ハーひんひん 」

「 じゃあ、それは何て書いているかわかる? 」

最後に私がツルギ君がまだ開けていない牛乳パック250mlを
イズを指さす。

「じーかつぶ」

「」「なんでつ?...」「」

私たち三人は全員でツツ「//」を入れる。

「あれ、えいちかつぶ。だつたか?」

そういう問題じゃないの?。

「...そういうと誰から翻つたの」

「サカサ。あ、こりは日本だからーーかつぶ。が正解か?」

サカサさん。ますます訳の分からない人なの。

「違うわよ。牛乳よ、ぎゅうにゅう。なんで今までその読み方に
不思議に思わなかつたの! あんた自分で勉強したことあるの!」

「自慢にならないが、勉学を自分でしたことなど一切無い

「本当に自慢にならないよ」

ツルギ君。もしかしなくとも...馬鹿?しかも影響したのがサカサ
さんの影響が強いみたいなの。こり、これは酷いの、ツルギ君。可哀
相なの。

「…まあ、高町。なんで俺を涙田で見る?」

それからツルギ君の知識を確認しながらお昼時間を過ぎて、ツルギ君のことわかったことが一つ。ツルギ君は一般常識はあるが、教養というか、小学一年生レベルの国語や算数がやつと。という残念な脳みそだというのが分かったの。

「まあ、あんたがもう十歳で一歳年上だつたなんてね。なんか納得いかないんだけど」

「俺もだ。いつの間にか四年もたつていたとは」

ツルギ君はすぐ遠い目をしていた。今は昼時なのに夕暮れに映つた哀愁を漂わせた横顔を見せていた。サカサさんもそうだけど、ツルギ君も相当変なの。

「それじゃあ、放課後。翠屋に集合ね、ケーキを食べながら宿題をするわよ」

「「おー」「

アリサちゃんの提案に私たち一人は手を上げて答えるが、

「おー、がんばれ

「ツルギ、あんたも来るのよー」

「あー。今日は無理。先客といつか用事（ジユエルシード探索）があるから…。午後からは学校を抜けてそっちに向かわないといけないし」

「どんな用事よー。」

アリサちゃんがさりげなく詠め寄りツルギ君に襲いかかろうとした。
が、アリサちゃんはツルギ君の一言で大人しくなる。

「サカサ関係な？」

「がんばるのよ」

対応が早ーまだ言い切つていなこよ。そして、アリサちゃん曰く
田をしながら親指を立てる。心なしか全身真っ白の気がするのは気
のせい…とは言えないほど機械的だったの。

「今度の日曜あたりちゃんと時間を作るから。その時にじっくり
れ

「いきてかえつてくれるのよ」

「…アリサ、俺、今関係している用事を済ませたら一般日本小学
生並の生活を送るんだ」

死亡フラグ！ツルギ君、そんなことを言つたら叶わなくなっちゃ
うの。

「うん。わたしまつているから

アリサちゃん、そんなことを言つたら帰つてくれなくなつちゃう
のー、それは追い打ちフラグだよ。心なしかセリフが全部平仮名
だし。

「んじゃ、俺は職員室で校長先生（サカサに脅迫された人）に説明してくるから。…また、明日…な

なんで最後の方、間があつたの？

ツルギ君は私たちに背を向けて「あらを振り返らずに手を振つて行つた。

…このままいかせたら駄目なのつ、確実に死亡フラグを連発している。今の状態じゃツルギ君とはお葬式で会っちゃうの。

「ツル gg」

（なのはー・ジユエルシードが出たー・この学校にいるよー・結界を張るからそこから動かないで、すぐ行くからー！）

妙に色あせた背中を呼び止めようとしたとき。ゴーノ君から念話を受ける。ちよ、ちよつと待つてコーンk

キンッ。

ガラスを弾いたかのような綺麗な音が響くと緑色の光が学校全体を包み込む。…ああ、もうツルギ君は角を曲がったところで見えなくなつたということは結界外ということ。とりあえずこのジユエルシード騒動を終わらせてすぐに追いつく。

「『めんね、なのはー！今回ばかりは急いで解決。というより結界を張らないとかなりの被害が出るんだー』

後ろから声が聞こえたと思つたらそこには宙に浮いたフォレット

「コーン君がいた。コーン君の下には結界と同じ色の円盤に似た魔方陣があり、レイジングハートがあった。

「わかつたの、ヒカルでジュホールシードはどう?」

「すんつ。すんつ。

地響きが鳴り響く。このパターンはとても嫌な予感がする。後ろを振り向きたくない、けど……現実を見ないと。

私はゆっくりと後ろを振り向くとそこには十メートルはありそうな彫像。布を体に巻いただけの男性彫刻が歩いていた。

「いやああああああ、やつぱりいいいいいい！」

「そんなのんきな」と言つてゐる場合ぢゃないよつ、なのは。思わず結界を張つたけどこんなに大きなものが暴れたら学校が壊れるだけじゃない。結界も壊れたらそれこそ最悪だよ。皆が瓦礫の下敷きなんてことになつたら……」

「……そんな」と、絶対にダメ。やるよレイジングハート！

「オーライ、スタンバイレディ」

「コーン君からレイジングハートを受け取り私は準備に取り掛かる。まだ、一回目だけど私しかできないといつのならやるしかない。

「セットアーップ！」

桜色の光が私を包み込む。次の瞬間には着ている制服にとても似ている服。バリアジャケットを身に羽織つてレイジングハートを中心

心に黄金色の金属が現れる。次に白を軸にした杖。それらがすべて空中で接続されて完全なレイジングハートが形成される。

「必ず止めるよー。コーン君、レイジングハート！」

「わかつているよーなのはー。」

〔ミッション、スタート。アクセル！〕

私とコーン君は巨人の顔の位置まで空へ飛び、彼と対峙する。

「アリサちゃんやすずかちやん。そしてツルギ君がいるこの学校は必ず守るのー。」

「」の時、一人と一機は知らなかつた。彼女たちが巨人と対峙している校舎の裏側でもう一組がバリアジャケットを換装していることに。

第六話 巨大な天使と魔法少女+ 。（後書き）

あとがき 採点結果編

なのは「……」

たかB「い、いかがなものでしょ？」

なのは「…レイジングハート」

レイジングハート「セットアップ」

レイジングハートが戦闘形態になりました。なのはを中心に五つの桜色の光球が出現。

たかB「ひい」

ツルギ「やばいっ、避来矢！」

避来矢「了解。バリアジャケット、顯現」

避来矢から黒い光を放出。その黒い光がツルギを包み込む。

なのは「悪競周徒アクセルシユート」

ツルギ「なんて！？」

レイジングハート「アクセルシユート、ファイヤ」

「すゞゞゞゞゞ。ががんつ。たかBに光球が当たり続ける。光球一つにつき五回当たると光球は消滅した。そのうちの一・二・三発がツルギにヒット。

「なのは「…四十点。まあ、次は私が大暴れなの。許してあげるの。」」の調子で増やしていくのー」

「」（あとがき）は本編のなのはとはまったく関係ありません。

ツルギ「…許して、あれ？」

避来矢「…主。下手、発言、作者、同様、変貌、半死体」

ツルギ「お、おう。なのは、次回予告をよろしく頼む」

なのは「あ、ごめんな。ツルギ君。それは次のお話で」

レイジングハート「…ジャパニーズテーモン?」

ツルギ「…え、なのは?」した?「これは次回出す俺のバリアジャケットなんだけど」

なのは「いやああああああ、お化けええええええ!」

なのはがツルギのバリアジャケットを見た瞬間にあとがきの外に走り去つていった。

避来矢「…主。次回予告」

ツルギ「…あ、ああ。次回、魔法少女と鬼武者の会合。テイクオ

フ

避来矢「…主？」

ツルギ「…お化け…。は、き、傷ついてなんかないんだからねつ」

避来矢「主。…キモい」

第七話 魔法少女と鬼武者の会合（前書き）

たかB 「読んでみて！これが俺の全力全開！…」
第一次スパロボＺの続編が待ち遠しい…。
と、いうわけであとがきに細工しました。

第七話 魔法少女と鬼武者の会合

「主…緊急、事態、ジュエルシード、反応…距離、30メートル！」

避来矢からの警告を受けてポケットから取り出し、元の大きさに戻す。と、同時に認識阻害をかけて自分と避来矢の姿を見えなくする。一般人に知られることを避けることと巻き込むのを避けるため。特にアリサとかアリサとかアリサとか…。あいつ、俺がこんなことをしていると聞いたら絶対首を突っ込むだろうな。

ちなみに認識阻害はフェイトとアルフから忠告を受けたものである。

管理局から発見を逃れるため。

それは元々ジュエルシードを初めとする異世界に散らばる各世界すでに滅びた文明の遺産や兵器を管理・封印を行う国際警察のようなものであり、文字通り世界を股にかけ、平穏を守る兵隊である。そして、フェイト達はそこを襲撃し、ジュエルシードを奪おうとしたテロリスト。ジュエルシードはその時、ここ海鳴市を中心に散らばった。…なんか引っかかる?と、その時は思い過ごした。それは今でもわからない。

それでも俺はフェイトに協力することにした。二つの約束をして。そのうちの一つは誰も殺さないこと。これだけは譲れなかつた。一応フェイトもアルフも人は殺してはいけない。そして殺させないためにも非殺傷モードをバルディッシュに設定してもらつた。その代わり、俺はジュエルシードの浄化と譲渡。サカサにも悪いと思つたので一個だけ俺が預かり、残りはバルディッシュにある。今、現在持つているのは、浄化中のジュエルシード二個。これは蟹男の持っていたジュエルシードである。

さて、残りの一個の約束は…恥ずかしいから内緒だ。それを聞いた瞬間にフェイトも顔を赤くしてバルティッシュを振り回していた。その横でアルフがにやにやと笑っていたが無視した。とりあえず、全てがうまくいったら。という条件で守ってくれるようだ。

「…あー、思い出したら顔が熱い

「主、結界、反応。展開。干渉？」

俺は先程曲がった角を曲がると同時に風景が一変した。目に映る風景全体に薄い緑色の光がかっていた。すで結界内にいる。もしくは、結界とその外との間にいるかのようだつた。これは一度、避来矢で蟹の張つた結界侵入時の際に見た風景に似ているからそう判断した。避来矢が俺の指示を待つていて、ことはまた脱がないといかないのか…。

「主、脱衣、必要、無。眼前、結界。前回、結界、劣化版」

「どういづことだ避来矢？脱がなくていいの？どうして？」

「主、我、機能、連続、使用。機能、自体、少々、性能、向上。前回、結界、ジュエルシーード、仕様、侵入時、要全裸。今回、ジュエルシーード、未使用。結界、突入、可能」

お前にある機能を何度も使うとそれは少しずつ強くなる。前回はジュエルシーードによる強化された結界で侵入は困難だつたけど、今回は使用されていない劣化版だからそのままでもいける。というとか。

「肯定」

じゃあ、突入、急ごう。一般人がいたら大変だし。

ヴォン。

機械的な音と同時に結界内へと侵入。風景から緑色が抜ける。代わりに校舎全体を覆うドームのような緑の壁が見えた。

「侵入、成功」

あと避来矢、聞きたいことがあるんだが、突入した後、バリアジヤケットを作つても結界内から追い出されない？もしくは気づかれない？

「…前半、質問、回答、可能。後半、質問、不可。探知、可能性、
大」

「…追い出される？」

「索敵・想定。…可能性、零」

結界から追い出されることはないけど気づかれる。気づかれるけどジャケットは作れるのか…とりあえず、阻害しながら相手にできるだけ近づこう。近づいたらジャケット装備して気づかれる前に不意打ち。…できる避来矢？

「可能、主、ジャケット、形式、想定、要求」

イメージは前々からできているよ、避来矢。

イメージは日本伝統の黒の鎧甲冑。兜の部分は大鹿の角がある。
頑丈にして頑強。竜神の加護受け、雨のように降り注ぐ矢は矢自体
が避けていく。剛の者が振るう刀や金碎棒 鬼の持つ金槌のような
物 も弾き返す。竜神の鎧、避来矢。

「どうだ避来矢。お前の名前の親でもある鎧は」

「…感無量」

あ、あと、兜の部分に鬼の面をつけてくれ。一応、俺たち、反警
察みたいなことをしているみたいだから、悪役っぽく。あと認識阻
害も使えないとなると顔を隠していた方がいいし。

「了解」

すん。

地面を揺るがす地震に俺は思わず転びそうになるのをこらえるが
目の前に現れた物体に目を丸くして、考えを改めた。

「避来矢…。認識阻害、出力全開」

「…了解。認識阻害、最大、効果」

さすがは相棒。よくわかっている。目の前に映った物体は美術館
に飾られていそうな彫像だった。ただ、その像は軽く見ても五メー
トルオーバーの巨大なものだったからだ。

ああ、ジュエルシード一回戦は最初から不意打ちによる全力全開。
スタミナなんて考えず一気に決めないとけないな。悪いけど問答

無用遠慮無しだ。…これは悪役の対応だよな。まあ、仕方ないか。

ユーノ視点。

「止まつてください。どうして学校でこんな真似をするんですか！？」

なのはが巨大な男性の彫刻にレイジングハートの先を向けて静止を促す。なのは、そんなことして相手が答える可能性なんて。と思つていたら彫刻の口がゆっくりと動いた。その際、動いた分だけ彫刻の口の周りにひびが入る。

「夜の眷属、打ち滅ぼす。少女、汝、神の従者か？」

「すみません。私、宗教とかには入っていないんです。夜の眷属つて、なんですか？」

「異教徒。…いや、汝には後に教えを。今は、眷属を滅ぼす」

ぐおん。

彫像の目に赤い光が灯る。そしてその光は校舎に当たりまるで何かを探すかのように照らしていく。

「な、結界に強制干渉…まずい、」のままじや、なのはつ、あの日を攻撃して！」

「えつ、ユーノ君？」

なのはが戸惑っている間に僕の張った結界に干渉が始まる。そして、干渉の起こったその場所に見慣れた一人の少女の姿が見えた。

「…発見。眷属よ、滅びろ…」

彫刻がなのはよりも大きな拳を振り上げる。そして、赤い光に照らされた場所には…。

「すずかちやん…？」

なのはが声を上げると同時に赤い光に照らされたすずかも振り返る。

「…え？ なのはちやん？」

彼女がそう言葉を発したときにはもう、巨大すぎる石の拳は振り下ろされていた。

「だ、だめええええええええ…！」

「デイバインスター」

ドッゴオオオオオオオオオオオオオンッ！

なのはがレイジングハートを用いて桜色の光線を石の拳に向かつて放たれる。が、二つの不幸に見舞われる。一つは放ったのが遅すぎたことによりその光線は拳ではなく肘の部分に直撃したこと。そ

してもう一つは、なのはの持つ魔力が強すぎて肘の部分が完全に破壊されたこと。この一つにより石の拳は彫刻から切り離されるものの勢いそのままに石の拳がすずかを覆い隠した。結果、

ズッガアアアアアアアアアアアアンーー！

すずかのいたところに巨大な石の拳が落ち、高々と砂埃が舞い上がりつた。

「あ、あ、あ、い、いや、いやあああ

なのはの目の前ですすかは巨大な石の拳につぶされ…、つ、！この反応は、いつから？いや、そんなことよりなのが涙をこぼしながらふりふりと地面に落ちていく。

「すずかちゃん、すずかちゃんああん」

「我に刃向い、眷属に涙を流すか。：汝、異教徒なり！」

「なのはー逃げてつ、まだ、あいつが！」

彫刻が残った腕を用いてなのはめがけて拳を振り上げる。くそつ、間に合えつ！

「バインド！」

ガキイツ。

もはや混乱どころか精神が決壊寸前まで追い詰められたなのはには彫刻の動きを把握できていなかつた。まだ、小学生で目の前で友

人を亡くした少女にこの窮地を回避することは不可能だつた。僕は彫刻の腕全体に拘束用の「魔法バインド」を唱える。光の輪が彫刻の拳を絡め捕りその動きを防ごうとするがその重量は見た目通り重い。そして何より彫刻の強度にも問題があつた。

ビキキッ。

その重量とは裏腹にこの彫像はもろい。先程のものは砲撃で気づくべきだつた。これじゃ、バインドが破壊される前に腕 자체が砕けてしまつ。

バゴオッ。

砕けた彫像の拳はまるで先程の悪夢を再現するかのようになのはへと襲いかかる。

「オートプロテクション」

キインッ。

なのはがレイジングハートの作り出した自動防御壁に包まれる。その赤い防御壁はなのはが命じて作り出す障壁よりも強度はない。しかし、何もないよりはましだつた。

ゴッ、バアアアアアアンッ！

レイジングハートの作り出した障壁は石の拳を一瞬だけ止めると、拳と共に砕け散つた。しかし、その衝撃でなのはは地面へと叩き落される。

「あああああああああああああ！」

「なのはー！」

「眷属共々滅せよー！」

彫像は残った足を用いてなのはを押しつぶさうとする。僕はなのはの前に立ち、障壁を張る。レイジングハートももう一度障壁を張るが、今度は彫刻全体の重量が襲いかかる、二つの障壁は悲鳴を上げ、今にも砕けそうになる。

「なのはー、早く逃げー

僕がなのはに声をかけたその時だった。

「少女、撤退、要請。我、援護！投擲、開始！」

ブオーンッ。

立ち込めた砂煙の中から巨大な瓦礫が飛び出し、彫像の顔に当たり、巨人の体勢を崩す。と、同時に一つの人影が砂煙の中から飛び出してきた。全身黒ずくめの騎士甲冑にも似た鎧をまとい、悪魔の仮面をつけており、飛び出した勢いのまま彫像へと殴りかかる。

「目標C、攻撃、開始ー！」

機械的な叫び声と共に悪魔の仮面をつけた人がが五メートル以上はある彫像の脚を殴り飛ばす。彫像の脚は全体的にひび割れを起こし背中からグラウンドへと倒れた。

すずん。

「う、あ、ええ？」

「伝言！御学友、無事。身体、機能、異常、無」

悪魔甲冑は立ちこんだ砂煙の端を指さすとそこには大きなクレーターのすぐそばで頭から血を出してこる状態で氣を失っていた。

「す、すずかちや、け、怪我を」

「問題無。付着、血液。我、返り血」

「うひ、うひと君は一体？」

いきなり現れた彼？となのほのやつとつに僕は慌てて間にに入る。

「沢庵、言語、发声？」

「僕はユーノ、フレットだよ……て、僕らビコかで会ってない？」

「……記憶無」

と、そんなことをしていると。

「……日本の悪魔、否、ナイトゴースト。か？眷属はいろんなものを引き連れているのだな。汝は使い魔か？」

ズズズと彫像が碎かれたはずの腕がいつの間にか修復していた。

そして、それを用いてその巨体を起き上がらせていた。

「否定。我、主ノ剣。我、主ノ鎧」

悪魔甲冑は僕となのはの前に立ち、拳を彫像に向ける。

「我。汝、碎クモノ」

「愚かな。丈高き天使、サンダルフォンの拳に沈むことで救いになればよいのだがな」

「上等！我、竜ノ鎧、避来矢。参ル！」

その威風堂々たる悪魔甲冑に僕は心をゆすぶられた。それは同様に崩れかけたなのはの心すらも動かしていた。

ツルギ視点。

どうやら上手くいったようだ。

鬼の面を持つ、黒の鎧。避来矢。

これを身にまとつてなのはと沢庵？の前に出る。避来矢本体である巨大な剣の形は存在しない。避来矢はその姿をすべて鎧へと変貌させた。同時に避来矢の鎧の情報が頭に流れ込んでくる。

大剣は黒い光となつて俺の全身を覆い、俺のイメージ通りの鎧へと変貌した。そして、目の前にいる巨大な彫像すらも殴り飛ばせる力を手に入れた。が、これにはいくつもの問題がある。

19500 / 20000

鬼の面の裏側に映るこの数字。これはいわば避来矢の鎧形態を維持するエネルギー量。つまり、制限時間のカウントダウン。これが0になると避来矢の鎧は解除される。

避け矢の鎧はSFで言うところのパワードスーツ。しかもかなり燃費が悪いのか何もしなくても十秒ごとに100減少し、ダッシュに100、先程の投擲に100、画像を殴った時に200も使用している。

「おおおー！」

「防禦！」

そして、俺は口をふさがれる。なのはに檄を飛ばしたくても喋ることが出来ないので避来矢に俺の意思を読んでもらい、なのはに伝える役目を担つてもらつてある。

迫りくる彫像の攻撃を受け止める。後ろにはなのはと沢庵がいる。見ず知らずの他人ならいざ知らず、知り合い。しかもアリサの友人となれば話は別だ。俺はあいつが泣く顔を見たくはない。

ガガンツ。

強い衝撃を受けるとともに今度は数字が300減る。しかも彫刻の攻撃は俺を押し通して後ろにいるなのは達をも潰そうとしていた。

「出力、上昇！」

「…自重量、増幅。出力、再上昇」

まざい。今ので七割を切つた。今も数字はすごい勢いで減り続ける。このままじゃ一分も持たない。避け矢、こいつを投げ飛ばす。とりあえずグラウンドにぶん投げる。

（了解！）

「腕力部、出力、上昇！腰部、脚部、他、間接、部位、出力、上升！」

拳を受け止めながら俺は腰を落とす。そして、真下から真上にあげる動作を行うと同時に避け矢の数字の減少も一段と早くなるが構つてはいられない。それのおかげで画像を持ち上げることが出来た。

（主、残存、熱量。五割強！）

わかった、避け矢！グラウンドに投げ飛ばしたら全速全開でこいつを再生できないぐらいにまで粉々にするぞ。

「目標乙、投擲！」

グオオオオンッ。

避け矢は自分の何十倍もある画像をグラウンドに投げ飛ばした。その際とても大きな風切音と共に画像は宙へと舞い上がりグラウンドのある方向へと投げ飛ばされた。それを追つてさらに追撃を加えるためにその後を追うが俺はそこで絶望を肌に感じた。

バサア。

あの巨大な彫像の背中に翼が生え、宙へと浮かぶ。どうやら天使は名ばかりとではないようだ。…まずい。圧倒的に不利だ。超強化に施された避来矢でも不利すぎる。まず、避来矢の鎧には遠距離武器がない。そしてなにより、

避来矢は空を飛べない。

そこからは天使による一方的な攻撃に俺と避来矢は防戦一方となつた、

なのは視点。

私は目の前のすずかちゃんの姿に絶望に近い衝撃を受けた。少し前にお父さんが大けがをしたときにも似た喪失感。その姿を無事だと言われてもすぐには立ち直れなかつた。

私は何もできないの？魔力を扱えるとしても、使い方を間違えた。あの時、砲撃ではなく障壁にしておけばすずかちゃんを危険な目に合わせることもなかつた。あの黒い鎧の人がいなければすずかちゃん、ひいてはユーノ君や自分自身すらも守れない。こんな私は…。

「なのはつ、しつかりして！」

「…ユーノ君」

ユーノ君が目の前にいる。そして、そのすぐそばにすずかちゃんがいた。

「あの人があの巨人と戦っている間に早く逃げるんだ！」

「…え？ ジャア、あの人は」

「僕が残つて援護する。君はすずかと一緒にこの結界から逃げて！」

「そんな危険だよ、ユーノ君！ 私も…」

「なのはー！」

ユーノ君が私に怒鳴った。今まで聞いたことのないほど声に私は身をすぐませた。

「『』めん。勝手に巻き込んで勝手に君をのけ者にして。でも今まはじや駄目なんだ。今の君は力はあっても心がぐらついている。そんな状況であの人を援護しても…」

「ユーノ君」

「レイジングハート。なのは達を任せたよ」

ユーノ君は鎧の人を追つてグラウンド方向に走つていく。
そうだ、今の私は何の役にも立たない。下手したらみんなを巻き込みかねない。

「…マスター」

「レイジングハート。私はどうしたらいいのかな？」

レイジングハートはしばらく黙っていた。ここは引くべきだと言いたいのを我慢しているんだろう。私に気を使って。レイジングハートもあの人もユーノ君もみんな優しいから私に逃げるという。でも、私は、私には力がある。皆を守れる力があるので本当に逃げていいの？

「ははははは、どうした異教徒ども。その悪魔は空を飛べないようだな！竜の鎧と言い放った割には名前負けしておるわ！」

「…回避。戦闘、続行。沢庵、撤退、推奨！」

「ユーノだよ、なんで君も僕を食べ物だと思つの？…ぐ、エナジー・ボルト！」

巨人とユーノ君、そして鎧の人はまだ戦っている。ユーノ君は空を飛べるし、魔法弾を撃てるけど、多少の亀裂を作るのみで決定打を与えきれない。そして、鎧の人は空を飛べない上に飛び道具がない。時折、グラウンドにあるサッカーゴールを投げては巨人にぶつけて、足や腕を破壊してもしばらくすると新しい腕や足が生えてくる。

対して、巨人は自分の腕や足をちぎっては投げつけてくる。背中にある翼がある限り巨人は地面に降りない。あの一人が力尽きたままで。

ユーノ君じゃあの翼は折れない。鎧の人じや攻撃が届かない。それじゃあ、私は？

「…私は」

できる。私ならあの翼を打ち落とすことが出来る。でも、今度は

あの鎧の人やゴーノ君をすずかちゃんみたいに巻き込んだら…。

「…マスター。レッツ、トライ」

「レイジングハート…」

「アイ、ビリーブ、ゴー。ビコーズ、ゴー、アー、マイマスター」

レイジングハート。私を信じてくれるの?

「オフコース」

私は、飛べるのかな?

「ゴー、キャン、フライ」

今度は、今度こそは…。

「イヒス」

「…」「めぐね。すずかちゃん。少しだけ待つていて。私、飛んで
くるよ」

もう、迷わない。今度こそ、弔うんだよ。

「いいづ一、レイジングハート…」

「オーライ、マイマスター！」

ツルギ視点。

52000／20000

もう残り時間一分を、いや、攻撃を合わせるともう二十秒も持たない。しかし、投げる物はもうグラウンドには残っていない。沢庵も攻撃を加えてくれるが、浅いひびを入れるだけで有効だにならない。たまに光の壁で攻撃を防いだりする。が、その壁は一時しのぎだ。巨人が再び腕を引きちぎり投げつけてくるまでの時間稼ぎであり一発目までは耐えきれてな…、さてよ?あの光の壁。縦じやなくて横に展開できないだろ?つか。

〔緊急回避!〕

47000／20000

何度もちぎつては飛んでくる巨人の腕や足を避けるとひつ、数字が底をつく勢いで減っていく。

もう迷っている暇はない! 避来矢、あの沢庵に俺のイメージを伝えてくれ。

(主?…ひ、了解!)

〔ユーノ、障壁、作成!〕

避来矢はユーノに声をかける。そしてユーノがこちらを振り向いたときに巨人、体育館に外付けされている階段、そして自分自身を指さす。

「え…、わかつた！いくよ、障壁を連続展開」

沢庵は数瞬でこちらの意図を読み取ったようだ。俺の一メートル先に緑色の半径50センチの障壁³がいくつも展開される。それは巨人の元に届く階段のように。

やるぞ、避来矢！

（了解！）

「平衡感覚、脚力、上昇！」

これが、俺とお前の全速！

「全開！」

ドオンッ。

地面を砕きながら、避来矢が残った最後のエネルギーを振り絞り今日一番の加速を見せる。踏み出した足に対しても沢庵が作り出した障壁は一秒も持たずとして消滅するがそれだけあれば十分だった、一気に緑の階段を駆け上がる。が、巨人までの距離はあと十メートルの所で巨人へと続く障壁が奥から薄くなり消えていった。

何やってんだ沢庵！と、目を向けると沢庵が石の羽に弾き飛ばされているのが見えた。まさか、羽まで飛ばしていたのか！くそつ、ここからじや飛び蹴りしても届かない。せめてあと少しだけ巨人が高度を下げるないと…。

巨人は笑っていた。俺に注意を向けているように見せかけて沢庵を狙っていた。…くそつ、負けたか。せめて、なのはとすずかだけでも逃げてくれれば…。

ズドオオオオオオオオンッ！！

俺が悲観的な考えをした瞬間、巨人の頭上から桜色の光線が巨人の羽と左足を碎いた。錐もみしながら落ちていく巨人と俺が見たものは震えながらレイジングハートを持つなのはの姿。…まったく、本当に年下の女の子なのかを疑う。度胸がありすぎだ。しかも弾き飛ばされた巨人は攻撃するには絶好のポイントに落ちてくる。こんなおいしい場面を作られたら男として止まるわけにはいかない。否、もう止まれない。止められない。

ダンツ。

ヒーローなら必殺技を叫ぶんだろうが、あいにくそんな名前はない。だから、渾身の一撃を両足に込めて飛ぶ。一撃粉碎の思いを持つて、巨人の顔面に蹴りを放つ。

ごつ。ガガガガガツガガガガツガツガガガアアアアンツ！！

顔面に蹴りが入り、一瞬の抵抗を感じたが、飛び出した勢いそのままに俺は巨人の顔から右足にかけて巨人を一刀、いや一蹴両断した。

その間、巨人の心臓の位置にジュエルシード埋まっているの見つけたがその時にはすでに俺は蹴りの勢いそのままに校舎に突っ込んでいった。

「ジユエルシード、封印！」

なのはがジユエルシードをレイジングハートに収納するのを見届けると俺は着地のことを考えていなかつたため、校舎内の廊下をものすごい勢いで突っ込んできた方向とは逆方向の壁をぶち抜き背の高い木の枝に引っかかるまで、ゴロゴロと転がつて行つた。これはなんとも締まらない戦いの終焉だつた。

なのは視点

「…封印、完了」

私は地面に降りながらジユエルシードを封印すると同時に緊張が解けたのかレイジングハートを落とした。正直、もう立てない。レイジングハートも疲れたのか元の小さな宝石に戻つていた。そして、ユーノ君が張つていた結界も数秒遅れて崩壊し、私たちは通常空間に移行した。

「…ユーノ君！」

結界が崩壊したとこには…。

（大丈夫だよ。なのは。ちょっと緊張の糸が切れただけだから。
そうだ、あの人は？）

茂みから顔を出したユーノ君を見て私は安心した。よかつた。そ
うだ鎧の人。の人にもお礼を言わないと…。

(…駄目だ。まるで認識阻害を使つたかのように魔力反応が消えた。どこにもあの人の魔力の残滓が見当たらない)

そつか。今度会つたらちゃんとお礼を言わないと…。と、考えていたらユーノ君が念話で怒つてきたの。

(なのはーなんで逃げなかつたのー)

(ユーノ君にもそれは言えるの、どうして一緒に逃げなかつたのー！)

私がすぐに切り返してきたことにユーノ君は呆氣を取られながらも答える。

(そ、それは僕には責任があるし、見ず知らずとはいえ助けてくれた人を放つておくわけには…)

「私も同じだよ」

私はユーノ君を茂みから抱き上げながらユーノ君いしか聞こえないくらいの声で答える。

「ユーノ君のいう通りにあの巨人に攻撃していれば、すずかちゃんは結界に入つてこなかつた。砲撃じゃなくてシールドにすればあんな目には合わなかつた。これは私の責任だよね。そして、私だってあの人助けられた。…ね、ユーノ君と同じだよ」

(なのは…)

「私、強くなるからみんなを守れるくらいに、…あ

大変なことに気がついたの。すずかちゃんの「とほつたらかしだつたの。

「あやああああああああ、す、す、すすかーびーひったの、その頭の怪我！保健室、救急車ああああああー！つ、ツルギ近くにいるなら早くもど、て、なんであんたも頭から血をながしてんのおおおおー！」

中庭の方からアリサちゃんの声が聞こえた。私は急いでみんなの所に戻る。そういえばツルギ君死亡フラグのことをちゃんと注意しながら。というか、怪我したんだ。あんな短い時間で…。転んだのかな?

「早くみんなの所に戻ろうか? ユーノ君」

(そうだね、なのは)

ちなみに、すずかちゃんの頭の怪我はあの鎧の人の通り、その人の返り血だつたらしく、水ですぐ洗い落としたの。すずかちゃんが何故か「もつたいない」と呟いた。ツルギ君はあの後、滑って転んで頭を勢いよく木にぶつけたらしいの。証拠に近くの木にはもうすごい量の血痕が…。どんな転び方をしたんだろうね。

第七話 魔法少女と鬼武者の会合（後編）

あとがき

ツルギ「熱血！」

ビック「おおおおお。 ツルギの背中から赤い何かが噴き出る。

なのは「熱血！」

どっしりおおおお。 となのはからも以下略。

たかB「え？」一人ともなんか一瞬赤い炎が見えたんだけど……」

ユーノ「激励！」

なのはの体に縁の炎が一瞬灯る。

避来矢「迅速！」

ツルギの足元から青い渦巻が立ち上る。

レイジングハート「感応×2」

ビコーン。 ツルギなどには何故かロックオンのマークに入る。

たかB「もしもし？」

作者は後ずさりを始めた。

なのは・ツルギ「よくやつた《の》作者、《原作・一次》主人公らしく大暴れできて満足だ《なの》－！」

たかB「そ、そつか。頑張った甲斐があつたのだが何故二人ともこっちに狙いを定める？」

作者は冷や汗を流しながらかなり一人から遠ざかる。

ツルギ「お礼として受け取ってくれ」

なのは「私たちの」

だつ。

作者は迅速・気合を使用してあとがきの外へと向かう。ツルギは作者に間合いを詰める。なのははレイジングハートで狙いを定める。

なのは・ツルギ「全力全開！－！」

たかB「いらんわ、ぼけえええええええ！」

この一人は不満があつたわけではなく嬉しかつたのですが、嬉しそぎて体の疼きを止めることがなく、今回出た天使両断キックとディバインバスターで表したかったそうです。

避来矢「次回、予こ《ぱきいいいい、どつ》おおおおおおん、ぎやあああああああ》く」

ユーノ「すずか、脱がせました。て、はつ?...」

五話の冒頭へ続くお話です。七話のすずかにどうして頭に血がついていたかを説明するお話である。

ユーノ「いや、冷し中華はじめました。みたいな最低のタイトルでしょ、これ!」

第八話 すずか、脱がせました。（前書き）

十八禁ではないぞ

第八話 すずか、脱がせました。

すずか視点。

私は何となくだが、ツルギ君が関係していることを自分の体で感じ取った。

一緒に運ばれた保健室で私たちは手当てを受けていた。正確に言うとツルギ君だけが手当てを受けて私は体操着に着替えるだけなんだけど……。

「すずか、どこも痛くない？ 本当に絵の具なの、傷がないとはいえる本当の本当？ 嘘だつたら酷いからね」

「だ、大丈夫だよ。アリサちゃん。ユーノ君が学校に入ってきてベランダの上にあつた絵の具をひっくり返しただけなんだから……」

「わゆー……」

「……ならいいけど」

田の前でユーノ君。私たちが昨日助けたフェレットが申し訳なさそうにうなだれていた。体にはあちこち絵の具がこびりついていたので私の無傷が確認され次第、アリサちゃんに。

「ほつたらかしにしていたのも悪いけどユーノ、あんたもお仕置きだからね。たっぷり、きつとり洗つてやるから」

「キューーー。」

「あ、あはは、ユーノ君。御愁傷様」

「也々、ナニ一！」

と、連行されていった。なのはちゃんに助けを求めるユーノ君。しかし、なのはちゃんは諦めてね。という顔でアリサちゃんの後を追いかけていった。とてものどかな雰囲気だ。

たけど……和の気持ちは暗れていない 和が血の匂いを聞違えるは
がない。嫌われるかもしれない、怖がられるかもしれない自分の血
筋。
…私は吸血鬼だから。

「うー、あー、血いいい。頭がくづくするつづづづ」

そんなことを考えていたら、白いカーテンの向こうでベッドに寝かされたツルギ君と保険の先生の会話が聞こえた。

「我慢なさい、男の子でしょ。とにかく転校初日でどうやつたら額にそんな傷が出来るの？闇討ちでも食らつたの？」

「わよつとおいしそうな鳩がいたからとつて絞めて今晚のおかずに。木に登つたら手を滑らせて木から落ちたら妙なところに突き出た枝に頭をぶつけ幹をこするように…」

「聞いていい」ひちが痛くなるから！はー、もう。タクシーを呼んであげるからそれまで輸血しちゃなさい。O型だつたかしり？」

「ういすんません」

「まつたく」

保健の先生が輸血パック（常備している学校は稀。といつが、あるの？）で輸血をされるツルギ君を眺めていた。匂いが言っている。あの血はツルギ君の物だと。でも、どうやつたら私にかけられるの？それ以前にどうして私は気絶をしていたんだらう？と、考えているとツルギ君が少し警戒しながら私に話しかけてきた。

「な、なあ。用む、じゃなくて、すずか…でいいか？」

「う、うん。何かな？」

「すずかはその…、何だ。何か見なかつたか？ 気絶する前…」

「？」

「いや…、貧血なひぢゃんとレバーとか内臓系統の肉を食えよ。きついかもしけないが好き嫌いしていると今日みたいになるから氣をつけろよ」

「あ、うん。頑張るよ」

「ツルギ君。君はお肉をひぢゃんとお魚を出したものを食べなさい。都会の鳩はきっと不味いですよ」

「えつ、ダメなのー？」

「駄目です」

…ツルギ君のこと。今度お姉ちゃんに聞いてみよつかな？

すずかの思惑とは裏腹にツルギは罪悪感に駆られていた。何故な

ら今から十分ほど前。ちょうど、すずかがショックで忘れた巨人の石事件。に潰される前の出来事を思い出していた。

ツルギ視点（十日前）

認識阻害で姿を消してから数秒もたたないうちに俺は中庭に顔を出すと、一瞬で混乱した。

高町なのはが空を飛んでいる。それだけじゃない、なんか細長い物が喋っている。そして、巨人が喋った！！

しかもなのはの質問に答えていた。その上、石の体の所為か喋るたんびに頬の周りにひび割れが、口内炎で済むレベルではない。皮膚科の先生、いや、この場合は石工か？なんて考えていたら巨人の目から赤いビームが照射された。俺はそれを避ける。サカサが少し前に作つた赤外線光線銃（のちにバズーカ型の「タツ」と判明した。しかし、火力はサンマが一分で美味しく上手に焼きあがる。俺はサカサに騙されて上手に焼かれた）に似ている光だつた。冗談ではない、またこんがり焼かれてたまるか。

「え？なのはちゃん？」

変なことを考えていたら、赤い光の中からすずかが現れた。と、同時に巨人が腕を振りかぶる。

「主！」

「まじかっ、くそ！避来矢！」

「」でいくつか注意点がある。

まず、ツルギは正直に言うと天然に近いバカである。そのため、

正解・すずかの盾になるぞ、避来矢、俺にジャケットを！

というセリフを、間違えて。

「すずかを俺の盾にするぞ、避来矢、ジャケットを！」《間違い》

と叫んでしまった。

そんな主とは正反対に避来矢は高性能であるため、ツルギに装着させるバリアジャケットをすずかに装着させた。もちろん避来矢を扱えるのはツルギであるためジャケットは数秒で解除された。が、拳の直撃と同時に展開された鎧はその短い間に彼女を守るという大役を果たした。

ズガアアアアン。

避来矢（鎧状態）をまとつたすずかはその衝撃と轟音でその場の記憶と意識を失い、弾き飛ばされた。そして兜にあつた大鹿に似せた角の部分がツルギの額に突き刺さつたところ鎧は解除され、ツルギに抱きかかえられる。

「ふしゃあああ。額から血が噴き出す。その血はすずかにシャワーのように降り注ぐ。」

「わ、わ、やばい避来矢、避来矢今度こそ俺にジャケットを」

すずかを抱きかかえている以上、彼女を自分の血で染め上げてしまつ。足元にあつた避来矢（大剣状態）に改めてお願ひし、黒の鎧

を纏い、石の拳の残骸を巨人にぶつけて失意のなのはを追い越し巨人を殴りつけに行つた。まあ、あとは見ての通りというわけだ。()

七話参照)

そして、巨人との戦いの後、結界の崩壊を確認したとき、木の枝に引っかかった俺は同時に鎧が解除された。鎧が解除された俺は地面にたたき落とされる前に枝に引っかかり幹に顔をぶつけて…、まあ今に至る。

「しつかり寝てなさいよ。ほら、月村さんも帰らないと狼に食べられますよ」

「わんわん」

「あ、私、ツルギ君に聞き…、いえ、帰ります」

…すずか?

まさか、覚えている?だとしたらまずいな。…どうしたらいいか?サカサに相談するか。しかし、サカサともあれから相談できない。何かあったのか。…無事であつてくれ、サカサの相手をしている皆さん、死なないで。つと、そうだ、念話、念話。アルフとフェイトに連絡を入れないと。保健室を出てから男子トイレの個室に入り避来矢を取り出す。

(避来矢、バルディッシュに繋いで)

(ア解、秘匿信号、発信。：バルディッシュ、応答、求ム)

(…ツルギ?なにこれ、魔力もなく、物凄く静かだよまるですがそばで話しているみたい)

(フェイトか? ちょっと相談がある。……管理局がらみだ)

俺の言葉にフェイトが息をのむ声がした。フェイト、俺も驚いるんだよ。

(……つ、傍受の恐れは?)

…………あ。

(……ツルギ)

フェイトの声が一気に零度を切る。すいません。忘れてまし

(フェイト嬢。質問、回答。可能性、極小)

(……どうして?)

避け矢、なんで? 自分でやつといてなんだけど。

(バルティッシュ、我。修理時、同調。我、バルティッシュ、同機、存在。認識、阻害、ジャミング、最高域)

(つまり、バルティッシュを修理したときに避け矢はバルティッシュの周波に合わせて、同機体状態になつた。しかもジャミングが最高レベルだから心配ないと?)

フェイト。よくわかつたな。ちょっと理解に俺は困ったのに。つまり超高性能な糸電話といふことか。

(……でも)

(フェイト嬢、バルディッシュ、連絡前、念話、信号、感知?)

(…………わかった。アルフに確認したけど、一番近くにいるアルフもわからなかつたみたいだし、一応信じる。だけどツルギ、今度から気を付けてね)

(大変申し訳ございました！絶品と評された翠屋のシュークリーム買っていくから許してくださいー！)

俺は今日会つたこと。アリサと同じ学校にいることジュエルシードを取り逃したことからなのはこのことについてすべては伝えるとツルギはしばらくの沈黙から質問をしてきた。

(……ツルギ、いいの？本当に私に協力して？今ならアルフも気がつかない…、その知り合いと敵対することも)

(フェイト。俺は気にしていない。ばれなきや大丈夫だ)

(でも、管理局、異世界と敵対するんだよ。文字通り世界を敵に回すんだよ)

(お母さんのこともあるのにこいつの心配なんてするな。まったくそのいじらしさ・優しさに惚れるぞ？それに俺は見ず知らずの世界よりフェイトを選ぶよ)

間

(…………HUFRY&、C\$R&REE\$O&、F) U、G=、T)
F & (D & (CVXD%GH-L-!-)

(…フェイト?)

バグった?

(な案ああな孔奈々七ああアナ七何でもないよつー.)

(…あと、すずかを襲ってきたやつが気になるから今田は遅くな
る)

(わ、わかつたよ、何かあつたらじつから連絡を入れるかりや
!)

りや?
(とにかく、連絡終わり!)

念話があちらから切られた。まあ、あれだけ元気なら今夜からでもフェイトもジュエルシード探索も可能だろ? と、考えていたら頭上から大量の水が降ってきた。…まさか、水道管が破裂? 下水を頭から…。

ガンガン。

「おいつ、出でこいよ転校生。」

「…ん、誰かと思えば、クラスメート? か?」

トイレの個室から出ると数人の男子生徒がにやにやした顔で俺が出てくるのを待ち構えていた。そのうちの一人は制服の袖と裾が濡

れでいる。近くにはバケツ。そしてホースに繋がれ水が出しつぱなしにされている。…つまり、あれか。

「あー、確認するがこれはいじめ? という奴か?」

とりあえず確認。人数は四人。全員が同じような顔をしていて目的は同じように感じられる。

「わかつてんじゃん。転校したばかりの奴が可愛ぐぼおあつ」

奥から一番田の男子生徒が笑うかのように発言した。いや、しようとしながらツルギはそれをすべて聞く前にその口を黙らせた。

「はいっ、確認終了!」

当たり前。と聞き終えた後に一気に相手の間合いで踏み込み、鳩尾に鉄拳を入れる。

「じゃあ、ほーる。全員」

一応、才能なくとも学習はするんですよ。英語が喋れなくとも外国では何度もサカサと一緒に秘密組織を相手に壊滅させた。いくら百パーセントの援護があるとはいっても十歳に満たない俺を前線に出すなよ。まあ、それは置いといて。

相手の目的は表情を見ればわかる。初対面で相手に舐められると後々面倒だからここで徹底的に潰す。
それにいじめイクナイ。よね、忍さん。

ツルギは確かに才能はない。しかし、それは達人やその手の人たちからの目線であり、一般人やド素人の目から見たらそれはわから

ない。それでいながら戦いの関しての環境・経験値だけはどこに兵隊よりも豊富である。簡単に言つと三流以上二流以下の実力の持ち主である。

一流の達人からしてみればツルギの戦い方はむらがあるし、次に倒す輩の順番。まずは一番弱い奴から潰して数を減らし最後に対象を取るのが常套手段。だが、ツルギは手前でもなければ、一番奥でもない。発言した奴にとびかかり、その後に残った三人を物理・精神的に潰した。

「じゃあ、今度こんな真似したら本格的に潰すからな」

「「「「オス、すいませんでしたっ」「」」」

トイレでよかつた。だつてすぐに血とか流せるんだから俺は手を拭きながらトイレを後にした。

「ツルギ君、あの、一応君に伝えた方がいいかと思うんだが…」

「どうしたんですか渋谷先生？」

トイレでのS.I.O.K.Iを終えた後、校長室に向かう途中で担任に呼び止められた。すると宿直室に案内された。そこには大きな段ボールが二つ。まだあったのか？

「いや、君の保護者から教員にと、先程宅配便で来たやつがあるんだが、どうしよう？」

捨ててください。と、すぐには言えない。つい先ほどジユエルシード事件に関係しているかもしない。なのは持つてかれたが。もしかしたらこの中身はジユエルシードかもしない。仕方ない。

「あの、これを持ち帰つてもいいですか？」

「ああ、構わないが」

とりあえず、家まで持つていいくか。うう、なんであんな町はずれに拠点なんかしくんだよ。まあ、事情が事情だしフェイトたちもいるから好都合なんだが…。これも下着だつたらバルディッシュで千切りにされかねん。あ、焼却炉の前で確認するか。あそこなら人目に付かないし、よし、そうしよう。

「あ、ツルギ君。よかつたまだ学校にいたんだ」

先生から段ボールを受け取り、焼却炉へ向かおうとしたら、すずからしき声に呼び止められた。だつて、段ボール二箱もあるんだぜ。前が見えん。段ボールの上に置いた鞄、正確には避来矢ハラヤに誘導してもらつている身としては声でしか判断がつかん。

「んー、すずか…か？」

「凄い量だね。手伝おうか？」

「どうかどりやつて俺だと判断したんだ？段ボールで上半身隠れているのに」

「えーと、感かな？（血の匂いでなんて言えないし）」

「まあ、女の子にこれを持たせるわけには…重いし（社会的な意味で）」

「それじゃあ、鞄だけでも」

すずかが段ボールの上にある俺の鞄をとろつしたときに避来矢から念話で叫ばれる。

(主！すずか嬢、接触、厳禁。我、主、以外、人物、接触。縮小、機能、強制、解除！)

そういうえば、鎧を纏った時もすぐに解除されたって、解除はやばい。下手したら元の大きさに戻った避来矢に貫かれる。あの時の蟹男みたいに。

「ちょ、すずか、ストップだ！」

しかし、すずかはすでに鞄に手をかけていた。そして運悪く避来矢に触れた。更に腰を少し低くした俺は慌てて引き止めようとした。それは段ボールを上に放り投げる形になる。以下、次のような現象が起こる。

放り投げられた段ボールと共に回転しながら鞄と共に放り投げられる避来矢。元の大きさに戻りながら段ボールを引き裂く。ついでに紙一重ですすかの制服に切れ目を入れる。

元の大きさに戻つていきながら避来矢は廊下に突き刺さる。ちなみに避来矢の刀身ゝすずかの身長。

すずかの顎に避来矢の柄がアッパー・カットのように直撃。すずか氣絶。

散らばる段ボールの中身。中は大量の工口本。その上に崩れ落ち

るすずか。後を追つよに元の大きさに戻った避来矢がすずかの方に倒れこむ。

ツルギ慌てて避来矢に飛びつき避来矢の縮小を行う。すずかを巻き込みながら倒れこむ。その時、すずかの制服も掴む。切れ目の入った制服が破れる。

アリサとは別にすずかを探していたなのはが合流。工口本を下に、服の破けたすずか、それに覆いかぶさるツルギを目撃。

そして、五話の冒頭に至る。

「ツルギのバカアアアアアア、電圧アップウウウウウウ！」

「あがががががががが」

もちろん、避来矢やジュエルシード事件のことを言えるわけもない。電気ショックを浴び続けた俺はそのまま意識を失った。すずかは避来矢のことは覚えていなかった。制服が不良品だったと誤魔化した（避来矢協力）が、しかし、服を破いたことの報復として翌日。忍さん（自分の姉）の好きなところを十個、屋上で、声高らかに、告白するように言われた。とんだ羞恥プレイだ！

第八話 すずか、脱がせました。（後書き）

あとがき

すずか「ツルギ君…」

ツルギ「はいっ、今回は誠にすみませんでした！」

避来矢「謝罪。すずか嬢、最大級、謝罪」

ツルギは土下座を行う。

避来矢は主のそばで刀身をバターのように曲げて謝る。（本編ではそんなこと器用な真似できません）
たかB。その横で黒焦げで転がっている。

たかB「……」

フェイト「返事がない。まるで屍…の真似をしていろよつ

たかB「（ビクッ）」

フェイト「前回、なのはが中心出てきたら。今度は私が雑に扱わ
れるし」

フェイト、バルディッシュは最大レベルで雷を纏わせせる。

すずか「…フェイトちゃん。かわりに脱がされる？」

フェイト「それはちょっと…」

ツルギ「次回予告ー！」

避来矢「降臨。八咫鳥！」

ついさつき、たかBが攻撃されたのを見て逃げるのに必死な主人公。とその剣。

すずか「あ、ツルギ君。まだ、終わってないよ」

フHイト「そうだよ、さあ。O・H A・N A・S Iしそうか」

ツルギ「あ-----」

たかBより延伸。今までのお話で訂正箇所の発見が多くて、今回の更新遅れてしませんでした。これからは一月に一・二話のペースで書きますのできれば、拙い作者ではありますがあ付き合い下さい。

第九話 降臨、八咫鳥（前書き）

はつきり言おう。これは無修正だ。
できたてほやほやだ。

見直してません。

誤字脱字ありまくりかも？

それでも読んで、おねがいします。

第九話 降臨、八咫鳥

(「ちり、フェイト。異常無し。アルフに交代してジュエルシード搜索に戻るよ）

「ちりの世界で言いつと口にちが変わった深夜。私、フェイトはある女の子を遠くから監視している。管理局と関係している思われる高町なのはではなく、紺色のおやげの女の子。月村すずかという少女だ。

（「ちり、ツルギ。ありがとなフェイト。悪いな、こつちは寝ているのに）

（別に、かまわない。でも、あの子が本当に関係しているの？）

朝から夕方にかけてツルギが、夕方から深夜零時までが私。そしてそこから明け方にはアルフにあの子の監視を担当してもらつており、各自交代までは自由時間兼休養兼ジュエルシード探索にあてている。

ツルギから連絡を受け、彼女を見張る。ツルギが学校に帰つてきてから、彼女を監視していたが何の変化も見られない。むしろ、こちらの監視に感づいているやもしれない。時折彼女がこちらに振り返るのだ。まだ、ばれてはいないと思うけれど…。

（まあ、その今日のジュエルシードの事件。あれはすずかを狙っていた。確実に安全が確認できるまではすずかを監視したほうがいい。それに今までのジュエルシードと違つて、今回はその原動力となつた生き物がないんだ。だとしたら）

(…誰かが意図的にジュエルシードを使い、あの子を狙った)

(それに忍さんを泣かせたくないしね)

(…ツルギ。忍って誰?)

初めて聞く名前だけど?

(すずかの姉ちゃんでとても美人で…(略)…な人だ)

…イラッ。

(……………ふーん)

私の苛立ちにツルギは感じじる」とはなく(念話だから仕方がない)、ツルギの声に明るさが一段と足されたが、すぐに声のトーンが落ちる。

(それで、……凄い美形の恋人がいるんだ)

(…そつか)

ツルギはそれから愚痴を漏らしながら念話を切った。今の様子だとツルギは完全に忍という人を諦めているようだ。うんうん、そうだよね。ツルギは…。

「楽しそうだね、フェイト」

「アルフ?」

私と交代するためにやつてきたアルフは何故か悲しさと嬉しさを混ぜたかのような複雑な顔をしていた。深夜、街灯に照らされた緋色の髪を揺らしながら。

「ねえ、フェイト。このまま逃げてもいいじゃないかい？私は……何でもない。監視、交代するよ」

「…………」

アルフ。……めんね。心配かけて、そuds私はお母さんのためにもジユエルシードを……。

「フェイト！ツルギ！あの子が動いた！」

心の中で謝りかけたその時、事態は一変した。

月村すずか。彼女が魔力も使わずに二メートルはある屋敷の窓から飛び降り郊外へと向かった。雲に隠れた満月を背中に異様な雰囲気を纏わせて夜空を駆け抜けていた。

すずか視点。

のどが渴く。嫌なのに、私は外へと赴く。私はまだパートナーがない吸血鬼だから。

目の前にはお酒の入った女性。水商売、キャバクラというお酒を男の人と飲むお仕事だと私は判断している。彼女はこれから自宅に

でも帰るのか赤い顔をして暗い夜道を歩いている。紅潮した肌、透ける血管、香水の中から少しだけ香る汗のにおい。そこまで判断すると限界だった。

「ふーん、ふふー…あ」

鼻歌を歌つていた女性の首筋に一撃を加えて昏倒させる。そしてその首筋に私の牙をつきたてようとしたその時、固く重い物が私の頭を襲つた。

がご。

女性から弾き飛ばされてからよつやく私の頭を襲つた物を確認した。それはそれは人一人を張り付けにできそうな十字架だった。

「はつはつはつ、やはり、本性を現しましたね。夜の眷属。昼間は邪魔が入りましたが今度はそうはいきません」

「…う」

頭に強い衝撃を受けて意識も朦朧として体も動かない。頭からはかなりの出血を伴つていた。自分の血でほとんど視界が奪われた中、振りかざされた銀色に光る槍。そして、その槍を包み込む金の光輪だつた

「仲間が来ないうちに死んでもらいますがね。祝福されたハルベルト。バチカンで清められたこの槍であなたを滅してあ

「サンダーレイジ！」

ズドオオオオオオオン！

聞いたことのない女の子の声が鳴り響くと同時に金の閃光と共に私は意識を失つた。

フェイト視点

「サンダーレイジ！」

バインド効果のある魔法で槍を持ったフードの人間を攻撃した。金の光輪が槍をとらえ締まるとき同時に光輪を中心に雷が十字に走る。

ズドオオオオオオオン！

「…フェイト、やりすぎじゃ」

アルフが辺りに結界を張りながら私に声をかける。

「う、でも、急だつたし、女の子にあんなことする人だよ」

一応非殺傷だよ。大丈夫、よくて無傷、悪くても半身不随だから。

「…やれやれ、ヴァンパイア、桃色の砲撃者、デーモンナイト。と続いて、狼女と死神まで来られましたか。この国は随分と種族が豊富ですね」

立ち込める土煙の中で槍が怪しげな光を放ちながら進み寄つてく
る。

「嘘だろ、直撃のはずだよ！」

驚くアルフに私は再度、魔力をバルティッシュュに込める。

「ええ、当たりました。しかしね、私の持つこのハルベルトは特
別仕様なので…」

「ジュエルシードドライブ。アキレウス・アーマー」

槍からデバイスにも似た声が鳴り響き、青白い光にフードの人々
包まれる。これはジュエルシードを意図的に使つている！？

「ええい、バルティッシュ、パワー最大！サンダーレイジ！！」

先ほど打ち込んだ魔法よりもかなり威力を上乗せしているサンダ
ーレイジを放つ。

ガガガガガッガガガッガアアアアン！！

辺り一体を飲み込むほどの雷の奔流が近くにあつた街灯や車、自
動販売機などを丸焼きにしていく。

「…結界内でよかつた。すずか、とかいう子も巻き込んでじゃうから」

「…いんや、フヒイト。マダみたいだ、よー！」

ガキイツ！

「その通りですよ。狼女さん」

立ち込める黒煙を突き破つて、青白いプレートアーマーが私に向かって槍をつきだしてきた。が、それを割つて入ったアルフが魔力で強化した両手で受け止める。

「そんな、ジュエルシードの鎧！？」

「ジュエルシード。と呼ばれておられるのですね。私は賢者の石と呼んでいるのですが」

「どうでもいいから、こんな鎧。ぶつ壊してジュエルシードをいただくよ…」

「残念ですが、鎧だけではありません！」

「パワーアックス、モード」

アルフが受け止めた槍に急激な変化が見られる。槍の片刃が膨張し半月状態になると、残りの片刃は巨大なトンカチの形へと変貌した。その巨さは約一メートル。アルフは掴み取るように押されていたためそのよう手を弾かれてしまい無防備となる。

「アルフ！」

「ザンバーモード」

ガキイイイイツ。

「速いっ、だが！」

私はすぐさまバルデイッシュを鎌の形から雷の大剣へと変化させ、巨大な斧を下から上に払いのけた。が、その代償は大きかった。相手は払いのけられた反動を生かして体を一回転。ハンマーの部分で私とアルフをまとめて殴り飛ばした。

「ゴッ。

思い一撃を受け、私とアルフはコンクリートの壙を突き破つて民家の中まで突っ込む。

「があ」

「くつ」

咳き込みながら体勢を立て直すと向こうからの追撃が待っていた。

「く、バルデイッシュ」

「ティフェンサー」

ガギイ。

魔力で作り上げた障壁を展開。それから数瞬後に私たちを殴り飛ばした鉄槌が振り下される。

「潰れろ潰れろ潰れろ潰れろ」

ビキキイ。

鎧の隙間から見せる瞳に影が灯る。その瞳に狂気が混じり始めていた。

「ルウ、ワヒイト!」

アルフも隣に立ち、障壁を張るが一つの障壁は今にも粉々になりかけている。

ガシャアアアアアン。

障壁が打ち碎かれると同時に私とアルフは後ろに飛び去ろうとするが鉄槌がアルフの右腕を掠めた。しかし、その衝撃は一度アルフを地面にバウンドさせ。私にぶつかり、民家の窓を突き破り大通りの十字路にまで突き飛ばす威力を持つたものだつた。

「瀧井が死んでおるのを知らぬか。二十九日未明、おれの手で殺されたやうだ。

その私たちに振りかぶりながら飛び上がる襲いかかる鉄槌を、私はもう一度障壁を張ろうとするが。

「バルディッシュ…」

弾き飛ばされた勢いで私はバルディッシュを手放していた。そして、

「がはっ

押さえつけるかのように胸元に甲冑の脚が襲いかかる。私の後ろにはアルフがいたからコンクリートの痛みはない。でも、目の前には巨大なハンマーの陰。

そして、影を確認すると同時に聞こえたツルギの声。避来矢で結界に突入した? それともアルフが気を失ったからここにいるの? どちらでもいいか。

「フェイト!」

スローモーションのようにツルギがこちらに向かって来る。手には避来矢と甲冑の人人がすずかを殴り飛ばした巨大な十字架。

そして、今、十字架の方を投げていた。

でも、それはあまりにも遅すぎる。小石やボールなら私へ振り下されるハンマーに届いたかもしれないが、十字架はあまりに重すぎる上に遅すぎる。

「死・ね」

お母さん、ごめんなさい。お手伝い、何もできなくて。アルフ、ごめんね。ずっと泣かせて、ずっと付き合わせて、わがまま言つて。

ツルギ、ごめん。約束破つて。私、少しもツルギに…。

「ガアアアアア。

私は潰される。と、覚悟した時、横殴りの白い物体が見えた。それは決して間に合わないと思われた白い十字架だった。考えられないほど物凄い勢いで十字架は甲冑に当たり砕け散る。その勢いは巨大なハンマーと甲冑の人を弾き飛ばすほどだった。

「避来矢！鎧に換装！」

「ア解、主！」

黒い光が避来矢とツルギを包み込むと、悪魔の面をつけた先程とは違うプレートアーマーが現れた。青白い甲冑は角張ったフォルムに対し、ツルギの鎧は丸みを帯びていた。

「全速」

ツルギは体制をやや倒し、前傾姿勢となる。

「全開！」

一步。駆け出すとツルギの足元にあつたコンクリートは砕け散つていた。

「天使！」

避来矢の声にツルギの声が混じっているのではないかと錯覚させるほど力強く響く。

「両断！」

私とバルティッシュに勝るとも劣らない加速度を見せた黒い鎧は大地を砕きながら飛ぶ。

「蹴リイイイイイイイイイイ！」

そして、私の前で青が黒に弾き飛ばされた。

ガツガアアアアン！

金属音が鳴り響きながら青の甲冑の人人が遠くまで弾き飛ばされると、ツルギが念話を送ってきた。

（ごめん、フェイト、アルフ。遅れた！）

「アルフ嬢、右腕、負傷、危険度、中。フェイト嬢、胸部、圧迫、骨格、亀裂、発生、可能性、危険度、小、ナイシ、中。主、同等、撤退、推薦】

「つ、かほ、な、何をしたの？」

私は咳き込みながらツルギに何をしたのかを聞いた。どうすればあんな重い物を高速で投げ飛ばせるのかを知りたかった。

（天使両断キックだ）

「そっちじゃなくて！か、かふ」

そっちの攻撃方法じゃなくて、投法手段だよ。

〔フュイト嬢、ツツ「ミ」、厳禁。呼吸器、系統、炎症、有。念話、推薦〕

（どうやつてあんな重い物を投げたの？って、聞いてんの！しか
も、ずっと念話だし）

（えつとな、夕方辺りによつやくジユエルシード一個、浄化でき
てな。その遠距離の奴にも攻撃できる機能はないか。それがこれ。
避来矢、鎧解除。同時に八咫鳥形態）

〔了解。形式、八咫鳥。警告、対抗者、飛道具、所持、可能性、
大。早急、決着、推薦。風向き、良好〕

避来矢どうじうこと？相手に飛道具使いがいたらまずいの？風向
き？

次の瞬間、黒の鎧はなくなり、避来矢本体が現れ、ツルギはその
場に仁王立ちになる。そして、先程は暗がりでよく見えなかつたが、
ツルギの一メートル先にはツルギと同じくらいの大きさの透明なシ
ヤボン玉が浮いていた。その奥に遠くに飛ばされたはずの青白い甲
冑の人形が立ち上がるうとしていた。

（ツ、ツルギ！）

（大丈夫。だと、思つよ。フュイト）

ツルギはシャボン玉を前にして、前屈をするかのように体を折り、
一掴みの瓦礫を拾つ。そして、それをおもむろに軽くシャボン玉に
投げつけた。

「また、きさま、つ」

ヒヤゴツ、ガンツ。

瓦礫がシャボン玉に触れた瞬間にはもう瓦礫は青白い甲冑の人の右腕に当たり、ハンマーを落としながら崩れ落ちる。

「…え？」

私は胸が苦しいのを忘れて言葉を発した。

「つまりな、この元々「加速球」…」ほん。 加速球は見ての通り、無差別に触れたものを見る位置まで超高速で飛ばす代物らしい。代わりに俺は足を動かせないんだがな」

ああ、だから前屈したのかつて、動けない！？

(ツルギ、それじゃあ)

「それだけじゃない。反対側から来た物も超高速にするから、相手が石ころでも投げてきたらこっちの頭が消し飛ぶ

(思いつきり諸刃の剣だ。じゃあ、避来矢が警告していたのはそのこと！？)

「そうだけど、こちら側が休みなくどんなに軽い物でもいいから攻撃を加えれば」

ズガガガガガガガガガガ。

「グアアアアアアアアアアアアアア！」

ツルギは小石や砂利を掻き取り、シャボン玉に投げつける。すると散弾を受けたかのように青白い甲冑に被弾し、ひびが生まれていく。ついでにあの重そうなハンマーもその勢いに巻き込まれ排水路へと落ちて行つた。

(でも、相手がダメージ無視して攻撃してきたら)

「…される前に攻撃すればいいんだろ？ツルギ？」

「その通り、アルフ、大正解」

いつの間にか立ち上がつていたアルフが瓦礫を片手に答えた。

「これが、あたしの分」

ボガーン。

アルフが人の頭ぐらいはありそうな瓦礫を剛速球で投げつける。ちなみに普通の人間にはまず見えない速度で。それは避来矢で加速され、まるで榴弾のように青白い甲冑の膝で炸裂し、再び立ち上がりとした甲冑は三度崩れ落ちる。

「これが、ツルギが遅れた分」

アルフが近くにあつた電柱を殴り倒し、電柱に設置された装置を投げつける。と、上体をおこした甲冑は高速スライダーのように上空へとまい上がり避歩道橋にはりつけにされる。

ズドオオオオオンッ！

「ガハアツ」

甲冑の人は歩道橋にぶつかつた衝撃で咳き込む。が、アルフの攻撃、いや、怒りは収まつていない。

「そして、これがああ」

ツルギは一度、加速球を消すと張り付けられた甲冑に対峙するようく姿勢を直し、加速球を作り出す。そして、アルフが倒した電柱を自体の真ん中に抜き手で突き刺し下手投げと言われる投法で電柱を投げつけた。

加速した電柱は甲冑にあたると、その先端を徐々に砕きながらも天高く舞い上がっていく。そして、甲冑の中心。命中した箇所を初め、蟻の巣のように亀裂が様々な箇所へといきわたる。電柱が完全に碎け散ると甲冑は見るも無残な亀裂だらけになっていた。その上、五百メートルはあろう上空に放り投げられた者に重力に逆らうすべは持つていなかつた。

？？？視点。

「……わ、私は司祭なつたんだぞ！賢者の石、賢者の石！私に異を討伐する力をくれたんじやないのか賢者の石いいいいい！！！」

男は少し前までは彫刻家として一世を風靡していた。が、この町に来てジュエルシードを拾つたことで大きく男の生活は一変する。

この町に来て、青い石を三つ拾い、その力におぼれた。そして、曲がった正義感で協会に寄付すべき巨大天使の像。天使像サンダルフォンで独自の情報で知った吸血鬼の存在。月村すずかの暗殺を狙うもなのは・ユーノ・ツルギによつて、撃退。自ら赴いた結果、こなつた。

ジュエルシードに関わる前には司祭の手伝いを行い町の奉仕活動にも参加していた彼はその力で司祭を襲い、病院送りにした後で自分がその位置にふさわしいと思いつだし今回の暗殺を企てた。

「わ、私は神に選ば」

ガツシャアアアアアアアアンッ！

男の言葉は続かない。地面に勢いよく叩き付けられ、砕かれた鎧はステンドグラスのように煌びやかな光を発しながらジュエルシードの形へと変化していった。

ツルギ視点。

「ジュエルシード。封印。番号、三。主、既存、ジュエルシード、一個、浄化、終了。機能、選択」

避来矢がジュエルシード封印を行うとタイミングよく、浄化の一つが終わつたらしい。まあ、この状況なら…。腕を折つたかのように見えるアルフに、息苦しそうなフェイト。そして、結界の外に置いてきたすずか。考えられることは次第に絞られる。

「回復魔法みたいのはあるか？あるならそれで。すぐ使うから」

「了解、主。形式、八咫の鏡。機能、解放。使用、方法、伝達」

避来矢から声が響くと、避来矢本体が消えると同時に、八咫鳥の時と似たような丸い一抱えの鏡、厚さ十センチ程度。表は傷一つない鏡。裏には一匹の蛇がお互いのしつばに食いついている絵が彫られている。

それを両手で抱えながらフェイトとアルフのそばによる。

「フェイト、アルフ。一人とも治すから、じつとしててくれよ」

「ツルギ?」

使用条件がちょっと変だから無駄打ちできない。なんで、使うと腹が異様に減るの?

後に知るが、俺の体にある栄養素やら体力、気力を使って相手を治すんだと。つまり、相手の足りないとこりは俺の根性で補う。といふことね。

ひよひよ。

そんな効果音が聞こえてきそうな妙にゅつたりとした白い光が鏡から放たれ二人を包み込むと同時に。

ぐうひひひひひひひ。

「…」

「…」

頼む。一人とも。どうせなら笑ってくれ。堪えないで。さつきまで命がけの戦闘はしていいきなり腹が泣けば笑いたくなるだろう。

きゅるるるるうううひひひ。

「…ふ、あは、あはははははははははははは

「だ、だめ、だめだよ、アル、フ。ふふうう」

「笑えよー、指さして笑えばいいじゃないかああああああ

きゅーん。

「はーつはつはつはつはつは、ひー、く、くるしいいいい

「だ、だめー、あ、あははははは

「ちくしょーつ。本当に笑うのかよつ。もついい、すずかの所行つてくる」

その時にはすでに二人は全快していた。そして、

「あははははは

その時初めて、俺はフェイトの笑顔を見たかもしれない。

すずか視点。

「……し、……がは」……て……」

「……た、……ルギ……る」

何人かが私の前で話している。誰？お姉ちゃん？
目の前にいる人影は意識がはつきりとしないからわからない。そして、意識がはつきりするころには人影は三つから一つになっていた。

「……お、気が付いたかすずか。いかんぞ。女の子がこんな時間にこんなところを歩いていたら。変質者に襲われるぞ」

そうだつ、私は頭に、頭に？怪我が……ない？

ぐきゅううううう。

「……う、四人分はきつこか」

ツルギ君はお腹を押さえながらふりつく。

「……ツルギ君？」

「ほれ、立てるか？」

ツルギ君が差し出す右手。そしてそこには当然、腕があり、血管がある。私は血を吸いに夜の、夜の街に……

「う、あ、かはあ」

「すずか？！ぐそ、すぐに家に運んでやるから、がんばれ！」

私が気を失うまでに行つていたことを思い出すとすぐに体は血を求めた。そして、私に肩を貸して運ぼうとするツルギ君の首筋。そこには赤い血が巡る管が透けて見えて。

「たしか、近くに前に行つた動物病院があつたか、そこの人間にたす、け？」

ぞふ。

「す、ずか？」

私は食らいついていた。獣のように標的の首筋に牙を立てて、そこに流れる血を求めて。

ツルギ君が畠然としている顔に罪悪感を少しも感じずに。

「ぐそ。ぐそ。

ただただ自分の喉を血で潤した。

第九話 降臨、八咫鳥（後書き）

あとがき 戰闘解説編。

たかB「ああ、今回出てきましたジュエルシードでできた鎧。何故、フェイトの魔法が効かずにツルギの攻撃や、投石が来たかという。単に魔法防御が高く物理防御が弱かつたから。以上。質問がある人は」

フュイト「はい、質問です」

たかB「却下します！」

アルフ「おいこら」

たかB「はい、わかりました。下に表を書くんでそれ参考に」

ディバインバスター

物理攻撃力（以下AT）2000

魔法攻撃力（以下MAT）7000

天使両断キック

AT7500

MAT0

サンダーブレード

AT300

MAT3000

サンダーレイジ

A T 1 0 0 0

M A T 5 0 0 0

八咫鳥（投げる物の固さ・重さによって変化。今回は電柱）

A T 1 0 0 0 0

M A T 0

たかB「で、今回のジュエルシードの鎧。ノアーマーとでも呼ぼうか。それは」

物理防御力（以下DF）3000

魔法防御力（以下MDF）6500

避来矢（鎧形態）

D F 5 0 0 0 0 ~ 1 5 0 0 0

M D F 1 0 0 0 0 ~ 2 0 0 0 0

なのは・フェイトのバリアジャケット

D F 4 5 0 0

M D F 6 0 0 0

ツルギ「避来矢防御力高つ！？」

たかB「まあ、時間制限あるし、飛べないし、攻撃当たればその分使用時間も減るし、魔法攻撃力がないからなあ」

フェイト「あれ、八咫鳥も消費エネルギーに含むの？」

たかB「含みません。ぶっちゃけ鎧形態以外の機能でエネルギー

が消費されることはありません。あと、数時間おけばエネルギーは完全回復。ただし、八咫の鏡はツルギのスタミナが尽きたら使えません」

アルフ「チートだねえ。でも、ハイリスクハイリターン。相手が銃を持っていたりしたらアウト。しかも鎧を纏っていない分無防備かつ回避は不可能に近いし……」

ツルギ「用途が広くて、使い勝手が難しいな」

たかB「なんか久しぶりにこの『一ノナ』をやつたよつな……。あとがきらしいあとがきだな」

フヒイト「はいっ、それでは次回予告

アルフ「歓迎会、キックオフ」

ツルギ「ああ、やつと平和なお話なのかな」

たかB「それはどうだろ?」

第十話 歓迎会キックオフ（前書き）

回つまわって、今回アリサのターン。
すずかに吸血されたからといって、
まだ、すずかのターンではない。
すいません、シンデレラは書きやすいんで…。
すずかは一話ぐらい後には書きますが、ご容赦を。

第十話 歓迎会キックオフ

モサモサ。

「ツルギ、ほら、それぐらいのショート決めなさいよ」

「ツルギ君、ファイト！」

「でも、人に向かってショートは駄目だからねー」

「きゅー」

モサモサ。

すずかに血を吸われた翌日。何故か、俺は海鳴市とのあるグラウンドでアリサ・すずか・なのは・ユーノ、…名前は覚えたぞ。の声援を受けて、サッカーをやっていた。…アフロな頭で。

モサモサ。

「ぐ、何だあのアフロ、技術はないのにすげー速いぞ」

「昨日、転校してきたらしいぞ。しかも女連れだ」

「くそ、見せつけやがって」

「絶対潰す。ボールを持っていなくてもスライディングで、顔を」

モサモサ。

それはただのハイキックじゃないかモサ？…いかん語尾までアフロ化してきた。アフロの原因は我が家の中の雷様である。

昨晩、すずかに血を吸われる。八咫の鏡を使った後の疲労及び吸血による軽い貧血で気を失う。すずかのことはフェイトやアルフには話していない。

吸血前にフェイトとアルフが落ちた青甲冑のハンマーを探しに行く。結局、ハンマーは見つからなかつた。

すずか、フェイト達が戻つてくる前に俺を近くの公衆電話ボックスの中に入れてその場を立ち去る。その時の俺は記憶を失つていたが、避来矢から事情を知る。

フェイト・アルフが気絶している俺を発見。急いで俺を担いで家に運ぶ。俺、二人の看病の元、早朝に目が覚める。

朝。俺、学校に行こうとするがフェイトに止められる。抗議する。フェイトもそれに対して抗議する。お互いヒートアップ。何とか言いくるめた。やさぐれるフェイト。

サンダーレイジ。

頭、アフロ化。

昼休み。すずかが昨日のことに関する質問をしてくるが、避来矢の認識阻害で何とかごまかす。すずかをジユエルシード関係に巻き込みたくないこととお互いに秘密にしているほうが、知らない方がいいこともあると思ったから。ちなみに、忍さんのいいところ宣言プレイは実行された。

放課後、アリサにサッカー観戦へと拉致られる。一応確認のためあと数日はすずかのそばにいた方がいいと考えてはいたが出場は考えていなかつた。

サッカー前半終了間際、なのはたちの応援する翠FCの選手の一人が負傷により退場。交代の選手がないのでこのまま中止かと思われた時、アリサに首を掴まれ、監督である土郎さん（なのはの父ちゃん）の元に持つていかかる。俺、出場。

そして、翠FCは勝利を収めた。俺はずっとボールをキープして逃げ回るという指示を受けたのでそれを実行。攻めず守らずの体制を維持しながら時々、ロングショート打っていた。一本も入らなかつたけどね。

「まったく、出場するなんて考えてなかつたモサ

「ふふ、ツルギ君。その喋り方やめて」

「あゅ あゅー」

そして、なのはの実家である翠屋で祝勝会兼俺の歓迎会。いつの間に翠FCに入つてんだ俺？

一応、時間が空いたら出るとだけ、伝えました。

なのはが座つている小さなテーブルセツトとその上にいるゴーノを挟んで愚痴を垂れている俺。ちなみに臨時参戦ということもあってかお店の外にある席でのんびりとケーキと紅茶をいただいていた。

「いや、しかしツルギ君。君は武術でもしているのかね？明らかに相手の動きに対しての反応をしている」

「士郎さん。ツルギはしていた。ですよ。けど、才能がないからサカサと一緒に海外を旅していたんですよ」

紅茶のお代わりを持つてやつてきた士郎さん。士郎さんの質問を俺の代わりに答えるアリサ。

いや、別に才能がないと言われるのに慣れたけどね。本当にんだからね。

それにしても本当になのはの親父なのか？兄貴の間違いじゃ…？
否、なのはの兄貴はあの忍さん…忍さんの…。

「…ツルギ君。どうしたのかね？私となの顔を見比べて、涙を流し始めて」

「…気にしないでください」

「つべ、この一人を見比べて兄貴の顔を想像したらすげーイケメンだった。ちくしょー。

まだ引きずつてんな、俺。

涙を流している俺の頭にすずかが手を置いて撫でてくる。

「はいはい、泣かない泣かない」

「…すずか。その優しさが今はつらい」

姉妹だからとても似ているんだよ。

涙が、涙が止まらねええええええつ。

「…馬鹿ね」

そんな俺を見て、アリサはため息交じりにケーキをついぱんてい
た。

アリサ視点。

「本当に馬鹿なんだから！」

あれから、なのはの母、桃子さん。姉、美由希さん。を見て、一

喜一憂するツルギは周りから見れば愉快に見えたかもしれないが私から見れば神経を逆なでさせるものでしかなかつた。…あいつはやっぱり年上が好きなんだろ？初めて会つた時、転校してくる時は同じ年かと思つていたのに一歳年上で、しかも年上好きとなると…。

「ベッヒビヒでもいけどね？」

午後八時。私は塾のある予備校の外で執事の鮫島が車を持つている。もうすぐ来るはずなのだが、どうやら渋滞にはまつて動けないでいるらしい。まったく最近面白くな…。

「おりょ、アリサ？」

「ツ、ツルギ？—なんであんたがここにいるのよ」

「それはちよつと、今までストーキングをおつ」

グワシッ。

私は驚きながらも突然声をかけてきたツルギの顔にアイアンクローラーを行う。

私のこの手が真っ赤に燃える。この手で潰せと輝き叫ぶ。ひいい殺、

「誰の？」

「盛大に間違えた！えーと、その。そう、黒いストッキングを見て、それが怒つていて、はあはあ言つて、逃げて、自己弁護していただけだよ

「ちよつと頭を冷やそつか」

アリサ・バー・シングフィンガー！

めきよ。

「ぐ、ぐ、あああああ！」

ツルギにフィンガーを行つて、三分後。ツルギ、事情説明中。

「つまり、あんたはランニングをしていたら道に迷つた。それで黒いストッキングをつけた女人の人に声をかけたのはいいけどランニングで疲れていて息をらせながら道を尋ねたら変態だと見破られて自己弁護しながらここまで逃げてきたわけね」

「そりでござります。お奉行様。一つ訂正させてください。俺は変態じゃない」

「肯定しない」

「できるか、ここで認めたら…」

土下座をしながら顔を上げて口答えをしてくるツルギに対しても私は携帯を取り出しながら言ひ。

「えーと、動画投稿コーナー。自分の母親と同世代の人を見て「きれいなお姉さんっ」と言いながら大げさにはしゃいでいた可哀相な男の子。投こ」

「変態でいいです」

再び、額を地面につけるツルギ。そして、私は追い打ちをかけるツルギのついている嘘に。ツルギが「ランニング」とまで息を切らすことなどないことに。

「で、正直に言いなさい。ランニング以外は本当でしょうナギ、あんたはこんな時間まで何をやっていたの？」

「えーと、黙秘させてください」

「ねえ、ツルギ、立ちなさい。…………正直に言つて、骨にひびが入るのと、正直に言つて、内臓にダメージがあるの。嘘を貫き通して」

「今の空白、何？！俺、これからどうなるの？」

「なんで私があんたを立たせたかわかる？」

嘘貫くつもりなんだ もー、ツルギのくせに生意氣だ。私は左腕を直角に曲げて腰を落とす。

どんなものでも打ち貫く。リボルティング…。

「もういいだろつ、放つておこしてくれよ、マネージャー…」

「だ、駄目だよ。先生だつて治療とリハビリをすれば大会には間に合つて…」

塾の隣にある整骨院から男の子、後を追つよつて女の子が出てき

た。その後ろからその保護者らしき母親が一人出てきた。あの男の子は確かに怪我をしてツルギと交代した子よね。

「良いんだよ。ビウセ、ビウセ才能のかけらもない俺なんて」

「う」

「いても意味がないんだ！」

ツルギ、あんたに言つたわけじゃないのよ。だから、涙目はやめなさい。て、え、なに？なんで私の肩を掴んでるの？ちょ、そんな真剣な顔しないで…。顔が…。

「つ、ツルギ？」

「…アリサ。逃げるぞー！」

ツルギが私を抱えてその場から全力で逃げ出す。て、なんで…。

「私は捕らわれた猪かつ」

「…こんな軽くてふにふにした猪がいるかつ」

私はツルギの肩に背負われていた。

「大体、逃げるつて。えええええええええつー？！」

私の前には先程まで整骨院だったところにいつの間にか巨木が鎮座いや、これは成長していた。しかも日に取れるように異常成長している。

ねえや わや わや わや。

そして今や塾だった予備校も飲み込むほど大きくなつてこゝ。これつて…。

「サカサの生物兵器…?」

「……あいつならやりかねんな」

「…違ひの?」

「…あー、うん、あいつが関係していないこともないが。まあ、そんなと」

「全力で逃げなさい…」

「イエス、マイレーティー！」

結局、ツルギが何でこんなにこいたのかは聞けなかつたけど、今度はちゃんと話してもいいからね。

ツルギ視点。

「主。ジユエルシード、反応。反応、増大！効果、範囲、0・5、キロ】

すずかの監視をフロイトと交代して一時間ほどノンストップ弁当を

買い物をし帰ろうとしたアリサに合い、フインガーを食らい、
避来矢の認識阻害。もう万能誤魔化し機と化した機能を使おうとし
たら避来矢からジューエルシードの反応の連絡。しかも、すぐ俺の真
後ろで、だ。

願いを曲げて叶えるジューエルシード。

そして、すぐ後ろでそれが発動した。目の前にはアリサ。となれば、一目散に逃げるのが妥当だろう。アリサをこの場から一刻も早く遠ざける必要がある。

（避来矢。念話を最大出力。なのはでもフェイトでもいいからこの事態を伝えてくれ。さすがに、多くの一般人までフォローは出来ない）

「了解」

アリサを抱えながら人ごみを走っていく。こんなところでジャングルで猛獸襲われた時の経験が役に立つとは思いもしなかった。逃げの一歩でしたけど。なにか？

（…探索、終了。桃色、破壊、光線、少女。応答、求ム）

（…いや、私、破壊光線じゃないよ。て、誰ですか？）

どうやら高町なのはが一番近かつたらしい。…桃色破壊光線少女。なのはは否定するけれども、避来矢。お前が正しいと俺は思うよ。

「…主、対応、求ム」

…そうだな。フェイトに協力しているから、俺の名前で出るのはまずいし…。悪いけど避来矢、代弁兼代役頼む。

「了解、主」

「ちよ、ツルギ、あんたビニ触つてんの?」

避来矢に代役を頼んでいると肩に担いだアリサが暴れだした。何事?

「足だが?」

アリサの脚はとてもっふにっふにしています。「できぬ」とないひかつと触つていいね。肌触りもいいし

「…………変態」「

「運んでもらつてこるのに、なんでそんなことを言ひの?」

「声に出てるわよ。……ずっと触りたいとか」

アリサはとても小さな声で顔を真っ赤にしながらあせつての方向へと顔をそむける。

まよい、本音がこぼれていたのか。思わず顔が赤くなるのを感じた。

いかん、俺は年上が好き。俺は年上が好き。しかし、アリサの脚は気持ちいな。否、いや、これは正直に言つぞ。「上物の布団のように気持ちがいいぞ」俺は年上が好き。俺は年上アリサの脚が好き。「アリサの脚が気持ちいい上が好き」。深、こきゅううつう。落ちつけ俺つ。声高らかに自分を見つめなおすためにも叫ぶのだ。

「俺はアリサの脚が好き!」

ん？俺は今、なんと叫んだ？

「……ツルギ」

「はいっ」

アリサの体温が上がっているのが分かる。 プルプルと声が震えて
いる上にスカートから出ている足は赤一色。

「後で…覚えていなさい」

「...はい」

これが、死亡フラグって、やつですか。

なのはがユーノを引き連れてやつてくるまで俺とアリサはともに無言だつた。アリサが何を考えていたかは知る由もないが俺はただ心中でひたすら十字を切りながら南無阿弥陀仏と唱えていた。

第十話 歓迎会キックオフ（後書き）

あとがき

でれれれれーん。

目の前に体中を真っ赤に染めたアリサが現れた。

「ママン

土下座する。

謝る。

アイテム。翠屋のシユークリーム×5（買収成功確率30パーセント）

逃げる。

ツルギ「逃げる。を、選択！」

ツルギは逃げ出した。

たかB「どう、感じで少しラブコメを書いてみました」

アリサ「…私はこれからどうなるのかしらね？」

避来矢「…デレル？」

アリサ「ないわよー！」

たかB「ははは、戦つ。とこつコマンドがないね」

アリサ「あつてたまるか！てか、あつたとしてもどんな方法で戦うのよ」

避来矢「戦闘例。抱擁。告白」

アリサ「…いや」「

避来矢「誘拐、拉致、監禁、拷問。…放送禁止用語」

アリサ「何されるのよつ…！」

たかB「だよ。」

アリサ「本当にになに？…やつぱり答えないでつ」

避来矢「主。全、ヒロイン、フラグ、乱立？」

たかB「いんや、桃色破壊光線少女。高町なのは。この子は違つ人とフラグを建てる予定」

アリサ「どーせ、ユーノ辺りじゃないの」

たかB「いんや、避来矢」

アリサ・避来矢「…は？」

たかB「おお、避来矢が平仮名单品を喋つた。というわけで次回予告。正体、ばれた？テイクオフ！」

避来矢「…作者」

アリサ「…あの」

たかB「次回もアリサのターン！の、予定」

遅すぎる人物紹介（前書き）

ツルギよりサカサの方が詳しく書いてます。
さらに避来矢も自分の主より詳しく書いています。
：存在感が少ない主人公ですみません。

遅すぎる人物紹介

主人公・月野剣 つきのつるぎ 作中ではツルギと呼ばれる

年齢10歳（なのは・フェイトより1歳年上）
ルックスは良くて中の中。悪ければ下の中。どこにでもいそうな

小学生だが精神年齢は少しだけ大人びている。…頭は悪いが。

身体能力B+。スタミナだけはAA

SSSが最上で、SS、S、A、B、C、D、Eが最弱・最下層です。一般人レベルはC Dです

魔力無し。リンクアーコア無し。

レアスキル無し。

黒の大剣。避来矢の主でジュエルシード集めを日本で行う。
ジュエルシードを浄化できる避来矢の唯一の主である。

これまでの経歴

0～5歳時

父・母の3人暮らしだったが、5歳の時、母方の祖母に誘拐同然に引き取られ、拳法・薙刀・剣術といった武術を叩きこまれる。

5～9歳時

武術を叩きこまれながらも何一つ才能を見いだせず、ただただ日々課になつたシゴキを受けていたら従兄弟のサカサの手伝いをするよう言われ、サカサについていく。

9～10歳時

世界各地でいろんな実験・発掘をしながらテロリストやマフィアとの抗争に巻き込まれるサカサのとばっちりを受けながらも月村忍

と南米で世話になつたり、アリサ・バニングス親子とイギリスで2度ほど出会い、交流を持つ。

現在

サカサにいわれ、日本でジュエルシード集めを行つ。

詳細。

身体能力は10歳にしては高いが武術一色の人や才能のある人は負ける。

頭脳面もサカサの教育の所為か所々がおかしい。ちなみに「牛乳」とかいて「ジーかつぶ」と呼んだりすることもある。少し残念な人。

武術の才能や魔力やリンクカー・コアを持たず、さらには特別な血統でもないため、経験だけで培つてきた身体能力。才能がないからこそ扱うことのできる黒い大剣。避来矢。その避来矢の能力 * 第10話現在 に頼りながらジュエルシード集めを行う。

性格は非常にのんびりとしているが戦闘時には性格が熱血漢になり、少しだけ頭がよくなる。

今までの暮らしぶりで周りが大人だけであつたせいか恋愛対象が年上にいきやすく、優しいお姉さんや、きれいな髪の女性に目がない。と、本人は言うが最近、脚フェチ疑惑が持ち上がりつつある。

避来矢。 ヒライシ。 と読む

性格：中性的とも取れる頑固な一面も取れるが主であるツルギの意志を誰よりも守りたいと思っている。厳しくもありながら甘いところもある。

長さ1・5メートルの大剣がベース。見た目通りの固さと見た目

を逸脱するほどの軽さ。そのため今現在では「デバイスではなくオーパーツ」として扱われる。

才能がない人間 にしか扱えないプロテクトがかかっていたため発見から半年以上もサカサの元で保管されていた大剣。それまでサカサが作り上げた組織の人たちが何度も実験したが、使用条件や素材などその存在意義の殆どが見当つかない状態が続いていた。度重なる実験でサカサがミネルヴァ（デバイス）を起動させることに成功した時に、避来矢本体のプロテクトが明らかになり、ツルギへと渡される。

原作ブレイク要素の一つ。ジュエルシード浄化を行うことが出来る。その上、浄化するたびに自分の中にある機能を一つずつ解放していく、ツルギを支える。

能力。

ジュエルシード封印・浄化：避来矢本体がジュエルシード本体に触れるだけで封印が出来る。浄化したジュエルシードは願いを曲げずに願いを叶えることが出来る。もちろん原作通り、限度はあるが。ただし、浄化には一日近くかかる。

物質修理：壊れたものを治すことが出来る。「デバイスも治せる」が生物には効かない。これは避来矢が最初から持っていた機能。

以下、浄化により解放された機能である。

認識阻害：人間はもちろん。機械や魔力で作られた結界すらも誤魔化し通す力を持つ。

拡大縮小：ツルギの意思を汲んでどんな大きさにも変化できる。重量も変化する。10メートル以上に変化することもできるがツル

ギは縮小機能しか使つたことがない。

鎧形態：刀身を分子レベルで一度分解。そのあと使用者の体に合させて、再構成し日本古来の鎧となる。パワー、スピード、防御能力に特化させたバリアジャケットで、作中にはないが海中でも地上にいるかのように戦える。ただし、ツルギは喋れなくなる上に、飛行能力や遠距離武器はない。避来矢の中にある鎧を維持するエネルギーが尽ざると強制解除される。エネルギーは半日ほどで回復する。

八咫鳥やたがらす：ツルギの目の前に大きな黒いシャボン玉を作り出す。それに物を投げ入れると投げ入れた方向に向かって、物が勢いよく射出される加速玉。使用条件としてツルギは両足を動かせない。八咫鳥とはカラスにも似た三本足の精霊。動かせない両足と避来矢を常に持つていなければいけないため、遠目から見ると3本足のように見えるからこの名前が付いた。

八咫の鏡：鎧と同じように刀身を大きな鏡へと変化させる。ツルギのスタミナと体の中にある成分を抽出し白い光と変えて相手を治療することが出来る。これは自分にあてて怪我や骨折などにも使えるが、使いすぎると栄養失調になる恐れもある。あと、使用後はどうしても空腹になる。

解放された機能はツルギ以外が触ると解除される。解除には数秒から一瞬までのタイムラグがあるがこれは個人差がある。

月野逆つきのみがせ 作中ではサカサと書かれている

21歳。ツルギの従兄弟。

ルックスはモデルに見間違うほどすらりと伸びた長身に茶髪のロングヘア。泳ぐ時も寝る時も、いつもサングラスをついているが、それは自分の持つスキルを少しでも抑える為である。知識と習得した技術。ただし、戦闘技術は除く のすべてがトップクラス。というか地球でサカサより上がいるの?と思つぐらいに高レベル。性格はどうが裸足で逃げ出すほどの中であり、悪戯好き。味方に回すといじられる。が、敵に回すと物理的・社会的にも抹消されることが多い。

身体能力B

潜在魔力B+。リンカー・コア有り。

レアルスキル：千樹一葉。

裸眼で物体を見ることにより、見ただけでその物体のありとあらゆる情報を把握し、扱うことが出来る。人間に使うと性格や特徴、身体機能から心理まで読むことが出来る。また、何らかの痕跡を見ただけでその人柄が特定できる。しかし、サカサ本人としてはネタバレのようであつまらない。とのことで度のきついサングラスを使用している。

とある遺跡で避来矢・ミネルヴァ・ジュエルシード。といつもオーパーツを発見。ジュエルシードを暴走させかけたため、仕方なく爆破したがその際、ミネルヴァを起動させることとなる。数ヶ月にも及ぶ実験の成果でミネルヴァの主となり、避来矢をツルギに授けることになる。

詳細

過去に月野の家系と口論になるが、様々な発見や発明で得た巨万の富の半分を実家に渡す代わりに武術のみだった月野の家系から唯一禁止とされていた現代兵器を扱うことが許された天才。その天才であるがゆえに世界中から支援をしてくれ、指示してくれ、自分の

所に来てくれ。と、オファーを受けるが全てを断り自分がやりたいようにやる。というスタイルを貫く。そして、15の時、自分だけの組織を作り上げる。その知識と技術を我がものにしようとする、いわゆる悪役たちに狙われるが持ち前の頭脳で返り討ちにしていく。

現在

海外に散らばったであろう「ジユエルシード」の回収と解析を行なながら、世界中で暴れている。

ミネルヴァ。

性格…やや子供っぽい。が、避来矢相手となると兄貴風を吹かすこともしばしば。話す言葉が全てカタカナ。最初は流暢にしゃべるが起動時間が長引くと途切れ途切れになる。

とある遺跡でサカラサに発掘され、中途半端に起動。この時点ではサカラサを主として認めてはいない。様々な実験のおかげで正常起動を迎える、サカラサを自分の主とする。ジユエルシード封印は出来るが避来矢のように浄化は出来ない。出来ることが少ないため、ミッドチルドで扱われているデバイスの旧型と思われる。すぐに疲弊するため毎日サカラサがメンテナンスする必要がある。

機能
ジユエルシード封印：そのまんま

バリアジャケット展開：左腕のみに展開。手の甲には小さなボウガンがついており、三色のビー玉のような物もついている。

連泊の矢 れんぱくのや ：白い光の糸を飛ばす。速度はゆっくり

りではないものの頑張ればだれでも避けられる。どんな人、物にもぶつかり接続もできるが、魔力を軽くあてられるだけですぐに切れる。

赤犬 アカイヌ : サカサ独自の法律、相手の罪悪感の程度で、精神ダメージを与える。ただし、事前に連泊の矢を相手に接続しているときのみに使える。詳しくは序章で。これを使うとジャケットについている赤いビー玉が白く染まる。

青蛇 アオヘビ : 特殊な機械を使わなくても、あらゆる情報機器に接続し、その中にある情報を読み取ることができ、その上、コンピュータウイルスや自爆コードなども送ることが出来る。それほど壊れたパソコンやメモリーチップからでも可能。しかし、赤犬同様連泊の矢で予め接続しておく必要がある。これを使用すると青いビー玉が白く染まる。

黒船 クロフネ : まだ秘密

使つと黒いビー玉が白くなる。

誰でも使える仕様だがサカサもミネルヴァも誰かに本人たち以外に使われるのはごめんと思っているので、誰かに使われることはおそらくない。

遅すぎる人物紹介（後書き）

サカサは現在、別の小説で大暴れしています。
いずれはこの小説に合流してきます。が、作者の一番のお気に入り。
とりあえず、本編の更新はもうしばらく先になると思います。
…なるべく早く更新しますので気長に待っていてください。

第十一話 正体。ばれた？（前書き）

急激な温度変化に体調を崩し、更新遅れました。

皆さんも気を付けましょう。

主人公の葛藤を描いたお話。

次回はできるだけ早く更新します。

第十一話 正体。ばれた？

避来矢からの念話をを行つて数分後。

「……これは……」

「……そんな」

とあるビルに降りたつたなのはとユーノは目の前の光景に愕然としていた。

巨大な樹木が町を覆う光景。

ジャングルの下から町が生えてきたのか、それともその逆かと思わせるぐらいに荒れ果てていた。夜の街に煌々と照らされる光には炎が混ざっていた。

「人が……ジュエルシードを使ったからこうなったの？」

「……そうは考えたくないけど。……暴走した……。違う、今はそんなことをしている場合じゃない。早くジュエルシードを封印しないと」

(…なのは嬢。沢あ、訂正、ユーノ。応答、要求)

果然とした状態の一人に念話が入る。無論、ツルギの代弁を任せられた避来矢である。

突然の念話に慌てふためくなのは。

「は、えと、その」

「君は一体誰だい？あと、また間違いかけたでしょ」

（謝罪。事態、深刻。ジュエルシード。汝、目線、右方向。距離、五キロ圏内。封印、要求。：封印。即チ、人命救急。直結。最優先）

人命。封印。直結。この三つの文字が呆けていたなのはの瞳に光を照らす。

なのはは右方向にレイジングハートの矛先を向け魔力を込める。

「…わかりました。やろう、レイジングハート」

「オーライ。マスター。ヒリアサーチ」

「まつて、なのは。ジュエルシード封印には距離がありすぎるとある程度近づかないと…」

なのはが何かを行おうとしたが、ユーノはそれを慌てて止めに入る。

だが、

なのはは止まらない。その瞳には強い決意の色があつた。そして、それに呼応するかのようにレイジングハートにも強い光が灯る。

オオオオオオオオオオオオオオオオ。

桜色の光と魔力の咆哮が天を貫いた。

「できるよ。そつでしょ、レイジングハート！」

「イエス。マイマスター」

「…なのは」

ゴーノは眼前の光景に驚愕していた。

三日月状だったレイジングハートの矛先は一度分解され、U字の形へと変貌する。それは杖というよりは槍に近い物。そして、それは槍ではなく砲身。

(…ジュエルシード。拠点。情報、譲渡)

「データ、ロード。…マスター」

念話と同時にレイジングハートを通して、ジュエルシードがあると思われる地点。その詳しい道順が脳裏に浮かびあがつた。

なんなんだ、この声の主は。

なのはの魔力の才能にも驚かされてばかりだが、こんなにも静かでまるでそばで話しているのにそこにはいない。それでいて地図を見ているかのように正確な情報をさせてもらっている。空気のようになにこにいるのが当たり前。だけど感じ取ることができない。まるで、幽霊のようだ。

「お願い、私の想いに答えてレイジングハートー。」

「ロングレンジモード。スタンバイ、レディ」

桜色の光がレイジングハートの先端に集まり収縮と膨張を繰りかえりながら輝きを増していく。そして、なのははその矛先を声の主

が提示してくれた場所に狙いを定める。

「ジュエルシードッ！封印！」

ズウオオオオオオオオオオ。

桜色の光が矛先から放たれた。それは人一人飲み込むほど太くまるで流星のように放たれた一撃だった。

ツルギ視点。

それはアリサを鮫島という執事さんに引き渡して再び整骨院のある場所へ向かっていた時だった。

ズウオオオオオオオオオオ。

なのはが放った光線が整骨院を丸ごと包み込み、ジュエルシードが転送される光景を見ていた。…かなりの近距離で。てか、爆風に巻き込まれた。

「……つむー」

「…主。無事？」

そう見えるならお前の目は節穴だ、避来矢。…あー、無いか。剣だし。

まあ、地面に落ちていた空き缶の一つが鼻に勢いよくぶつかっただけだから。あー、鼻血が出てる。鉄の匂いがつーんとする。

「ジュエルシード、反応消失」

「じゅえりなのはは封印に成功したらしい。

さて、家に帰つてフロイトとアルフにどう説明したものか？

：全然、思いつかない。

とりあえず、帰るか。

〔主つ、上方、落下物。到達、予測、一秒…〕

上？なんかあるのか？と、上を見ると異常成長を遂げた樹木によつて所々が半壊した建物の破片が、目の前。正確には俺のすぐ真上でぐらついていた。

これはいかん。

どおんつ。

早速忠告通りその場から離れると、避来矢のいう通りに瓦礫が落ちてきた。

その瓦礫が落ちてくるのを皮切りに周りでは大人たちが四方八方に逃げ出していた。

異常現象が収まつたのに騒ぎは加速していた。当然だ町の一部とはいえ、巨大な樹木が生えてきめちゃくちゃにした。その上、その姿かたちが跡形もなくなればテロの恐れだつてある。

わああああああああ。さやああああああ。

さて、こんな時に力のない子供がとるべき方法は、安全なところでじつとしておくべきなのだが、こんな都會。ビルや背の高い建物

の中で安全な場所と言われてもわからない。

冷静に考えれば。

そして、俺は力を、避来矢。力を持つてしまった。目の前では瓦礫につぶされかけている人。パニックで何人の人間が将棋倒しのようにならっている。

俺はといえば爆心地の近くにいたおかげで誰にも潰されるわけもなく避来矢の助言とサカサとの経験のおかげで冷静に対応でき、瓦礫につぶされることもない。

冷静に…。

「主。…迂闊、浅慮。世間体、我、主。行動、規制」

迂闊に避来矢は使えない。

避来矢の鎧に関するても。八咫の鏡に関するても使えない。

少なくとも今の時代には過ぎた力。それを使えば目の前にいる人たちを救える。でも、それを行うとして、その後はどうなる。

おそらく恐怖の目で見られる。もしくは避来矢を欲する人が出てくる。そして、俺を狙つてくる人間。そして俺の周りを丹念に調べ上げ俺の行動を監視し、そして、それを得ようとする奴らが出てくる。

力を。避来矢の持つ力を欲する人間に俺はどう立ち向かう。

「…主」

避来矢がなければ俺は何もできない。

サカサの手伝いも。フェイトの手伝いも。

俺自身、何も持たないただの人間。いや、何の取り柄もない人間から避来矢を取り上げたら何もできない。それだけで済むならいい。しかし、それを発端にフェイトの持つ魔法の力を欲する人にどう立ち向かう。

きっと、いや、魔法に関して詳しくは知らないが、必ず人はそれを欲する。

守れるのか？俺に？

サカサのようにどんな逆境にも勝てる知識や技術は持っていない。フェイトやアルフのように一般人の情報をごまかせるわけでもない。いや、認識阻害を使えば出来はするがそれを行うと鎧もハ咫の鏡も使えない。

避来矢の能力は一つずつしか使えない。

鎧を使い、落ちてくる瓦礫を弾き、人が潰れないように誘導する。しかし、それでは避来矢の存在を大勢に知らしめることになる。そうなれば、いずれはフェイトの方。魔法に関心が行きフェイトも俺も行動に不備が出る。下手すれば、捕まり実験される可能性もある。

鎧を用いて、瀕死の人たちを救う。しかし、それは鎧以上に注目を浴びる。どこかの研究機関に捕まり、一生モルモットにされかねない。

それじゃあ、どうする？

救える命を見捨てる？自分の行動を守るために？

「俺は…」

誰か、助けてくれ。金なら払う！お母さん、お母さーん。邪魔だ、どけえ。おい、押すんじゃねえ。駄目だ瓦礫がつ。だれか、誰か助けて、血が、血が止まらないんです。

目の前の人たちを見捨てきれるのか？

「俺は」

「…主」

助けきれるのに。救えるのに。自分が助かりたいがために。行動を束縛されないために。赤の他人なのに。自由を捨てきれるのか？

自分が大好きな人たちにまで迷惑や拘束や脅迫の危険に合わせてまでのことか？

「主。無能力。才能無。故、我ガ主」

「…避来矢」

避来矢が俺に現実を突きつける。そう、俺は無力だ。だから避来矢の主なんだ。

「主。考慮。思案。正解。我無主、無力、無能。…サレド、我有
主、不可能、無」

「避来矢？」

急に何を？不可能はない？

「主。我無、無力。サレド、我有主、有力。不可能無。
ノ劍。我、主、共二。運命共同体。一蓮托生。我、所望。何人、我、主
等、無関心。可能性、零一近シ。サレド、零一非ズ」

…はは、そうだな。出来るんだよ。俺には目の前にいる人を救うことだ。たとえ一人でも救えるのなら。誰にもばれずに救う可能性がないわけでもない。

「…ごめん避来矢。そして、ありがとう」

俺は建物の陰に隠れて、更に認識阻害をかけて建物の奥へと向かう。

そして、認識阻害を解くと同時に避来矢を剣から鎧に換装。パニックに陥っている町へと再び足を向けた。

？？？視点。

「…恭弥」

「大丈夫だ。忍。きつと、すぐに落ち着く」

「うん」

私、月村忍は恋人の恭弥と共に、明日大学の講義に必要な資料を集めに街に繰り出していた。まあ、それを口実にデートをしていたわけだが、とあるホテルで食事をとつていたら恭弥のすぐ後ろのテレビが窓を突き破ってきた木の枝に吹き飛ばされ、ホテルの中はかなりのパニック状態へと陥っていた。

それからしばらくすると桜色の光が町を照らした。その光が收まると同時に木の枝は消えていた。あれは夢なのかと思っていたら夢ではないことを認識する。

目の前の惨状に。樹木に吹き飛ばされたレストランに、怪我をし

た人。

ホテルの窓の外から見える碎けた道路に、崩れかけたビルの壁。

「早く逃げ出したいが、この人込みでは…」

「…うん、殴り飛ばすわけにもいかない。かといって身動きが取れるわけでもない」

ホテルのエレベーターや階段は滞在していた人たちで混雑している。

私たちがいるのは十階建てのホテルにある三階にあるレストラン。レストランの出入り口には私たちのようなお客様などころかコックの人たちまで逃げ出している最中で、とてもじやないがその人ごみに入ることもはばかれていた。

「おとーさん、おかーさん。うわああああああん」

そんな時、一人の男の子が人ごみの中から泣きながら出てきた。どうやら親とはぐれたらしい。だが、出てきたところがいけなかつた。そこは先程樹木が突き破つてできた巨大な穴が開いている場所だった。

「危ないっ

「くそつ

私と恭弥は同時に走り出していたが、間に合ひ距離ではなかつた。尚且つ、発見したのが人ごみの中である上に、男の子がいる場所。穴のある場所は私たちも避けるようにしていたせいかなり距離が開いていた。そして、悪いことはまだ続く。

ドオン。

厨房で爆発が起つた。すぐにスプリンクラーが作動して厨房から吹き上がつていた火は消えたが、その振動でレストランの床にあつたひび割れが大きくなる。そして、男の子のいた床も同じようにひびが生じ、砕けた。

「…え？」

男の子が砕けた床と共に落下していった。
それはまるでゆっくりと再生されるビデオのように、私と恭弥の目の前で男の子は落ちて行つた。

「忍、見るな！」

恭弥が私の目をふりぐ。男の子が落ちていく顔を見せたくはなかつたのだろう。それでも私は見た。見てしまった。落ちていく男の子の顔を。

「ごが、どおん。

瓦礫が落下した音にさらにパニックに陥る声がした。が、辺りは静まり返つていた。まるで耳をふさいだかのように。そして、沈黙を破る声が響いた。

〔青年。男児。保護。要求〕

それはまるで変声機で声を変えているかのように聞こえた声。恭弥の手をすりしてみるとそこには瓦礫と共に落ちたはずの男の子。

そしてそれを抱えた黒い日本甲冑だった。

「え、な。た、盾無たてなし?」

「否、我。避来矢。我、要求。男児、保護。我、関係、非検索・
非干渉」

盾無とは日本の猛将として知られた武田信玄の家宝の一つである
鎧。避来矢の鎧形態はツルギのイメージをもとにしていたため少し
ばかり似ているものがあった。

「……」

トツ。

しばらくの間、とくによりも時間にして数瞬の間に、動く黒甲冑
は恭弥に落ちた男の子を引き渡すと再び床に出来た穴へ飛び降りて
いった。

「な！？待て！」

恭弥は黒甲冑を追おうとするが男の子を抱えているため穴から飛
び降りることは出来ない。私も恭弥の傍によつて黒甲冑の後を眼で
追うとそこに映つた光景に目を疑つた。

「な、なんなんだ！？あの鎧は？」

「町を破壊？…違う、町の人たちを助けている？」

巨大な穴により視野が広がつたレストランから見えたのは黒い影

が崩れかけた瓦礫をことごとく砕いている光景。

地面に落ちた瓦礫。それを碎き、下敷きになつた人たちが出てきた。

ひっくり返つた自動車を再度ころがし、中にいる人引きずり出す。建物から崩れてきた破片をことごとく弾き飛ばす。折れた電柱ある程度の長さにまで碎いて排水路に突き刺して道路と歩行路を区別していた。

その動作はまさに迅速。

あまりの速さに助け出された人たちはどうやって助かつたのかわからぬままその場から逃げ出す。それぐらいあの黒甲冑は素早かつた。

「…恭弥」

「…忍。とにかく、このホテルから出よう。何をするかはそれからだ」

「うん」

恭弥の目もあの甲冑の動きを追っていた。

それは驚愕と同時に喜んでいるようにも見えた。恐らくあの甲冑と戦いたい。と考えているんだろう。

しかし、任された男の子がいる手前、そんなことは出来ない。なにより、今は緊急事態だ。まずそれを脱しなければならない。

それからしばらくして、私たちはようやく人ごみが少なくなった階段を下りて行つた。

…少し気になつたんだがあの鎧。私を見ていた？…まさかね。

ツルギ視点。

7800／20000
10000／10000

鬼の面の下にある数字は先程の瓦礫を受け止めた時にとつとう半分を切った。

最初の数字は救助に関する活動制限。その次はこの場から撤退する為のエネルギー残量。

避来矢からの提案の内容。それは、あらかじめ、救助と撤退への制限を決め、それを必ず守ること。

鎧形態で顔を分からぬ。その上で避来矢が喋るので自分自身に嫌疑がかかることはない。その上、避来矢自体の索敵により防犯カメラに映らないコースを走り、可能な限り迅速に動くことにより人目に付かないようにしている。

しかし、これは常にトップギアに入れている状態を維持しているため、多く見積もっても瓦礫をどける作業は後二回。程度によればあと一回が限度。

「最優先。人命救助。生命維持、困難。危険度、最大。感知。：
主」

わかっている。これが最後。これが今の避来矢。いや、俺の限界。目の前には瀕死とまではいかなくても手当てを必要とした人たちが何人もいる。ここで欲が出る。鎧を解除して鏡で癒そう。とう欲望が。

「主つ！」

…ごめん。それは出来ないよな。そうすれば絶対にばれる。それ

だけは避けなければならない。さあ、最後の救助者は。この時まで俺は現状を舐めていたと思い知らされた。

目の前で、五メートルはありそうな瓦礫が崩れ落ちるのが見えた。その真下には車いすの少女と二十代の女性。おそらく、少女の付添いの女性がいた。

俺はその光景を見た瞬間に避来矢に指示を出す。

避来矢！！

「全速全開！」

避来矢も俺の意思を汲みとり、出力を全開にする。最初の一歩で地面はその時に発生した衝撃波で揺れ、二歩でそのアスファルトは碎け散り、三歩目以降はまるで巨大な削岩機が抉り取つたかのような傷を残していく。

車いすの少女のすぐそばまで一気に駆け寄る。その時に生じた風圧で周辺には砂埃が巻き上がり人々の視界をふさいだ。

落ちてくる瓦礫と少女の距離は一メートルもなかつた。だから、飛び蹴りではなく迎え撃つかのように右足を軸に左足を斧のように振り上げる。

「天使両断蹴リイイ！！」

ドオオオオオオンッ！

踵と瓦礫が触れた瞬間。巨大な瓦礫にひびが入り、運悪く真っ二つに砕けた。

「この時、鬼の面の下の数字は、

1200／20000
10000／10000

そして、俺のすぐそばにいた車いすの少女への被害は多少の小石が当たつた程度。

二つに砕けた瓦礫のうちの一つはその自重で車いすの少女の傍に落ちた。そして、蹴り上げられたもう一つの瓦礫がその隣にいた女性に直撃しかけていた。

もう、この瓦礫を崩すことなどできない。かといってダッシュで救い出すこともできない。片足が上がっている以上両手で受け止めて今後の出力、じゃ支えきれない。

それでも、
それでも俺は……。

俺は目の前にいる人助けたいんだ！

「……仕方無。……逃走制限出力、活動制限出力、同調」

避け矢の諦めたかのような声が響くと同時に鎧全体から力が溢れ出した。そして、

11200／30000

一つに分けられていた制限が一つに統合されていた。避け矢、本当にめんな、こんな我儘な主で。

ズズンッ。

「腕力、腰部、他、間接部位、出力最大！」

92000／30000

片足を蹴り上げた状態で両手で受け止めるといった無理な体勢で瓦礫を受け止めたせいかこの一瞬で2000も減ったがその一瞬で両足を地面につけ固定することができた。

「女史、早急、撤退、要求！」

82000／30000

「え、何？」

避け矢が女性に早く逃げるように声をかけて促すが女性の方は巻き起こつたほこりで目を傷め、瓦礫が碎かれた轟音であたふたと辺りをウロウロとしていた。その姿にもう一度、声をかけようとしたら、

「どうとどしゃがめつ、このバカ女あつー」つちは時間がねえんだー！」

「は、はい！」

…避け矢がキレた。

63000／30000

「主、瓦礫、粉碎、作業、推薦」

はいっ、それでよろしいです。避来矢さん。
主の威儀？知らない知らない。だって、避来矢めっちゃ怖かったもん。

避来矢はそんな俺の意思を読んだのか再びいつもの通りに喋り始めた。

「…我、反省。以後。我、自身、言葉、注意」

ベキ、ベキベキベキベキ。
バンッ！

女性がその場にしゃがんだのを確認すると同時にサバ織の要領で全身に力を込めて瓦礫全体にひび割れが生じさせ粉微塵に碎いた。

2300／30000

「主！」

わかっている全力でこの場から逃げる。

「速力、最大」

纏っている鎧全体から先程の力強さはもう伝わっては來ない。本当に稼働限界がまじかなのかが分かる。幸いなことに裏路地につながる道を見つける。同時に人目がないところで鎧を解除。このまま認識阻害を使用して家まで走つて帰るはずだった。

…そう、だつたのだ。

鎧を解除して認識阻害を使おうとした瞬間に横殴りの一撃が俺の

意識の殆どを刈り取つた。残つた意識を使って避来矢を小さくし、ズボンのポケットに入れたまでは良かったが、殴り飛ばされた先にあるガードレールにぶつかると同時に俺は気を失つた。

この騒動で俺の正体がばれないことがないようにと祈りながら。そして、俺の意識を刈り取つた謎の襲撃者は俺を車に乗せ、とある屋敷に運んで行つた。どうやら俺のことを知つてゐるらしい。その間、避来矢はフェイトとアルフに念話で俺の現状を伝えていた。

「明日、以内、帰宅。心配無」と、

いや、俺ら拉致られたんだよ、避来矢。

第十一話 正体。ばれた？（後書き）

あとがき 避来矢反抗期パート？（嘘）

ツルギ「俺が悪かった、避来矢いいいいいい！」

避来矢「主、過度、動搖。鎮静。深呼吸」

？？？「嘘。と書かれどるしな」

たかB「はいはい。まだ！」は無印なんで御退去願えますか

？？？「いややー。うちは本編では一言もしゃべれてないんや、
こじらで花咲かずしていつ咲かせと」

ツルギ「それより俺、もう少し避来矢に優しくしようと思つんだ」

たかB「真面目な奴ほどキレたら怖いしな」

？？？「そんなことてなんやつ、うちかてリリカルのヒロインの
予定なんやでつ」

たかB「俺の予定は未定。そして、未定は予定だ！」

ツルギ「格好良くなき切つた！でも、それって…」

？？？「行き当たりばつたり。と、いうことやないか？」

避来矢「肯定」

たかB「一応、」のあとがきの後のお話考えとるもん。ずっと考
えていたお話だもん。更新だつて一週間以内に…」

「？？？「出来たらええな」

避け矢「可能性。微」

たかB「微。て、妙にリアルな…」

ツルギ「まあ、考えているならいいか。ほんじゃ、はや、じゃな
くて？？？さん。次回予告」

「？？？「まかせてーな。次回。衝撃、ネコ屋敷でトリオは見た！
(嘘)て、うちこれだけかいなつ」

避け矢「…(嘘)？」

たかB「？？？さん。それじゃあ、次回のまえがきの時にも出る
？本編ではしばらく出なくなるし」

「？？？「もちろん、出るで。ところが」のカンペの裏になんか書
かれとるんやけど…」

たかB「次回もお楽しみに」

第十一話 粉碎初恋物語（プローケンハートストーリー）（前書き）

まえがき

？？？「様々な困難を乗り越えながら、憧れのあの人に会えた主人公」

サカサ「しかし、彼女にはすでに最愛の人を見つかっていた」

？？？「しかも見ているだけでお腹いっぱいどころか胸やけを起すほどのどろつどろつのぬっふぬっふやつた」

サカサ「そんな可哀相なお話が今日、幕を開ける」

？？？・サカサ「リリカルなのか？無を有する剣。始まります」

「

第十一話 ブローケンハートストーリー
粉碎初恋物語

ツルギ「あの（嘘）って、そういうことかああああああああああああ！」

？？？・サカサ「始まります」

ツルギ「がウザいよ！なんで海外にいる筈のサカサまでいるの！」

特別出演です。BY作者

第十一話 粉碎初恋物語（プローケンハートストーリー）

第十一話 粉碎初恋物語
プローケンハートストーリー

「……はつ」

なんかとても嫌な夢を見たような。

何故かは知らないが従兄弟とエセ関西弁で狸みたいな性格の女の子にいじられまくつたいやな夢。えーと、確か俺は…。

夜中の街中でジュエルシードが起動。
アリサを遠くに避難させる。

再度ジュエルシードを封印しようとしながらなのはに応援を要請。なのはがジュエルシード封印。俺、向かつた意味無し。
ジュエルシードで町がボロボロ。これからのことについて葛藤していた俺はウロウロ。

避来矢の助言により町で人助け。
時間切れそうになつた俺は裏道に入る。
裏道から一般道路に出ようとしながら認識阻害を使おうとしたら。

ツルギ君、ふつ飛んだああああああああ！（キヤ 翼風）

あれ？そこから記憶が…。

てか、頭の中でアナウンスした奴は誰だ？

「あ、よかつたツルギ君。田が覚めたんだね

頭の横から声が聞こえたので顔をそちらに向けるとすずかがこちらの顔を窺っていた。

なんですかがいるの？

そして、何気に避来矢が元のサイズで隣に立てられていた。てえ、避来矢！？

「……な、なんで」

「私がいるのか？それともこの大きな剣のこと？」

すずかが俺の言葉を継いできた。その言葉に「クククと頷きながら避来矢を手に取ろうとしたが…。

* >, J&amP; - \$% # \EU%U, V {, --.?-.?-.?.

両足に物凄い痛みが走った。それはもう、悶絶する痛みという奴だ。

る自分の姿。その服の下からもわかるように足にはギブスがはめられていた。

「駄目だよ。両足の骨がきれいに折れているんだから」

「おれいえ?」(どうぞ)

「怒らないで聞いてくれる？」

ツルギが目覚める十時間前。
すずか視点。

キッ キキイイイイイイイイイ・・・・・・・

ツルギ君ぶつとんだあああああああ。 (ヤプ翼風)

(だから誰さ? BY ツルギ)

(回憶につつこまないでね。BYすずか)

「わわああああ、お姫ちゃんへへへ。」

「ビ、ビうしたの？ノエルさん？」

「ひ、人をまねてしまひました。

私の所で働くメイド姉妹。水色のロングヘアをリボンでかわい
く飾った妹のファリン、髪をアップにした姉のクール系メイドのノ
エルさん。

…「」の一人には助けるという概念はないようだ。

「お嬢様、長い間お世話になりました。妹を。ファリンをどうかよろしくお願ひします」

「それよりも助けよつよー。」

といつ私の一声に。

100

「ああ！」

ああ！

十秒ほどの間を開けて一人はよつやくその「」とに気づいた。

それから急いで車にツルギ君を乗せて屋敷に向かつた。

本当はお姉ちゃんたちを迎えて行つたのだがツルギ君を運んでいる間にメールで、アリサちゃんの車で帰ります。という連絡を受けたので一安心しながらもツルギ君を私の屋敷に運んだ。

それからツルギ君を手当てしようとしたら両足が風船のように膨れ上がっていた。月村家お抱えの医療スタッフを呼び、メスで衣服を切り裂き、足の治療にあたつた。どうやら骨折と筋肉断裂で内部出血を起こしていたらしい。

治療後、今こなごの體のシテ休ませた。

「……というわけなの。ちなみにこの剣はツルギ君の切り裂いた衣服の中から零れ落ちたアクセサリーを拾つたら急に大きくなつたんだ」

「そ、 そなのか。 と、 とんで何でそこには黒い剣があるのかな
? パピイツー?」

ツルギ君は頬を搔きながら大剣に手を伸ばそうとしたが再び激痛を感じたのかベットの上でたうちまわっていた。

「……ねえ、ツルギ君。わざと言つてゐるでしょ？ 本当はこれが何
なのか知つてゐるでしょ？ 教えてくれないかな？」

焦っているのか、噛みまくったツルギ君。

「アハ、ヒヒヒヒヒヒヒヒ、ヌヌヌヌヌヌヌヌ」

あ、深呼吸して息を整えている。

「アキラ君が何者だ？」

噛んだ。思いつきり。

۱۰۷

ぼ
ふ
つ
。

ああ、笑つてないよ。ツルギ君。ほら、がんばつてもう一回。だから布団から出てきて。

「その励ましか届いたかど」「かは定かでにはないがツルギ君か布団から顔を出してきた。口元では何度も練習しながら私の顔を見てその口から出た言葉は、

「ハフんの…」

「……………。」

卷之二

また嘔んでいた。そして、私はじりえをれなくて思わず頭を出し

た。

だつて、静かな部屋だつたからか、何度も反響したからその効果

は反響した分効果大だつた。……ご、ごめんねツルギ君。でも、これは無理、無理なの――――。

ツルギ視点。

辱められた。自分に……。

「あ、あえう。あえあああああああ」

「世間の風習。言わなこと、また足をつんづんしちゃうよ」

つんつん

い、いひや、いひやひやい。いひゅひょんせ」

「むー、何で教えてくれないの？」

「しゃ、サカサ、キヤンけいなんですっ。だから言えねえ！」

「・・・それって、この間の夜見たいに?」

！？

すずか。まさか感づいている？

「それとも私が学校で氣絶していたことにも関係している？」

「……えーと、

いつの間にか足へのつんつんは収まっていた。代わりにすずかがこちらを真剣な目で見つめてきた。そして、おもむろに避来矢を手に取つてベットからわざりに遠ざけた。

「ツルギ君。本当は覚えているよね？あの夜のこと。どうしてアリサちゃんやなのはちゃんみたいに。…どうして覚えているのに普通に接してくれるの私は…」

「……だからどうした。俺は馬鹿だけど、それだけのことで付き合いを変えるほどの馬鹿じゃない」

「……

すずかの目にほほ惑こと恐怖。今にも零れ落ちそうな涙が瞳に集まっていた。

「…………俺に関する」とだけだ。俺が協力している組織。敵対している組織。メンバー。構成は教えられない。俺が教えきれるのは俺自身のこと。その剣のこと。それ以外は教えられない。それでもいいか？」

すずかは静かに頭を下げる。顔は上げない。こぼれている涙を見せたくないのだろう。

「一応、剣を返してもらえるか。あと、IJのIJとはわかっているだろ？けど他言無用。知つてしまつたら死ぬまで誰にも言わないと。守れる？」

「……（Jちゃん）」

小さく頭を動かしたすずかを見て、俺は避来矢を受け取り、避来矢と念話をを行う。

（避来矢。これから話すことには誰にも気づかれることがないよう認識阻害を使ってくれ）

（……井）

（お前が言いたいのはわかる。サカサやフェイトのことよりも言わない。でも、すずかが関係している事件もある。そして、気がかりも残っている。俺とフェイト、アルフだけじゃあ守れないこともある。本人にも警戒してもらった方がいい）

（……「了解。阻害開始）

（あと、フォローの方も頼む）

（主。……フェイト嬢・アルフ嬢、仕置き、確定）

（なんで？！）

それから、三十分ほどかけてすずかにこれまでのことを話した。学校ですずかが気絶したのは、すずかを夜中に襲ってきた悪者に

よるもので、そいつはやつつけた。もちろん、やつつけたのはなのはだし、フロイトやアルフのことも言えるわけがないので、そこは誤魔化したりもした。

そして、血を吸われた夜の日のことになる。

「あの時は驚いたぞ。いきなりだもんな」

「…………」

できるだけ明るく言つたつもりなんだけどすずかの方はそこが一番気になつていたんだろう。現に体を一度びくりと動かして震えていた。

まあ、怖いんだろうけど。俺はどんな境遇にも負けない破天荒にあつてているからなあ。だからこそ、俺は……。

「だから吸うなら吸うで事前に言つてくれ。あの時は体調がすぐれなかつたんだ。その翌日とか前日と言つてくれれば死なない程度にくれてやるから」

「……え？」

「まあ、さすがに毎日といふわけにはいかんし、俺にも予定があるから。出来るだけどちらに会わせるようにするし」

「……」

「俺はサカサの手伝いをしていたからこうこうのには慣れているの。だから、これくらいのことは何でもない。」

「……でも、私は普通の女の子じや、人間じや」

すずかの言葉を俺は遮る。悪いけどそれ以上は言わせない。

「だからどうした。すずかがそうだと、世界がそうだと決めて、認めない。俺は馬鹿だからな」

たとえそうとしても覆す。俺は天才だからな

サカサの言葉なら、最後の所はこうなる。ここは俺流にアレンジした。

道案内の世話になつた礼として、貧困な砂漠地帯で水田を作ろうとしたサカサは地元の人々に無理だと言われたことを笑つて返した。

だからどうした？俺は天才だぜ

そして、一晩中。サカサと二人で何もない砂漠のど真ん中で穴掘り作業をしたら、見事に水脈を探り当てた。今ではその街は物理的にも経済的にも潤っている。

水脈を探り当てたサカサに感謝した人たちに見せたサカサのドヤ顔は本当に意地悪な顔をしながらも誇らしげで、とても格好いいものだった。

「.....」

「だからな、すずかも。あれ？」

まあ、さすがにドヤ顔で笑つて返すことは出来ないけど、すずかに俺については気にするな。と言いたかったんだが、すずかの大好きな目からは大粒の涙がボロボロとおー？

「俺じゃやつぱりサカサみたいには無理かー?」

「…違‘う。違‘うの。…嬉しくて」

慌てふためく俺にすずかは笑いながら泣く。器用だな。

「じゃ あなんで泣く?嬉しくて泣くのは死にそうなことから生き延びた時に流す涙だぞ。少なくとも俺はそうなんだが…」

ロシアの猛吹雪の中、食料をすべて失つて一口目に見た光景を。町の光が見えた時。あの時の光を俺は忘れない。
あれは思い出すだけでも涙があふれる。

「…うん。やつぱりツルギ君は馬鹿だね」

「うん、自覚はしている。でも人に言われるとカチンとくるよ」

「めんめん。じゃあ、これからもようじくね」

「よろしく、すずか」

俺はすすかと握手を交わす。涙をぬぐつた手は少し冷たかっただけで、涙を流したすすかの顔はその反対に晴れ晴れとしていた。

とりあえず安全が確認できるまでS.Pの導入をしてもらうことでの身の回りの安全。定期的に俺とメールのやりとりをすることで自衛してもうひとつを約束した。

それから三十分後にアリサが、遅れてなのはが訪問してきた。

その間に俺は避来矢を八咫の鏡に変化させて体の治療。骨折だけではなく体中にみみず腫れも起こしていたらしい。

…鎮痛剤が効いてなかつたら俺ショック死していたんじゃないかな?

なのは視点。

「おおーん、おおーん」

林の向こう側からツルギ君のむせび泣く声が響いていた。

「…見苦しいわね」

「まあ、仕方ないとおもうの」

「わすがにあれだけ見せつけちゃつたりね」

十数日前、私とお兄ちゃんがすずかちゃんの家に招待され、ノエルさんには案内されながらお座敷にある庭でお茶会をしている四人と会流。

忍さんと話していたツルギ君、アリサちゃん、すずかちゃん。そこに私たち一人がそこへ行くと…。

ぶわっ。

ツルギ君がいきなり涙を流したの。どうしたの?!

「…勝てねH」

「あ、あははは

小声で何かを呟いたツルギ君。私じゃなくてお兄ちゃんを見て泣き出した?

すずかちゃんはそんなツルギ君を見て苦笑いを浮かべていた。

「恭弥。よく来たわね」

「すまない、少し遅れた」

「ぶわわ。

先ほどよつも心なしか流す涙の出力が上がったかのよつな…。

「…わかつっていた。分かつていた。だつて、あの土郎さんと息子で高町の兄貴だから」

「じゃあ、その涙を止めなさい」

「つむきながら何かぶつぶつと呟き、その呟きにアリサちゃんがため息交じりにノエルさんが入れてくれた紅茶を飲む。

「恭弥様が来てくれたおかげで忍お嬢様も嬉しそうですね」

「ひぐひ

「じょー。

ファリンさんがそんなツルギ君に『眞づいていないのか言葉をこぼすとツルギ君が呻いた。

ちよ、泣いて出るような顔じゃないよね。今の。

「それじゃあ、私たちは中で勉強しているからみんなは楽しんで行つてね」

「うん、わかつたよお姉ちゃん」

「じゃあ、行きましょうか恭弥」

「あ、ああ」

お兄ちゃんはツルギ君の様子に気づいたのか苦笑いを浮かべていた。気づいていないのはファリンさんと忍さんぐらいだらうな。一人が屋敷の中に入つていいくところで、ノエルさんがうつむいているツルギ君の頭をがしつと掴んで顔を持ち上げさせる。そして、ツルギ君の視点をお兄ちゃんと忍さんの間、手をつないでいるところに固定する。

「お嬢様方、ご覧ください。あれが恋人つなぎといつものです」

「ちよ、それは」

「うへはあああああああ。

まるで壊れた水道のようにツルギ君の目から大量の涙が流れている。脱水症状で死んじゃうじゃないかな。

DASH!

思わず英語になつちゃうほどのスピードでツルギ君はお屋敷内にある林の中に駆け込んだ。まあ、何となく気持ち察するけど……。

「……ノエル。どうしてあんなことを？」

「私のしでかした」とを不問にしてくれたお礼にと思つたのですが……

「えー？」

あれがお礼なら私はいらない。

「ツルギ様、」本人も認められるほどのこと。それなのにいつまでも引きずつているのはよろしくないとthoughtので

「まあ、その方がすりきりしていいわよ」

アリサちゃんはノエルさんを支持する。や、そういうものなのかな？

「まあ、御嬢様達にはその方がよろしいでしょうし」

『ふつ。

あれ、お嬢様方じやなくて御嬢様達って言わなかつた。アリサちゃんとすずかちゃんは紅茶でむせているけど何かあつたの？

それから三十分ほどでツルギ君は林から出でくると机の上にあつたクッキーと紅茶をやけ食いしていた。普段なら行儀が悪いというべきなんだけど泣きながら食べているツルギ君に注意することは出来なかつた。・・・というより私には出来ないよ。

第十一話 粉碎初恋物語（ブローカンハートストーリー）（後書き）

あ、ぎやああああああああああああああああ。

たかB H P O / 53

ツルギ「俺は、お前が、死ぬまで、お前を、殴るうひひひひひひ
うう！」

サカサ「やめるんだ、ツルギ。見るこいつのヒュはもうゼロだ」
といいながらも作者の背後で身動きが取れないように作者に羽交
い絞めを行うサカサ。

？？？「おーおー、やつとるなあ

ツルギ「畜生っ、俺に何か恨みでもあるのか作者…」

サカサ「ある」

？？？「あるんかい」

サカサ「二次創作だけじゃなく、だいたい美少女の出てくる主人公
は何かともてるんだ。だから、せめて一太刀というわけでツルギ
を年上好きにした。そうだ」

ツルギ「じゃあ、なにか？！そのためのこの話か…？」

サカサ「らしいぞ」

？？？「十話以上もの伏線か。て、ものすごく長い伏線やな！
ある意味驚異的や！」

サカサ「H A H A H A。まあいいじゃないか、その妹に興味を持
たれたことだし」

ツルギ「それでも俺は嫌だった。てか、あのメイドさん酷いこと
しよる」

？？？「ツルギ君、うちと言葉遣いが似てきとるよ」

サカサ「あの人とは気が合いそうだ」

？？？「うちもや」

ツルギ「助けてーー！」ドスココンビがいるよーー！」

？？？「そろいえば結局一週間以内更新は出来ひんかつたなあ

サカサ「『俺が悪いんじゃない。会社が悪いんだ。…急に補勤を
入れるから』って、作者も言つていたな」

？？？「某反抗期シスコン洗脳プリンスかい！」

ツルギ「最後の方で弱気になつたがな」

サカサ「まあ、こりゃでお開きといふつか。次回予告」

？？？「了解や、次回 空を飛べて魔法使いは一人前。テイクオ
フや！」

第十三話 空を飛べて魔法使いは一人前（前書き）

理由合つて

コメティ続の

十三話

サイドストーリー

シリアルだから

この前書きは

広告も兼ねています。

リリカルなのか？黄金の瞳。バジリスク。
もうそろそろでこの小説に合流かも…。

第十二話 空を飛べて魔法使いは一人前。

ピキーン。

「むひ」

「どうしたんだい、フェイト？」

月村邸の林の中でアルフは主人であるフェイトが何かに反応した様子に気が付いた。

「いや、何となくムツときただけ」

「…そうかい。ふ、ふあああああ」

「…アルフ。眠かつたら家に帰つて休んでもいいんだよ」

「んー、そうする。あ、でもフェイトッ」

あくびを噛み殺しながら林の中から出ようとしたが、何かに気がついたアルフはフェイトに振り向いて少しだけ力を込めた目で言つ。

「なに？」

「フェイトもすぐ休むんだよ。昨日から全然寝てないんだから」

「…ん、ツルギを連れて帰つたらそつする」

「つ」

フュイトの言葉にアルフは田を丸くしたがすぐにキラキラとした目で喜色満面といった具合で普段は隠していた尻尾を振った。

「アルフ？」

「ううん、何でもないよ。うん。なんでもない」

アルフは嬉しかった。今までフュイトは自分が何度も度言つても疲労で倒れる寸前まで休もうとしなかった。それなのに、「ツルギを連れて帰つたらそうする」。それがうれしかった。

ツルギも時々無理をするからフュイトにもそれが影響したのかもしない。

「じゃ、じゃあ先に帰るからね」

「？ アルフ、何かいことあつた？」

あつたよ。

しかし、アルフはそう言わずにツルギ。いや、自分たちの家に尻尾を振りながら帰つていた。その足取りは今までにないくらいにとても軽やかなものであった。

それから三時間後。

キンッ。

「へ、ジュエルシードの反応。出るよ、バルディッシュ」

大きな木の枝の上でしばらく微睡んでいたら魔力の波動を感じし

たフュイトはバルティッシュを手に取り、結界を張ったのち、バリアジャケットを展開する。

「イヒッサー。ゲットセット」

黒の衣服からレオタードにも似た、スピード重視のバリアジャケットを身にまとい、黒のマントをはためかせながら木の枝から飛び立とうとすると、不意にすぐ足もとから声をかけられた。

「ふえ、フュイト？…お、お前、何やつてんだ！？」

「えつ、つ、ツルギ？！」

ジャケット展開前まで周りには何の反応が無かつたからかツルギは避来矢の認識阻害を使っていたのだろう。現にツルギの右手には元の大剣サイズになつた避来矢が握られていた。

「な、何つて、ジュエルシードを…」

声をかけられて驚きながらも説明を行おうとするフュイトに対しツルギは顔を赤くしながら声を張り上げる。

「そうではない。羞恥心を持つてとつのだ…」

「？」

フュイトは思い当たる節が見当たらないので首をかしげる。ツルギはそんな様子にかまわず顔をそらしながら続ける。

「み、見えてしまつたではないか」

(何が見えたのか。と、考えている)？

(ツルギがいるところと自分の位置関係を思い返している)？？

(先程自分が何をやったのかを思い出している)？？？

(思い当つた)！？

「…………（顔を真っ赤にしながらバルティッシュに最大レベルの雷を纏わせる）」

「…………（顔を真っ青にしながら避来矢を鎧に換装する）」

一秒後。

もし、結界が張られていなかつたら、今年最大の雷が海鳴市に落ちたと気象庁に記録されただろう。

緊張が走った。

ちなみにツルギはそんなことには気づかずクッキーのやけ食いをしていた。

断じて、八咫の鏡の使用における副作用（空腹）だけに非ず。

(…なのは)

(うん、コーノ君。これは)

ジュエルシード。反応。

「うわーうわーうわー汚いっ」「ふつ

・・・主。

避け矢は前回の傍受の件もあるので念話はせずに自身でやつ思いつたつた。

なのはの持つてきた手提げカバンから出てきたコーノは猫から追いかけられながらも異変に気づき、一人とも不自然じゃないようはどうこの場を離れるか思案をしていた。

それに気づかない、のどに詰まつたクッキーを流そうと紅茶を一氣飲みしていた失恋者は金髪お嬢様からアッパー切割という躰を受けていた。

なのはとコーノはそれにかまつている暇はなかつた。避け矢はそんな主に呆れていた。

(そりだ、なのは。僕の後を追いかけて)

(え?ああ、うん。わかつた)

「わゆー

「あ、ま、まつてユーノ君。もう、私たちとユーノ君を捕まえてくれるね」

「あ、私も手伝おうか?」

「大丈夫だよ。すずかちゃんはもうやつくりしていく」

ユーノはお茶会をしていくの場所から逃げ出すかのように飛び出して、なのははその後を追つ。一方で、

「うー、うー

いい角度で決まったアッパーを受けたツルギは鼻を押さえながらその場に崩れ落ちる。ツルギはリバース。及び、鼻に逆流しかけた紅茶塞き止めようと鼻と口を押えて地面に倒れながら呻いたいてた。

「くすり

ノエルさんがそんなツルギを見て笑っている。

「ふふ、ツルギ君は楽しいね」

そんな姉につられて、ファリンさんも笑っている。

「大怪我したから運ばれたって、聞いたけどそれだけ元気なら心配ないわね」

ふん。と鼻息ひとつ立てて、膝上に乗つかつてきた猫の頭をなでるアリサは笑つている。

「もう、アリサちゃん笑つたら悪いよ」

すずかもの状況が面白いのか笑つている。

周りのみんなも笑つてる。

お日様も笑つてる「へー、るーるるひるひるひー、今日もいい天氣いいー。

(だから誰だ? !)

〔…主。ジュエルシード[反応]〕

「へ、まじ? !」

避来矢の報告を受けたツルギはナレーションに対しての疑問を感じながらも顔を上げてすぐさま立とうとした。ら、

「ん、縞々?」

「／＼／＼／＼／＼

顔を上げた先に、わずかに開いた両足の隙間に青と白のストライプの入ったパンツが見えた。

そして、その持ち主は普段は着ないミニスカートを抑える。

「…ツルギ。あんたね」

ツルギはなのはの後を追うように林の中に逃げ込む。

アリサもそれを追おうとするが膝に乗っかってきた猫を払い落とすことができずにただ顔を赤くして拳を握ることしかできずにいた。

「…あー、もうハ、こんな事だつたら//ースカートなんてはくんじゃなかつた」

「そりゃええ、アリサちゃん。今日は珍しく//ースカートだよね
「べ、べつに今日だけよ、今日だけだから。…足が好きとか言つてたからとかそういうのじゃないし」

アリサは後半の部分は口の中だけで「によ」と言つていたが、すずかは何となくそれを察知していた。

「ツルギ君つてさあ。…脚フュチ?」

「なんで知つてるの?…あ?」

いや。と聞こえそうな笑顔のすずかにアリサは焦り始めた。

「…へー、やつぱりそつなんだ」

「違うからね、すずかーあんたが考えている」とは間違っているからね!」

「へー、そつなんだ」

すずかは意地悪な顔をやめて、少しだけ興味なさそうな顔に戻つた。

「そう、 そうだから、 变に誤解しないでねつ」

「じゃあ、 私にもまだ…」

「そりだから、 …え？」

「なーんでもない。 とにかく、 サカサさんといつ人にもちょっと興味あるんだけど…」

お嬢様一人のお茶会はまだまだ続きそつだ。

フロイト視点。

「うう、 もう鎧展開は無理だな」

ツルギは避来矢の認識阻害を使い、 避来矢の鎧を纏つているという幻を使っていた。 その幻というのも実際それに触らないとわからぬほど現実感を思わせていた。 けど、 それはどうでもいい。

「当然だよ！ ツルギがあんなにエッチだったなんて…」

…うう、 なんどよりもよつて真下にいるのさ。

思い出すだけで顔に火が付いたかのように熱かつた。 バリアジャケットを纏う際どうしても着ているものは分解され、 体のラインは光に包まれているとはいえボディーラインが目立つ。 それに対して、

ツルギの避来矢は、ツルギが大きな風船に飲み込まれたかと思つて
いると、風船が縮み人の輪郭を現してきたかと思いきやその時は既
に鎧を纏つてゐる。うづ、なんかずるい。

ツルギはフェイトからの教育的指導（サンダー・レイジ連発）を受け、避来矢の鎧を開するエネルギーは残りわずかとなり、先程強制解除された。なほはもいるはずだから、念のために鎧を纏つてい
ると思わせる認識障害を使つていた。

「……うう、見られた。それなのにツルギのバリアジャケットはず
るい。不公平だ」

「だから、悪かつたつて」

「…フェイト嬢。主、裸身、希望？」

「違うからね！」

「うー！」

「ツルギもそんな対応しないで、その恰好でその対応されても氣
持ち悪い。というか、怖いよつ

鬼の面をした鎧武者が自分の体を抱きしめている絵を想像してみ
よつ。

・・・うむ、キモ怖い。

「もうう、大体、昨日はどうして帰つて来なか

ひやおおおおおおおおん。

「「」」

空気を震わせる鳴き声。そこに思わず顔を向けるとそこには。

「…猫？」

「あの猫が大きくなりたいと思つたからジユエルシードが発動したのかな？」

「たぶん、そうじゃないかな？て、あれは」

ツルギが何かを見つける。あれは…高町なのは。私たち以外にジユエルシードを集めているもう一組の魔術師。彼女たちも大きくなつた猫を見て啞然としていた。

「さて、どうやって高町たちより早くジユエルシードを奪取するか？」

「猫へ攻撃してもたぶん邪魔するだろ？しね…。目視できない上空から一番強い魔法で攻撃とかは？」

「「」めん、俺と避来矢は空飛べないんだ。それは無理」

「…あれだけ、避来矢を使いこなしているのに？」

「謝罪。我、力量、不足」

「まあ、詳しくは家に帰つたらな。高町は結構強い攻撃方法も持つてゐるし、相手にすると痛い目に合つだらうし」

ツルギから教えてもらった限り、あの子は優しいからきっと猫を守ろうとするだろうし。避来矢の送ってきた情報だと物凄い魔力砲撃をぶつ放す。出来るなら相手にしない方がいい。

そう考へていると避来矢から一つ案を上げられた。

「主、提案。認識阻害、仕様。作戦、伝達。提示、了解？」

「どんな作戦？」

避来矢の提示した作戦は簡単に言いつと。

ツルギが認識阻害で高町なのはに気づかれないように接近。

一度、高町なのはとレイジングハートを避来矢の刀身で殴る。これは認識阻害を彼女たちにかける為でもあり、できることならその一撃で意識を奪うという算段もある。

その後にジュエルシード封印という形になる。

「女の子を殴るのは抵抗があるが…」

「ツルギが出来ないなら私が」

「いや、俺がやるよ。フェイドが失敗するとは思えないけど俺なら失敗しても大丈夫だろ。高町に気づかれてもきっと戸惑う。そこに追撃を加えればいい。それでも駄目なら認識阻害を使って姿形を消して再三の不意打ちをつてばいい」

「・・・」

「どうした？ フェイド

「ツルギって、バカじやなかつたつけ?は、まさか、預けている
ジュエルシード使って願いを叶えた?！」

少しでもいいから頭を良くしてください。とか。

だ、駄目だよツルギ、そんなことしたらファランクスシフトで雷
撃だよ？！

「ちがわい。従兄弟が、サカサが仲のいい人間の家に侵入したり
不意打ちをつく際にはそうしろと何度も体。……いや、心にトラウマ
として残っているんだ。イタリアでマフィアの皆さんにお世話にな
った時に、敵対組織の家に潜入させられた時にそう仕込まれたんだ」

「よ、よかつたああ

本当に安心したよ。だつて、ツルギだもん。何するかわからない
し。

「……はあ。じゃあ、行つてくるな

ため息交じりにツルギは高町なのはのいるほうに歩いて行つた。
一度、彼女を追い越して正面に回り込んだ。どうやら正面から頭を
叩くつもりらしい。それでも駄目なら鳩尾に一撃という算段なのだ
らう。

ちなみに何でツルギの姿が見えるのかといふと避来矢がバルディ
ッシュとシンクロしてその姿を私とバルディッシュに見えるように
してくれているらしい。

そんなことを考えていると、高町なのはが赤い宝石、デバイスら

しき物を取り出した。恐るべジャケットを展開しようとしたら、…あ。

「いくよ、レイジングバー。セート」

そんな彼女に對してツルギは避来矢を振りかぶっている。タイミング的にはギリギリ間に合うのだけれど。その時の私は先程のジャケット展開を見られたことを思い出した。

「アツ」

「駄目ええええええええええええええええ！」

「え？」（なのは）

「へ？」（ツルギ）

「フォトランサー、ショート」

ズドオンッ。

バルディッシュの先端から電気を帶びた黄色の光の弾が発射され、それはツルギにあたつた。そして、爆風を巻き起こしながらツルギはそのまま林の茂みの中へと吹き飛ばされていった。

「え、な、なに？」

「て、なのは危ない。なんか落ちてくるよー。」

「え、いやああああああ

私はツルギの手から離れ、高町なのはの頭上近くに打ち上げられた避来矢。それを高速移動しながらキャッチして、彼女の目の前に降り立つ。

「…え？」

目の前の女の子は突然のこと驚いている。何が起こったのかわからないという顔をしていた。まったくツルギはスケベなんだから。私だけならともかく。じゃ、ないつ！とにかく。

「君は何を考えているの！？誰が見ているかわからないのに、こんなところでジャケットを展開しようとして！」

「『』、『』めんなさい？！」

「そここの使い魔も、『』の子のパートナーならちゃんと周りに気を配る！」

「え、あの、僕は使い魔じや

「じゃないと、私みたいな魔導師じゃなく、一般人にもばれるかもしれないでしょ！困るでしょ！それでもいいの！」

「す、すいません！」

まくしたてる私に一人はすぐさま頭を下げる。本当に緊張感がないだから。

「私があの子のジュエルシードを封印するから君たちはもう帰つて！」

「え、ええ？！あの、私たちもジュエルシードを」

「そ、そうです！あれは危険なもので…」

「いいから帰れー！」

シユンツ。

寝不足もあつたが、ツルギのぞきの前科持ちと未遂だつたこともありこの時の私はどうかしていた。

私は転送魔法を使って一人を適当などこかに転送した。本来、結界内で転送魔法を使つても結界内から出ることは出来ないけど私自身が張つた物なのでその辺は大丈夫。

「え、ちょっと…」

「ま、待つて…」

私は一人を転送させた後、巨大な猫からジュエルシードを摘出するためには哀相だとも思つたがある程度魔法で攻撃してジュエルシードを獲得した。

その日の夕方。

ツルギの家。正確には居間に置かれたちゃぶ台の向こう側で腕組みをしているツルギの目の前。アルフはその横で何事かと私とツルギを忙しく見ていた。

「…何か言つことはあるか？」

「『めんなさい』

冷静になつた私はツルギが初めて会つた時にした土下座というもののをしていた。

避来矢がなくて怪我の治療も行つこともできず、体の所々に魔法による打撲を残しながらも、何とかここまでタクシーを使って帰つてきた。

私が転送したあの子そう遠くないところに転送されていて、私が弾き飛ばしたツルギを発見。月村邸に連れて行つた。

そのあと、ツルギは月村家の皆さんを言いくるめるのは大変だつたとか。

「今日の晩御飯はサカサが作ったレトルトながらも本職の人真っ青のフランス料理フルコースだったが…。フュイトは抜きな

「えー」

「『めんよ、フュイト。フュイトの分まで私が食べるから』

アルフ、それはフォローになつてないよ。

ご飯にもありつけたけれど、ツルギが私を見る目が怖かったです。今日のことはおあいことこうことで。手を打つてもらいました。

第十二話 空を飛べて魔法使ひは一人前。（後書き）

あとがき

たかB「本来、なのはだつたが、フェイトにやられる役をツルギにやつてもらいました」

フェイト「さ、災難だつたね、ツルギ」

ツルギ「ほう、実行犯自身がそれを言つたか？」

フェイト「『めんなさい』」

なのは「だ、駄目だよ、ツルギ君。その振りかぶつた避来矢君おろして！私の貞操を含めて、フェイトちゃんは私を守りつとして」

フェイト「…なのは」

ツルギ「むう、そこまでこうのなら」

なのは「ほつ、大丈夫。フェイトちゃん」

フェイト「ありがとう。なのは。今度、同じようなことがあつたら、次は私のがのはを守つてあげるね」

ツルギ「それは、つまり今度はなのが俺に砲撃をかますという」とか

なのは「…フェイトちゃん」

フュイト「…なのは」

たかB「まだA、Sじゃないよ、お一人でさ」

ツルギ「しかも預定はしないんだな。なのは」

なのは「いや。どうでもいいだしさしないようにしておこうよ」

フュイト「しないことは叶わないんだね」

たかB「IJのままではお後が悪くなるので次回予告」

なのは「次回 激闘？ジユエルシード争奪戦！」

フュイト「?が気になるね」

ツルギ「前々回のこともあるからな」

第十四話 激闘？ジユエルシード争奪戦！前編（前書き）

どうだ、短期間更新。

見直し？

もちろんしてませんよ。

嘘です、しましたよ。

それでも誤字脱字があるかもしだれない。

気づいた方、教えてくれるとうれしいです。

あと感想も。

第十四話 激闘？ジユエルシード争奪戦！前編

「温泉？」

『うん、昨日から大型連休に入っているでしょ。明日、明後日を利用して山の中にある宿でゆっくりと憩つんだ』

朝食の後片付けをしていたら携帯電話が鳴り、それを取るとすずかが出てきた。

三人娘達は明後日、温泉に行くとのこと。
俺はジユエルシーード探し。あつけのんびり、じいはぐつたり。
これが格差社会という奴ですか？

『それでね、ツルギ君もどうかな。一緒に温泉入らない？』

「すずかよ、昨日説明しただろ。俺は俺で大事な用があ

『…お姉ちゃんやノエルも来るよ?』

「詳しく述べ…用があるから無理だ」

『湯上りのお姉ちゃんのふともも。ノエルの赤みを帶びたくるが
し。ファリンの汗ばんだ肌』

「是非とも同行…じゃなくて、行けないから

『アリサちゃんやなのはちやんも来るけど…。背中流してあげ
うか?』

「なかなか魅力的だが今日、明日予定が入っている。すまん、無理だな」

『…（なんで本音と前提がこぼれないのかな？）頭蓋骨』

「わくなんせやなこんらかられ」

本当なんだからね。

なんか怒ってませんか信長様？じゃなくてすずか様？

『むー、今日もなの？もしかして女の子がらみ？なんて』

「ノーハメントで」

昼からフエイトとの戦闘訓練を予定している。夜はガツツリとサカサの魔の手、じゃなくて息のかかつたお寿司の店、なんと回転していない所。

オウ、グレイトリッヂ！

その店では、サカサの名前を出せば用に一回だけ、無料で食べられる。：あいつは何処にでも勢力を伸ばすな。フェイドとアルフもせっかく日本に来たのだから日本食代表を長年務めている寿司を堪能してもらおう。

『：絶対連れて行くから』

「？」

すずか様？なにやら声色が低くなつていませんか？

『どこも洗わないで待つていて』

「いや、だから、行けないから」

さすがに不潔ではないか？

温泉に行くからとはいっても前日に風呂ぐらいは入るだろ？

『拉致でも誘拐でも犯罪まがいなことでもしてでも連れて行くからね！』

拉致も誘拐も犯罪だよ、すずか。

それから三十分後。アリサからも温泉のお誘いがあり、先程の会話に似たことを繰り返した。

さらに一時間後。高町なのはからも連絡があった。彼女の場合、頭蓋骨の部分が、お話になっていた。

……あれ？おかしいな？一番平和的だったのに。思い返しただけなのに。一番戦慄したのは何故だ？

「ツルギ、早く訓練開始するよ」

「おう、今行く

ちなみに朝食をとっている最中にフェイトから空を飛べないのは魔術師として半人前以下。といつありがたいお言葉をもらつて、避来矢の新しい機能 黒斗雲 を解放した。

この機能は飛行と跳躍。簡単に言えばワープだな。その実用訓練もある。

「ほいじゃ、二人とも結界を張るよ」

「ん、それじゃ始めようか」

「ゲットセツト」

フェイトはバリアジャケットを予め展開していくだけなのでバルディッシュを戦闘形態にセットしなおすだけだ。

「頼むぜ避来矢。拙い主様のサポートよろしく

「了解。黒斗雲、起動」

対する俺は避来矢が鎧形態に換装するように黒い光が俺を包み込んだ。

そして、黒い光が五秒ほど俺を包み込む。そして、その光が拡散されるとその無骨で巨大な刀身は無くなり、俺の体は黒い袴で身を包んでいた。

「新しいバリアジャケット？鎧？」

「半分肯定。半分否定」

袴の上からでフェイトやアルフには分からないが肘と膝にはまるで金属板のような硬い感触がある。そして袴から飛び出している両手。足首から先には銀色の金属でできた籠手と足袋。これは最低限度の格闘装備ともいえる。つまり、

「…フェイトと同じ機動力重視かつ空中格闘用のバリアジャケツトか」

「肯定。飛行能力・転移能力特化型バリアジャケット。代償、現状、防御能力。鎧形態、一割未満」

「えつ、そんなに下がるの?...」

今の今まで避来矢の防御能力に頼ってきた俺にとって衝撃の事実
だった。

「追加要項。鎧形態、黒斗雲、熱量共有。多用、厳禁」

「しかも使用エネルギーは別々じゃない!」

「…なんというか、ツルギらしいと言えばらしいといつか」

「ツルギ。大丈夫だよ慣れればいいことだし。じゃあ、やるよ」

ダメ出しの真実を突きつけられた俺は驚きを抑えることができず
にいた。その姿を見たアルフは苦笑いをし、フェイトはそれが当然
と言わんばかりにバルディッシュを振りかざす。

「ちよ、フェイト。まだ心の準備が…」

ズドオオオオオン。

昼間から雷と斬撃。更には夕方にはアルフと徒手空拳。と、ツル
ギは久々に命の危険がない?トレーニングに充実した日々だった。

???:視点。

「…あの子は一体何をしているの」

とある暗い空間で、一人の女性が青白い光の球に映し出されたフェイトとアルフ。そして、ツルギの姿を見て唸つていた。まるで親の仇。…いや、自分の子供の仇を見るかのように。

それはフェイトが楽しそうにしていることに、アルフが年頃の娘のように、ツルギがそんな二人と一緒に笑つていて。女性はいら立ちを隠しきれなかつた。いや、もともとその空間には彼女一人だけなので隠す必要などない。

そんな中、彼女の怒りを少しだけ薄める存在があつた。

「…あの魔剣。もしかしたら、ロストロギア? いえ、それよりもおの人形。これはお仕置きが必要ね」

これ以上は見ていられないと言わんばかりに光の球を消す。その空間唯一の光が最後に移したもの。それは憤怒に染まつた顔だつた。

フェイト視点。

「…は? 実家に帰る?」

「うん。とはいっても報告だからすぐ戻るよ。それでお願いがあるんだけど…。避来矢を少しの間、私に預けてくれないかな? 母さんが避来矢について調べたいことがあるんだって」

「避来矢を?」

「フェイト嬢、先日、事情説明、忘却? 我、主以外、接触、即座、機能停止」

ツルギの連れて行つてくれたお店で綺麗なお寿司を食べて家に帰つて来ると母さんから連絡があつた。

アルフは家に帰つて来るなり歯を磨いて素体である狼状態になりすぐに眠つた。それを見送つた後で、私はお風呂上りに避来矢の横でパソコンをいじつているツルギの背中に声をかけた。

ツルギ以外の人間が避来矢に触れると、避来矢は電源を落としたテレビやラジオのようにうんともすんともいわなくなる。ツルギが一緒に触つていれば別だが、そうでないとただの剣になつてしまふ。以前、ツルギを吹つ飛ばした時、私が弾き飛ばされた避来矢をキヤツチすると同時にツルギは私の作り出した結界から追い出された。どうやら避来矢のサポートなしでは結界の中にもいられないよだ。

「うん。それは分かっているんだ。だから避来矢には直接触れないように持つていこうと思うんだけど…駄目かな？」

「…うーん。サカサともあの時のメール以来、何の連絡もない。といふか連絡が取れないから何とも言えんな」

やつぱりそう簡単にはいかないか。私だつてバルティッシュを調べたいから見たこともない人に貸して。なんて言われてもそう簡単には貸せないし。

「ま、フロイトの母ちゃんならいいか

「うん、そうだよね。そう簡単には、…え？」

「主?...」

…今、なんて？

「いや、別にそのまま持ち逃げなんてことはしないだろ？それにフエイトの母ちゃんんだぞ。信用できる」

「疑問提示！信用、要素、何処！？」

「そ、さうだよツルギ、ビリーハーそんなものが！」

慌てだす避来矢と私を見て、ツルギはまるで何を言っているんだ。といつ顔をしていた。

「え？ フエイトの母ちゃんなんだろ？ 疑う要素あるのか？」

「…………」

「…………」

その様子に避来矢も私も畳然としていた。ツルギは疑つていなかつた。

ただ、私の母さんということだけで、信じてくれた。

「えーと、なんか間違つたこと言つたか？」

「……王」

「ふ、ふふ

何か間違えただろうかと急に困りだしたツルギの顔はとてもおかしくて……。

とても……嬉しかった。

「ふふふ。ありがとう。ツルギ」

私は嬉しそうに顔の頬が緩まるのが分かつた。こんなに心が満たされたのはいつ以来だらう。これ以上ツルギの前にいたら顔がとろけるかもしれない。

「お、おう」

ツルギにお礼を言つてすぐに一階にある私とアルフが使つている部屋に駆け込む。そして、心も体もが満たされた状態のおかげで下の階で繰り広げられた会話に気づくことなく私は眠りについた。

一階居間。

「…やべえ、さつきのフォイト。すげえ可愛かった」

「…主にいい」

「そんな声を出すな避来矢。一応、サカサガ帰つてきてもいいよううに浄化済みのジュエルシード一個は俺が持つておくから」

「…主、過度、信頼、失態、原因」

「避来矢、お前はフェйтを信用していないのか？」

「…呪」

「じゃあ、その母ちやんも信じじよ」

「…善処」

「まあ、いきなりは無理だらうけどな。ゆつくりでいいさ。強要はしない。俺だつていきなりは信用できないさ。でもさ、あのフェイトの母ちゃんだつたら信用できるだろ。そついえば、ジュエルシードって俺ら、何個集めた？」

「…浄化済、六個。未浄化、一個。計七個」

「大体、一日一個のペースだな。なのはに持つて行かれたものもあつたな」

「肯定。一個、なのは嬢、所持」

「じゃあ、フェイトが持つていいくのはジュエルシーード五個とお前か。…なんか手土産でも持たせるか？」

「寿司？」

「痛むだろ。うーん。翠屋のケーキとかがベストなんだよな。アリサに連絡してみるか」

じつして、フェイトの帰郷前夜は更けていった。

なのは視点。

私、高町なのはは人生初の勧誘をしていた。

勧誘する人はツルギ君。勧誘先は山の中にある温泉。
その目的はツルギ君の首に提げているもの。

「え、いや、でも俺着替えも何もないし」

「そのへんは旅館で用意するから大丈夫だよ」

「そりゃあ、だから一緒に行こつよ。ね、ユーノ君もそりゃあて
いぬし」

「九五—九五—」

「いや、でも、やじまでお世話になるわけには……」

昨晩、アリサちゃん経由でツルギ君が翠屋のケーキを所望してき
たのを聞いて、私はお父さんとお母さんに頼んでケーキを用意して
もらつた。

温泉旅行当田の早朝。ユーノ君と一緒に開店前の翠屋でアルバイトの皆さんにツルギ君に渡すよしこと、伝えよしことしたらツルギ君が開店前にやつてきた。

「それに開店前に来てケーキを頂いただけただけでもおこがまし
ような気が…」

「そんな！」と叫ぶよーね、お父さん、お母さん。」

「しかし、出発はあと一時間後だしな。アリサちゃんたちも、そろそろやつて来るぞ？」

「アリサも来るんですか！？それじゃあ、なお悪いな。待たせて、あいつの機嫌を損ねたら温泉じゃなくて血の池に浸っちゃうよ。」

「すずかちゃん達を待たせるわけにもいかないし…」

「ちよ、ちよっと待つてなの。今、連絡をするからー。」

携帯電話を取り出し、一人に連絡を取る。お願い一人とも早く出てー！

ユーノ君はユーノ君でツルギ君を繋ぎ止めるために必死にツルギ君のズボンを引っ張っていた。

その様子にツルギ君は困った顔をして「すいません。ちよっと…」と言い、席を離れて携帯電話を使い誰かと話している。今のうちこいいいい。

『もしもし、のはは？どうしたの、まだ集合時間じゃないでしょ？まあ一応今からそつちに向かう予定だから…』

「アリサちゃん、お願い、もう少し遅れてやつてきてー！」

『は？何を言つてこらのなのは？』

「アリサちゃんが遅れてきてくればツルギ君を温泉に引きずり込めるのー。」

『…どうこいつ？』

「かくかくしかじか

『四角いムーブ。ね。分かったわ。ちゃんと引き止めていなさい

よ、なのは。ツルギには聞きたいことやりたことがあったから『』

「了解なの、それじゃあ三十分ぐらいこ後こ」

アリサちゃんととの交信を終えて今度はすすかちゃんと連絡を行つ。私がそんなことをしてゐる間に、ツルギ君は緋色の長い髪をしたお姉さんにケーキとジュエルシードの入った小瓶を渡していた。ユーノ君はそれに気づいて私の脚をペチペチと叩いたが私は気が付かないまますずかちゃんととの交渉を行つていた。そして、

「いい湯だなああああああああ、ジバノンノ」

「ツルギ君、君は本当に小学生なのかと疑つ時があるよ

「しょおがあくせいにいいでえすよおおおお」

「…無駄に拳が入つた声だねえ（おつむくせいなあ）

「なのはー、いつまでもそこそこると変態さんになつちやうよ

男湯というのれんの田の前で、ユーノ君からジュエルシードは緋色のお姉さんが持つていつたという連絡を受けてがっくつとしている私にお姉ちゃんから声をかけられた。

念のため、ユーノ君も男湯に入つて他にもジュエルシードがないかどうか調べたけど見つからなかつたらしい。

私の熱の入つた勧誘にお母さんとお姉ちゃんは何か勘違いしたのかこの温泉に着くまでずっとからかわれた。むー、ツルギ君あとでお話なの！

ぞくつ。

「ん、どうしたのかねツルギ君?」

「いや、今なんか、殺氣。いや、殺意を感じたんで

「は?」

ツルギは辺りを見渡したが何もないことに放堵して再びお湯の中に身を沈めた。

第十四話 激闘？ジユエルシード争奪戦！前編（後書き）

あとがき

たかB「さて、突然だが『』で問題です」

主人公・避来矢^{ツルギ}

たかB「さて、『』の先には何が入る？」

なのは「無能」

ユーノ「不幸な人」

アリサ「ごく漬し」

すずか「モルモット」

アルフ「ご飯をくれる人」

フェイト「え、えーと。あ、脚フェチ？」

ツルギ「皆なんか嫌いだ！」

たかB「この小説を読んでくれた人からの答えも待っています」

避来矢「次回 激闘？ジユエルシード争奪戦！後編」

たかB「え、前編後篇に分けるつもりはなかつただろ？仕方なく

分けただろう? HAHAAA、その通りです。なんか温泉話を書こうとしたらこいつなった。後悔はしていない」

なのは「そんな、ついやってしまった。反省してますみたいな言い方でしめるの?」

たかB「黙れですか!……………そうですか」

第十五話 激闘？ジユエルシード争奪戦！後編（前書き）

重大発表。

主人公が主人公らしくなります。
デバイスが普通にしゃべります。

なんでかつて？
作者さんがいろいろと限界だからです。
：文章力とか。

第十五話 激闘？ジュエルシード争奪戦！後編

午後十一時。

温泉を堪能して、卓球大会。意外なことにのんびりとした性格のすずかが優勝した。その後再度、全員で温泉につかることに。

俺が男湯から出ると女湯からアリサとユーノーが一緒に出てきた。何故かユーノーは出汁を取られた煮干しのように細くなっていた。アリサ曰く隅々まで洗つたとか。ユーノーは何か大切なものを無くしたと言わんばかりに白くなっていた。脱色もされたのか？

その後、豪華な食事ももらい満足満腹で布団に入り眠るだけ。のはずだった。

子供である俺たちは本来、寝ている時間帯。にもかかわらず、浴衣ではなく普段着に着替えた高町なのはに呼び出されていた。一応俺も普段着。

まあ、夕食後に旅館の外に来るよう言われた。正直、眠い。

「…で、話つて何？高町なのは」

「むー。なのはだよ」

俺の言葉に少しむくれた顔をしてなのはは、可愛く怒った。

「ん？ああ、すまん。同じじ飯食べたから確かに名前で呼ばないとな。で、改めてどうした、なのは？」

「うん、あのね。その、その白い石を、私に譲ってくれないかな？」

……なののは俺のことを見られないからそんなことを言ふんだが、
だが、俺はなののはのこと知つていてる。彼女は色違いとはいえ欲して
いる、このジュエルシードを。

「……嫌だ。これはサカサ。科学者の従兄弟に渡さないといけない
代物でな。これが無くなるとサカサの手で俺の命が無くなる」

「いやはははは。むかへ、そんな[冗談を]……」

「……

「冗談」

「……

「……あ

「……本当なの?..」

「……

「(ノクン)」

悲しいけど、これが現実なんだよ。

すでに預かっていたジュエルシードも一個アルフに渡してもうな
いし、正直これまで手放したら、俺は命を手放す。これはまさに俺
ライフライン
の生命線。

「あ、あのね、詳しくは言えないけど、それは危ない物なの。だ

から特定の場所に保管しておかないといけないの。それで」

「…まあ、俺が持つているこれも昨日までは安全な避来矢に收められていたんだが、今日。まあ、明日までは俺が自分で持つておくように言われてな…。悪いけど譲れない」

「つ。どうしても黙日、なんだね」

譲れない。の言葉に強い語氣を込めていう。そちらの事情も分かることにも事情がある。

…フェイトもサカサも元氣にしているといいけど。

まあ、どっちも元氣だろう。フェイトは母ちゃんの家に行つたし、サカサは天国だらうが地獄だらうがどこででも遊びほうけるに違いない。

「逆に尋ねるけど。どうしてそんなに危険な物なのに。そうだと知っているのになのははこれを欲しがる？特定の場所つて、どこだ？」

「え、えーと、それは…『ごめんなさい』と言えません」

お互に秘密。という状態を維持したいといつのならこれ以上の成果は見られない。

なのはの事情は他人を巻き込みたくない。何となく俺と似ているかもしれない。が、俺は既に協力者というか関係者が少なくて三以上もいる。ここで喋ればそれこそ大変なことになる。正直、サカサ、フェイト、アルフの三人から折檻されたら俺は確実に死ぬ。

「じゃあ、俺もこれ以上は言えない。これも渡さない。危険な物なのに女子に渡していられるか」

「そ、そんな

「じゃあ、話せるのか?」

「あ、あうひ」

「ごめんな。事情はあらかた知っている。恐らく、アリサやすずか。家族のみんなを、他人を巻き込まないため。

俺からはアリサにこれはサカサ関係だからこれに似たようなものを見つけたら絶対に関わるな。と、伝えている。サカサの恐ろしさの片鱗を見ているアリサはこれをすぐに承諾。

すずかには、事前に話していることもあってかすぐに了承してくれた。

問題は恭弥さんや士郎さんといった高町ファミリー。

どういうわけか、サカサのことを少しだけ知っているようで、話の途中で敵意のようなものを当てられたが敵対することはない。と判断したのか、それとも俺のことを取るに足りないと考えたか、すぐにおを收めてくれた。が、

「あの、その、どうしても駄目?」

なのははしつレジュエルシードを欲しがった。

「ダメッ。士郎さんや恭弥さんにも言われているんだろ。堅気の人間はサカサにできるだけ関わるな。って、大体、人に喋らせるだけ喋らせて自分は教えないなんてどうこうことだ。むじが良すぎる」

「いや、いやあ

「それにだ、なのは。」こんなとこを恭弥さんや土郎さんに見られたら怒られるぞ。子供がこんな夜中に外へで

ズドオオオオオンッ！

そんなんのはに追い打ちをかけよつとした瞬間、なのはの背中。正しくはその背景となつていて夜空に緋色の流星が空から落ちてきた。

「なー！」

「いやあー！」

流星が落ちたのはそつ遠いといひでなく、おそれべりから一キロもない山の中。

そして、その流星の色に俺は見覚えがあつた。あれはアルフが魔法を放つときに見える光。…嫌な予感しかしなかつた。まるでアリサが結界に捕まつた時と同じような気がした。

「くそ」

「え、ちょ、ツルギ君」

突然の轟音に驚くなのはを尻目に俺はなのはの横を走り去る。そのままの勢いで手入れのされてない林の中につっこんでいく。

避来矢も持つていらない状態で危険地帯に行くようなものだが関係ない。

ただ、そこへ一秒でも早くいかなければならぬ。そんな気がした。

なのは視点。

「ちよ、ツルギ君」

ツルギ君からジューエルシードをどうにか譲ってくれないかと頼んでみたはいいもののまるで相手にされず、逆に私の方が追いつめられていたら突然、轟音が鳴り響いた。

その轟音が何なのかわからぬまま振り向いたときにはツルギ君は森の中に走つて行つた。まるでそこへ呼ばれているかのようだ。

（なのは一に向ひの側から魔力反応。…これは、この間の女の子だよ）

（え、あの時の赤い目をしたあの子？）

（うん。でも、ものすごく弱つている。まるで今にも消えそうな…。とにかく尋常じやないよ。何かあったかも）

旅館の陰にいたユーノ君から念話を受けた私は、急いでツルギ君の後を追うためにポケットからレイジングハートを手に取り、ツルギ君の後を追おうとした。バリアジャケットを展開しようしたらユーノ君から念話が入る。

（なのは。セットアップは待つて。一応、結界を張るから。と、その前に念のためにツルギと君が布団で寝ている幻を作つておくね）

（ほえ、どうして？）

(どうしてって、そりや、君たち一人が夜中にいなくなつたら他の皆が探すでしょ。だから念のためにだよ)

「え、でも。…うん、わかつた」

前に言われた。誰かが見ているのかもしないと。あの時の女の子が言つていたことを思い出した。

一度旅館の方を振り向くとベランダにいたお父さんやノエルさんたちが何事かと窓の外を見ていた。

危なかつた。そのままセットアップしていただばれていたかも…。

(うん。だからもう少しだけ。…よし、人払いの結界展開。なの
は)

「うん。レイジングハート。セットアップ」

「スタンバイ、レディ。セットアップ」

「行くよ、レイジングハート」

「オーライマスター」

真っ暗な森の中で私は白いジャケットをはためかせながら空を飛んだ。

とある部屋での会話。

「くおー」「すぴー」

「「」、「」の轟音で寝ているなんて…」

「「」の一人。…結構団太いわね」

轟音で目が覚めてた御嬢様達はその隣でのんきにいびきをついていた二人の姿に呆れていた。

ツルギ視点。

ようやく流星が落ちてきたと思われる場所にたどり着くと、落下地点を中心につくできたクレーターの中に二つの人影が見えた。

それは体中に火傷の跡を見せたアルフとフェイト。その横に避来矢が地面に突き刺さっていた。

特にフェイトの方はダメージが深刻で白かった肌は火傷とあちこちに出来たみみず腫れでひどい状態にあった。致命傷を負つていな。いや、負わされていない状態でここに落ちてきたとみるべきだる。

「フェイト！アルフ！」

たまらず俺はそこに駆け寄ると、それに気づいたアルフはフェイトを抱えながら押し付けるように俺に避来矢を渡す。

「ツルギ、早く治療をしてやつておくれよー。」

「わかつてゐる。避来矢。八咫の鏡！」

「…機能復旧。…了解。ハ咫ノ鏡、発動」

避来矢の巨大な刀身を一抱えの巨大な鏡に変化させてフェイトを中心にして白い光を照射する。だが、それでは足りないと思えるくらいにフェイトは体全体に怪我を負っていた。

「…何があった。まさか管理局の人間とやりあつたのか?」

「違うんだ。あのクソババアが…」

クソババアて、誰だ?と聞こうとしたら、フェイトが体を震わせながら喋り始めた。

「…お母さんの悪口は言わないで。ただ不器用なだけだから」

「母さん?まさか、フェイト。お前、その怪我…」

「肯定。フェイト嬢、母君、…説教、受講」

「何が不器用さ。何が説教さ!あんなの拷問だよー私が割つて入らなかつたら死んでいたかもしれないじゃないか!」

避来矢から念話にも似た映像を俺に見せた。それはフェイトがジュエルシードを母親に渡した後の映像。光る鎖でフェイトを縛り上げ、悲鳴を上げても鞭で打ち続ける。その上、気絶したら、フェイトが前に見せてくれた雷の球を手の中で作り出しフェイトに投げつける。鞭を打つ。

その行為の途中で、アルフがツルギから受け取ったジュエルシードをフェイトの母親に投げつける。それに一瞬氣をそらしている間にアルフはフェイトの母親、プレシア・テスター・ツサの足元に置か

れた避来矢を拾い、フェイトと一緒に転移した。その行為に腹を立てたのかは分からないが、そんなアルフの背中にプレシアは雷の球を投げつけた。

アルフは気丈にもそのダメージを受けながらもここに転移してきた。

「…な、なんで。なんでここまで酷いことを…」

「…避来矢。ツルギには教えないでって言ったのに…」

八咫の鏡からこぼれた光はフェイトを完全に癒したが、体力や魔力までは回復できない。

避来矢が何をしたのか感づいたのかフェイトは弱々しく避来矢に言った。

「もう止めよう。このままどこか遠いところに逃げようよ、フェイト」

「そうだフェイト。お前、こんなに頑張っているのに、こんな仕打ちは間違っている！」

「…二人とも。ありがとう。でも、私がいなくなるとあの人は一人になるから…」

アルフは悲しみに。俺は怒りで打ち震えていた。

命がけで。そう、死んでもおかしくない状況があつたのに、それでもフェイトはバルディッシュを手に取りジュエルシードを捕獲しに行つた。

それなのに。フェイトは。

母親に頭を撫でられるわけもなく鞭で打たれ。感謝の言葉を受けるわけでもなく雷に焼かれ。激励の言葉を受けることもなく非難されて。

それでも母親をかばう。味方であり続ける。

「私は、フェイトに笑つてほしいんだ。フェイトが酷い目に合つのが辛いんだ。フェイトが悲しくなると私も目と鼻の奥がツンてなるんだ」

アルフは泣きながらフェイトを抱きしめる。体力のないフェイトはされるがままだが、そんな状態でもアルフの頭に手を置き慰める。

「……アルフは私と少しだけリンクしているからね。……御免ね。私が強くなるから。泣きたくならないくらい強くなるから」

「「「」」

フェイトの慰めにアルフは流す涙を増やした。
いつの間にか、フェイトの言葉に俺も泣いていた。

「……どうして、どうしてわかってくれないんだ！私はフェイトに幸せになつてほしいんだ！」

「「」めん。あと少しだから。だから、アルフも頑張つて」

「……わかつたよ。でも、約束して。これが終わったらフェイトはフェイトの為に頑張るつて」

そんな二人の会話を聞いているのが辛くなつた俺に避来矢から俺

だけにしか聞こえなこよつに最少の音量で話しかけてきた。

「…圭。ジュエルシード[反応]」

「…どいだ？」

「西南西、ニキロ、河原付近」

その報告を受けて俺は、フュイトに声をかける。

「フュイト。俺は別に泣いてもいこと黙つて」

「…え？」

突然声をかけられて困っているフュイトを無視して俺は避来矢に黒斗雲を起動させる。

「思いつきり泣けないやつが、思いつきり笑えるとも思えないからな」

「…ツルギ？」

「今日はもう俺たちの家に帰つて寝てなり

俺は黒い袴を羽織り、ジュエルシードの反応があつたところに転移する。

「…約束。…守れよ」

「田標座標、固定。転移開始」

俺はそう言い残して、フェイト達の前から消えた。

フェイトとの約束。ジュエルシード捕獲の協力に関する交換条件としてだしたもの。

一つは人を殺さない。

そして、もう一つは。

俺にとびっきりの笑顔を見せる。

人助けをしたサカサ。サカサが助けた人たちに「ありがとう」と、浴びる笑顔の洗礼はとてもうらやましかった。そんなサカサに憧れて、俺も誰かを助けて同じところに立ちたかった。本人には恥ずかしくて言えない。気まぐれによる人助け。それでも誰かを救えていたサカサに憧れて、フェイトにお願いした。

全部うまくいったらとびっきりの笑顔を見せてくれ

そうフェイトにお願いした後、すぐに顔が赤くなつた。無論フェイトも。あの時はお互いに知り合つて間もない。打ち解けていなかつたから、恥ずかしいだけだった。

だけど今は違う。本気で見たくなつた。フェイトの笑顔を。

そのためなら俺は…。

なのは視点。

キイン。

夜の森の上を飛んでいたらすぐ近くでガラスを弾く音が頭に響いた。この音は。

「つー、コーノ君、今の」

「これはジュエルシードの反応?！」

「え、どうしよう。どちらに向かつた方がいいかな?」

「…ジュエルシードからにじよう彼女の目的がジュエルシードなら彼女の方から向かつてくるだろうし。何かあつたとしても微弱になつたとはいってもこの世界の動物たちから逃げきれる。それに落ちてきた魔力の持ち主もいる。そつちは…。あつ、今、転移した」

一つの気がかりは無くなつた。残るは一つ。

「それじゃあ、ジュエルシードを先に封印してからツルギ君を探しに行こつか」

ツルギ君は白いジュエルシードを持っていたはず。それはレイジングハートで追えるから心配ないし、と考えていたらレイジングハートが異常を知らせてきた。

「れよりデバイスたちの声を日本語に変換します。英語力のない作者でいません。

「いや?なんか変な電波が?」

「マスター。彼の持つジュエルシードの反応。いえ、彼自身の反応もたつたいま、消失しました」

「…え？」

その言葉に私は思わず空で緊急停止した。

「並びに消失した地点から微弱ながらにあの 避来矢 と書っていた。鎧の反応を感知」

「ちよ、それはどうこうことなの？レイジングハート。それじゃあまるで」

「おそらく彼があの鎧の人なんでしょう」

「…なのは、慌てるのは分かる。でも、まずはジュエルシードからだよ。彼があの鎧の人ならなおむしら安心だし、話なら後から聞くことだつて出来る」

「そ、そうだよね」

ツルギ君も私と同じようにジュエルシードを集めていた？でも、それならどうして話に来てくれなかつたんだろう？それ以前にツルギ君も魔術師？もー訳が分からないことばっかりだよ。ジュエルシードを封印したら絶対にツルギ君とはお話をするのー。

「残念ながら私の必要はあつません」

え、なんで、レイジングハート？

「彼がたつた今、転移。ジュエルシードの反応に接触すると同時に封印をしました」

「嘘つーー？」

「な、発動して間もないこんな短時間で！」

「更に避来矢の反応消失。緊急警報！空間歪曲を感知！…来ます！」

レイジングハートの報告に息をつく暇もなく目の前の風景に突如黒い雲が立ちこむ。

その雲から私は目をそらわずレイジングハートを胸の前に持つて警戒する。

私の方に乗つかつていたコーノ君も緑色の円盤を出現させて私の横に空に浮かぶ。

そして、一陣の風が吹くと同時に黒い雲がはれてその中から黒い袴を身に着け、両手両足に銀色の防具をつけたツルギ君が現れた。

「…よし、なのは。嫌になるくらいにいい用だな」

「つ、ツルギ君だよね？」

「俺以外の何に見えるんだよ」

いつもと同じ口調なのにツルギ君の声は少しだけ震えていた。涙を流したのか瞳も少しだけ赤い。

「さ、君があの鎧の人なのかい？」

「そうだよ。ユーノ。と、こんな会話をしている場合じゃなかつた。今日は用件だけを伝えに来たんだ。…なのは、ユーノ。あの時。学校で手に入れたジュエルシードを俺にくれないか？」

「なー?」

突然の要求に目を白黒させたユーノ君。というか、私も白黒させているんだけど。

「わ、訳が分からないよ、ツルギ君…詳しく話してよ…」

「…一旦、降りようか。空を飛び始めたのは昨日からなんだ。話はそれからだ」

ツルギ君は地面を指した。そんな会話をしている間もずっと私から目をそらさない。そしてその眼は、なんだかとても悲しそうに見えた。

ツルギ視点

発動したジュエルシードは思念体と呼ばれる大きな毛玉に目玉と長い触手のようなものがくつついたものだったが、到着すると同時に黒斗雲から鎧に換装。天使両断キックを炸裂させて即封印を行つた。

相手側もいきなり目の前に現れた俺に驚いて動きを止めた。その隙についてのいわば不意打ちともいえるやり方で仕留めた。

「もう、戻れないな避来矢。後悔しているか?」

「否定。我、疑問、複数所持？疑問一、何故、主、何故、突貫、不実行？」

避来矢はフェイトの母ちゃんの所に突撃すると思ったんだが、正解だけどそれはまだしない。

「何故？」

「必要なだけジュエルシードを集めて、叩き付けるんだよ『あんたの娘はこんなにも立派だぞ！』てな。それと一緒にフェイトには悪いが一発ぶん殴らせてもらひつつ」

「疑問一、サカサ、用件、放棄？」

「フェイトの母ちゃんが使い終わつたジュエルシードをもらひればいい。元からそのつもりでフェイト達に渡していたし」

「疑問二、何故。……」

避来矢は言葉を詰まらせる。何故、今更なのは達に正体をばらすのか？ だろ。

「…肯定」

「お願いするのさ。あの時のジュエルシードを分けてくれつてさ。もちろんフェイト達のことは言わないぞ。一応犯罪者だからな」

「…主、要求、認可、想定？」

「まさか。そこまで俺も馬鹿じやない。これは宣戦布告も含んで
いるぞ」

なのははおそらく頑固者だ。事情も話せない俺の要求を呑むはず
がない。

ならば、もうジュークエルシードの探索はしないようにと頼んでもア
リサやすずか、家族の皆に危険があると知った以上止めようともし
ないだろ？が、同時に義理堅い性格でもある。と考えている。あ
の時のジュークエルシードを分けてくれるかもしねない。

〔希望的観測。可能性、一割未満〕

「〇・一パーセントでもやるさ。可能性があるのなら。それも受け
入れてくれない場合。その時から俺は…」

その後に紡ぎだした言葉に避来矢は納得したかは分からぬ。だ
けど、避来矢。俺の我儘に付き合ってくれ。

〔…主。思慮不足。先行キ、不明瞭。不利益的、思考〕

よく言われる。サカサやアリサ。最近ではフュイトにも馬鹿だつ
て言われているな。

〔だけど、我はあなたのような主が大好きです〕

避来矢。お前、言葉が…。

「あなたが今までいろいろなことを経験して成長していくよう
私も成長します。…だけど、いつまでもあなたがあなたであること
を私は望みます。我が主」

…ありがとう、避来矢。

決意は固まつた。いや、元から固まつていた。後は実行するのみ。

それから、しばらくもしないうちになのはの前に転移する。

目の前に転移して地面に降り立つと同時に黒斗雲を解除する。そんな俺になのはが空から降りてきながら質問をしてくる。

俺は答えきることだけを答えた。

避来矢の事。ジュエルシードを集めていること。その浄化を行えること。なのはが人に隠れてジュエルシードを集めていること。だけど、サカサの事。フェイトとアルフの事だけは教えない。教えきれない。

なのはの方は意外と素直に話してくれた。ジュエルシードはユーノがそれを発掘したこと。その護送中に何者かの砲撃を受けたこと。そして、ユーノからレイジングハートを受け取り自ら進んでジュエルシードを捕獲しているということ。そして、すづかの森の中で出会つたフェイトの事。名前は知られていないようだけど何やつているんだフェイト。

それからしばらくして、本題へと移る。

「で、どうだ。なのは。俺にジュエルシードを譲ってくれないか？」

「…譲れないよ。いくらあの時助けてくれたのがツルギ君だったとしても」

「それにあれは危険なんです。使い方を間違えれば大惨事になります。あの時、暴走したジュエルシードが町をボロボロにしたことはあなたもご存じのはずです」

わかつていいるさ。それぐらい。現場に直接いたんだからさ。淨化したジユエルシードは願いを曲げずに叶える。それは正しい心の持ち主が願つたらいいが、心が、性格がねじ曲がった奴に渡ればたちまち大参事の引き金になるだろう。フェイトの母親のように。ジユエルシードを集めて何をするつもりかは俺もフェイトも知らない。だけれど、それでもフェイトには、あいつが笑うには必要なんだ。

「…どうしても駄目か？」

「せめて何に使つかを教えて。ツルギ君が何をしたいのかを」

「…笑顔」

「え？」

「ある女の子のとびっきりの笑顔が見たい。それだけだ」

俺の言葉になのはは目を少しだけ大きくするが構わず俺は喋る。

「で、答えは？」

「…」めんね、ツルギ君」

まあ、その答えは想定内だ。

だから俺は何度も固めた決意をなのはに伝える。

「構える。なのは。さすがに自分は知つてゐるのに、何も知らない相手をぶちのめすのは俺の心情が許さない」

「待つて、ツルギ君。私はツルギ君と戦うために話しあつたんじやないよ」

なのはは慌てた様子で俺に言い寄りつとする。そんななのはを見て本当に申し訳なく思つ。だけど、なのは。俺は…。

「俺はお前の敵だ！」

「主の 決意 を確認。現時点をもつて、私にかけられたりミッターの一部を解除します。これにより、主。八咫の鏡を除く他の能力の同時使用が可能になりました。鎧の展開、黒斗雲の消費熱量は今までと変わりませんが、主のコンディション次第で一時間はフルで戦える熱量を有すようになりました」

避来矢から今までにないくらいの力強い言葉をかけられた。そして、不思議と避来矢を持つ右手から全身に力が溢れてくる。

〔新たな鎧を開幕します。御武運を。我が主〕

黒い光が俺を包む。そして、光は一秒もしないうちに俺を鬼武者、いや一人の姫^{フューリイ}のための武者の鎧を身にまとつた。

今までの鎧とは違い、背中の方に竜にも悪魔にも似た一対の銀の翼^{スカル}が生えた。

変化はそれだけじゃない。まず両肘から爪の先に至るまでの部分に血管を思わせるような銀色のラインが引かれた。さらに鎧の隙間からも白い光がこぼれている。そして、首から上の部分。兜の部分が無くなっていた。

鬼の仮面はもういらない。仮面越しにじやない、堂々とあの子の笑顔を見る為にも。

「マスターーー！」

「なのはー！」

レイジングハートとゴーノがなのはに杖を構えるようにせかすがなのはは未だに構えない。

「本当に戦わないといけないの。ほかに道はないの」

体は震え、それでも俺を真っ直ぐに見据えているなのはに俺も言葉をかける。

「話すに話せず、耐えるしかない。大好きなのに那人から冷たくされて、それでもその人に尽くしたい。その人の笑った顔が見た
い。でも、報われない、伝わらない」

「……それが笑顔を見たい子のこと？」

「……」

「……話してはくれないんだね」

なのはが杖を構える。

「いいよ、ツルギ君が勝つたらあの時のジュエルシードをあげる。

でも……」

なのはの足元にも魔方陣が描かれる。その魔方陣の光の強さはなのはの意志に比例しているようだった。そして、体の震えがいつの間にか止まっていた。真っ直ぐと俺を見据えた瞳の強さは魔法の光に負けないほどの強さを持っていた。

「だけど、私が勝つたらその子のこと教えてもらひー。」

「シユーティングモード！ セットアップ！」

なのはも決意を固めたようだ。その言葉に迷いはない。だから、

「…準備はいいな」

「うん。いつでもいいよ。ゴーノ君、手を出さないでね」

「なの、は？…わかった気を付けてね」

ゴーノは一度、躊躇つ素振りを見せたけど瞳に込められた強い意志に負けて俺たちから距離を取った。

「じゃあ、始めるか。俺と…」

俺は腰を低くして拳をなのはに向ける。

「私の…」

なのはが強い意思がこもった瞳と杖の先を俺に向ける。

「…全力全開！ 真っ向勝負！…」

互いに譲れられない意思のぶつかり合いが幕を開けた。

第十五話 激闘？ジユノルシード争奪戦！後編（後書き）

あとがき

たかB 「あ、あ、ああああああああああああああああああ

ツルギ「…ゾンビ…」

なのは「コメディにするつもりがいつの間にかシリアルになつたから大変だったみたいだよ」

レイジングハート「しかも今まで一番長いかもしないほど」
〔長文〕

避け矢「まあ、その影響の所為で私たちも普通に日本語で喋れていますけど」

たかB 「うあ、うあああああああ

ツルギ「まあ、今田はやつくつ休め作者」

なのは「シリアルに行きすぎなつよつに熱血入れてみたらなおシリアル感が増したんだよね」

避け矢「まあ、フォローしようとしたけど実はそれが蛇足になつただなんていつもの」とですしつ…」

レイジングハート〔ドンマイ作者〕

ツルギ「えーと、作者もそろそろ限界なんで次回予告」

なのは「合流！－て、何が？」

サカサ「ツルギよおおおお、俺は日本に帰ってきたあああああ
あ」

ツルギ「ぎやああああああ、その背中に背負ったバズーカを下
ろせえええええええ！」

ドオオオオオオオオオオンッ。

なのは「えーと、金平糖に核弾頭を打ち込んだ人？が来るの？」

第十六話 合流！！（前書き）

早く、シリアス感を抜け出したいのに熱血成分が多いのか
まだまだ二人の戦いは続きそうです。

そして、あいつがやつてきた。

ストーリーブレイカ
物語破壊者サカサ。

ついに日本に上陸！

第十六話 合流！！

「ディバイン」

「駄目！－レイジングハート！」

「うらあああ！」

ブオーン。

「アクセルムーブ」

「まだまだあああ！」

なのははレイジングハートの魔力チャージを強制キャンセルさせ、銀色の一線を回避する。続けざまに右下からの蹴り上げ、蹴り上げた勢いそのままに、まるで氷上を滑るバレリーナのように連続の蹴りが襲いかかる。

レイジングハートの矛先に桜色の球体が生じ、それを放とうする寸前に銀の手甲がなのはの顔を掠める。紙一重でかわしたものとの時聞こえた風切音、それには躊躇いがなかつた。

「レイジングハート、距離を取つて！この距離じゃ

「逃がさない！距離は絶対に取らせない！」

「プロテクション」

「ゴツ、ガガガツガガガガガガツガガガツガ！」

ツルギは銀の手甲をなのはに向けて叩き付けようとするがレイジングハートの作り出した魔法障壁に阻まれる。その衝突によって手甲と障壁の間にオレンジ色の火花が辺りに散つた。

ツルギはなのはに攻撃宣言をしてから、二メートル以上の距離を離れずに常に接近戦を挑んでいる。それはツルギが今現在、空中では格闘による近接攻撃しか持っていないことに由来していた。

「意地でも取らせてもうつよー・レイジングハートー！」

「プロテクション。広域展開！」

「があつ」

オオオオオオオオオオオオンツ。

レイジングハートから生じた障壁の後ろから更に強い光をはらんだ障壁が、ツルギの拳を受け止めている障壁を押しのけるようにツルギの方へと勢いよく広がる。

その勢いはツルギの体勢を崩しながら更にその障壁は膨張していく。それはなのはから生じた桜色の津波に押し流されているにも見えた。

「今！」

「バインド！」

ガチャイ。

巨大な桜色の障壁はツルギを遠くへ押しやると四つの光の輪となって形を変えてツルギの四肢を固定した。

「やるよ！レイジングハート！」

「オーライ、マスター！」

ビキニ

ツルギもなのはの次の一手を予想したのか全身に力を込めて力づくりで四肢の光輪を破壊しようともがく。光輪に亀裂が入ったがなのはとレイジングハートの方が一手早い。

「デイバインバスター！」

「フルパワーアアアアアアアアアア！」

ドッゴオオオオオオオオオオオオオオ！！

レイジングハートの矛先から、その身丈の一倍以上はある桜色の光線がツルギに向かつて放たれる。と、同時にツルギは光輪を破壊、顔の前で腕を交差し、なのはのディバインバスターを受ける。

「ウアアアアアアアアアア！」

ズッ
オオオオオオオン！！

ツルギがデイバインバスターに飲み込まれると同時に大爆発が起

「こり黒い煙が辺りに立ち込めた。

「す、少しやりすぎたかな？」

「…ッ、マスター！頭上に空間歪曲…」

「え？」

「これでええええええ！」

レイジングハートの声に従つて上に視線を向けると、顔にすすをつけたツルギの顔があつた。その顔の横には銀の拳がなのはに狙いをつけ、放たれる寸前だった。

ゴッガアアアアアアア！

銀の拳がなのはに襲いかからうとした際、レイジングハートは主の意思に反して勝手に動き自身を盾にする。

その際、手甲の起動を杖でそらすという大役を果たしたが、そらすという動作に生じた火花はレイジングハートの杖の表面を所々砕かれるという代償も生んでいた。

「レイジングハート！？」

「大丈夫です。マスター。すこし杖の部分を砕かれただけで、本体であるコア自体には何の問題はありません」

ズドオンッ。

なのははレイジングハートの状態に驚いている間に先程拳を叩き

付けた勢いのまま地面に落ちたシリギは再び空へと舞い上がる。

「… もひ、何で「こんなことになつちやうのかなあ…」

空へと浮上していくシリギに杖を向けて迎撃態勢に入るなのは。
それでも馬鹿ヅルギは馬鹿らしくただ、一直線になのはに向かって拳を振るひ。

夜空に浮かんだ星々と月の光は未だに桜色の球と銀をはらんだ黒の一線を照らし続けていた。

？？？視点。

どうして、あなたは私の願いを「これまで無事にできるのかしらね！」

「めんなさい。お母さん

私はどうしてもジュー・エルシードが必要なの！それなのにどうしてあなたは！

「めんなさい

あなたは私の娘。だから、やれるわよね。今度こんな無様な真似をしたら

…はい。わかりました、母さん。私がんばります

もひやめよひよ。逃げよひフュイト

…アルフ？

私はフュイトが酷い田に合ひつと悲しいんだ！

ごめんね。アルフ。私、もつと強くなるから

フュイトが悲しくなると私も田と鼻の奥がツンてなるんだ

私強くなるから、アルフが泣かないよひ、泣かないくらいに強く…

俺にとびつきの笑顔を見てくれよ

…ツルギ？

俺は、泣いてもいいと思ひフュイト

…どうして？

思いつきり泣けないやつが、思いつきり笑えるとも思えないからな

…私は泣いてもいいの？アルフ？私は強くなくてもいいのかな？
私は…

言い分けないでしょ！・フロイト！

か、母さん

まだわかつていないうねえ。まったく、あなたの使い魔は言うことも口クに聞かないし、ジュエルシードも口クに集められない。その上、

…や、めて。

現地民の訳の分からぬ人間とも関わり合いをもつて、それを皮切りにあなたは弱くなつた

お願いです。アルフを…ツルギを…

だから、これはあなたの為。だから、邪魔なものは消さないと
ね

やめて、やめてください。アルフは、ツルギは、私の…

ね

「…やめて、母さん！」

ベットの中で私はかけられた布団をはねのけながら起き上つた。

「…こりは？」

私が辺りを見渡すとそこは私が地球に来てからいつも寝ていた部

屋だつた。

「…サー、お田覚めですか？」

「…バルディッシュ。私は…」

私の枕元には金色のアクセサリー。バルディッシュが添えられて
いた。

「あなたがこの地球に来られて三時間がたつております。そして、一度はツルギと合流。避来矢の八咫の鏡を受けて怪我は完全に回復はしましたが、体力・魔力までは回復しきつておられません。アルフ様の転移で我々はツルギの家にいます。なので、決して無理は起
こさないようにお願いします」

バルディッシュからの報告で今自分の立ち位置を再確認した。

母さんの所へ報告。ジュエルシードと一緒に渡した避来矢の調査
が終わるまで部屋で待たされた。

アルフは母さんの機嫌が悪いことに気づいて避来矢の調査中に逃
げようとも言っていたが私はそれではツルギに悪いと言い、アルフ
を部屋から出した。

そして、

「…

「…サー」

「大丈夫だよ。バルディッシュ。これぐらいで」

泣いてもいいと思うぞ

あの時を思い出すと同時にツルギの言葉も脳裏をよぎる。バルディッシュに大丈夫だと言いながら、手に取るそこで気づいた。

金色のバルディッシュに映つた自分の顔に涙が流れていること。

「…泣いてない」

「…サー」

「私は、…泣いてないよ。」

私はバルディッシュを握りしめながらベットの上で丸くなりただ、嗚き声をこらえるかのように強く、自分の体を抱きしめた。

ツルギ視点。

「主。想定していたとはい、彼女の攻撃は予想以上です。ここにきて更に攻撃の威力、キレが上がっています」

「そうか、避来矢。ところで…。なのはに、宣戦布告したのはいいが、正直決め手がない。どうしたらいいかな?」

もう何度もなのはに近接戦闘を訴えているものの、まるでダメージはない。

先ほど、レイジングハートに傷をつけてからは、なのはの体を包むように桜色の球体が常に張られている。全方位型の障壁。というよりバリアだ。あれの所為でなのは近くに転移しても弾かれる。魔

力砲撃。転移、格闘、バリアに弾かれる、砲撃。以後、繰り返し。

「まあ、弱点というか欠点は見つけたんだけどな…」

なのはの砲撃時にはあの厄介なバリアが一瞬消える。おそらく、密室でバズーカを至近距離でぶつ放すようなもの。自分にまで被害が及ばないようだと無意識のうちにやっているのだろう。

「う、主！」

「バスター！」

「黒斗雲・転移！」

現在、山奥の湖付近。

俺は十回目となる転移で上空から放たれた桜色の砲撃から逃れると同時に、砲撃を放った直後のなのはの目の前に現れる。

「オラアッ！」

「フロント・プロテクション！」

バリアは砲撃の為に消えている。今しか攻撃は通らない。

そこに一秒も満たないうちに拳を叩きこもうとするがレイジングハートが自動的に桜色の障壁で邪魔をする。

ガガガガガガツ。バチイツ。

実はこの攻撃も三回目。最初の攻撃こそ障壁は間に合わなかつたが、なのはは本能的にそれを感知。今では正面という普通では考え

られない所からの攻撃にも対処できるようになつた。

その上、障壁に弾かれると同時に砲撃も放てるようになつていた。

「バスター！」

「またかつ！」

弾かれた瞬間に二メートルほど間を開けた短距離からの小規模砲撃。

これなら短時間。いや、ノータイムで撃てる上に自分への被害は少ない。

一撃目はレイジングハート補助で防ぎ。

一撃目で防御を自分の物として。再び、レイジングハートの補助で砲撃を付け足す。

三撃目でその二つを自分の物にした。

ドオオオオオオンッ。

爆風と爆炎から弾き飛ばされながら俺は目を回しながら避来矢の力を借りて空の上に立つ。

「主つ、無事！」

「…悔しいな。避来矢」

「…主？」

頭を振り、思慮を明確にする。戦いの経験値。空でこんな風に戦つたことはないが明らかに自分が方が上だと思つ。それなのに…。

「アクセルシユートー！」

なのは周辺にソフトボールくらいの光の球が四つほど生まれるとそれは弧を描きながら俺に向かつて飛んでくる。

「おおおおおお！」

ババババ。

俺に向かつて飛んできた光の球を拳で、足で、叩き潰す。が、その隙にはの砲撃が来る。

「バスター！」

「緊急転移！」

ドオオオンッ。

避け矢の補助で、先程自分がいた所から一メートルも離れていない所に転移し、砲撃をやり過ごす。

「…これが、…これが才能ついやつなのか…」

自分の横を通り過ぎていく桜色の光線を見て、俺は拳を固め直す。俺は自分自身の才能のなさに怒り、嘆いていた。

間違いなく高町なのはは空中に闘しての戦闘は自分より上であると。そして、それは今、戦っている中でも成長している。

「…王」

才能のない人間が扱うことのできる魔剣。避来矢。
だけど、経験だけなら同世代の人間の中では豊富な方だと思つて
いる。

高町なのはもこの世界の人間なら空でこんな風に戦う機会はそう
なかつただろう。それは今までの打ち合いで気づいた。だけど、今、
彼女は俺を押し始めている。

経験を押しつぶす才能。
（ツルギ）
（なのは）

「……でも、あんな啖呵を張つたんだ。何が何でも勝つ。だから、
……避来矢」

たとえ、どんなに無様でも……。
たとえ、どんなに不器用でも……。

「俺に力を貸してくれ」

……心が、……体が足搔いているつむは絶対に諦めない！

「もとよつそのつもりです。我が主。ですが、このままでは……」

「ああ、じり貧だ。何か策はないか避来矢？」

お前に頼りっぱなしで本当に情けないな、俺は。

「そんなことはありません我が主。……せめて、一度。一度だけで
いいんです。なのは嬢に接触できれば……」

……接触なら何度もしているが？
……弾き飛ばされているけど。

「すみません。言い方を変えます。私自身が彼女の生身に接触すれば彼女の心を折ることが出来ます」

つまり、なのはの顔か手に俺が触れればいいわけか。
なのはのバリアジャケットを見る限り、生身。の部分はそれぐらいしか見当たらない。

「肯定。しかし、あれでは…」

なのはの周りに再びバリアが発生した。あれでは近寄れない。
バリアごと破壊できる可能性のある天使両断キック。あれは地面を蹴る力が加えなければ十分に発揮できない。空中では使用不可。
ハ咫鳥で物を投げつけて破壊しようにも多大なメリットがある。
ここは山の中で電柱のような硬い物はない。投げつけるという動作のうちにディバインバスターで迎撃及び相殺。下手したらそのまま貫通、ハ咫鳥の球体でバスターが加速・増強でもしたら目も当てられない。

近づけば、バリアを展開。遠ざかれば砲撃。…砲撃？

なのはが砲撃を撃つときにはバリアが消える。
砲撃を終えるとバリアは戻る。
…それなら？

「…避来矢。こんな作戦はどうよ？」

俺は頭の中で描いた作戦を避来矢に相談した。

「…主！？…また、無茶苦茶なことを考えてくれましたね」

もしかして呆れてる? 避来矢?

「肯定。 われど、 それしかないようですね」

「じゃあ、 やるか

「これが黙田だったら意地でも逃げますからね」

「それは…」

なのはは相変わらず肩で息をしながらも強い目で俺を見据えている。逃がしてくれそうもないんだが…。といつも、逃げるという選択肢、俺は考えていなかつたんだけど。

「い・い・で・す・ね!」

「・・・はー」

まあ、 ここまで付き合つてくれているんだ。 それに…。

「失敗するとは考えてないからな」

「主の行動の前提に失敗の考慮はなかつたはずでは?」

俺にそれがあると一歩も動けなくなるぜ!。

「じゃあ、 やるか。 って、 これは…?」

ジャキイツ。

「拘束用光輪！」

やばい早く破壊しないと全力の砲撃を受けてお陀仏だ。せっかくの作戦も果たせなくなる。

「ディバイイイイイン…」

「おおおおおおつ」

「出力を上昇。及び、効率的な光輪の破壊部分へ伝達！…破壊！主、飛びます！」

バキイツ。

光輪からの束縛を逃れ、同時に黒斗雲を発動。なのはが砲撃をする前に俺はなのはの頭上、十メートルほどの上空。逆立ちするよう体制で転移した。が、待っていました言わんばかりのなのはの顔がそこにはあった。

「バスタアアアアアア！」

「くそお、避来矢いいいいいい！」

そうして、俺は拳を桜色の砲撃に向かつて銀の拳を振るつ。それでも俺の拳はなのはに届く、一步手前で。

ドオオオオオンッ！

桜色の光線に飲み込まれていった。

？？？視点。

真夜中の竹林に挟まれた道路で、白衣を着た男がコンビニ袋を片手に歌いながらのらりくらりと歩いていた。

「はーるばる来たぜ、海鳴いいいい」

いやあ、リオストーンと名付けたが正式名称はジュエルシード。願いを叶える石とはなんともマジカルなオーパーツですこと。…まあ、存在 자체は面白いが使う気にはなれんな。

「ちよ、もう夜も遅いんですから静かにした方が…」

「大丈夫だつて。一応、私有地だし、こんな夜道で人気がない竹林の道を歩いているのはその関係者。つまり、俺の部下か、ツルギ。ということになる」

「ツルギ？…ああ、前に言っていた、あなたの従兄弟ですね。ですが、他人に迷惑をかけることには変わりません。それに一般人も紛れ込んでいるかもしねないじゃないですか」

「大丈夫だ。一般人だとしてもせいぜいあおか」

「ストップ！それ以上は言わせません！」

はたから見ると男の独り言に見えるかもしれないが男の話し相手はちゃんといるし、返事も返している。それは後ろからトコトコと歩いてくる黒猫。

この喋る黒猫は、ある一件で白衣の男と知り合い、人の持つ魔力で生きながらえることが出来るアルフと同じ使い魔である。

一度は消えかけてはいたが、白衣の男と主従関係になることを条件に契約を交わして生きている存在なのだが、普通に接するように言われた。何でも、堅苦しいのは好かない。とのこと。

「…ところでサカサ。本当にジュエルシードの浄化を出来るんですか？」

「知らん！俺がやるわけではない！だから、経過を見に行くのだ！」

えっへん。と胸を張る白衣の男。

名をサカサ。裏の世界を知る人なら知る人ぞ知る有名人であり、壊滅させた組織は山のようにある上、様々な方面の技術を習得したツルギの従兄弟。避来矢を発掘しツルギに渡した人で、性格はかなり俺様な男である。

「まあ、大丈夫だろ。部下から聞いた話じゃ、この町で何かの生物テロが合つたぐらいだし…。まあ、死人は出なかつたけど怪我人は何人が出たぐらいだ」

「どこが大丈夫なんですか！ツルギが巻き込まれて怪我をしていたらどうするんですか！」

「とりあえず、…笑う

「なんで？！」

そんなふざけたことを話しながら歩いていくと竹林の奥に一軒の

民家が見えてきた。

「おお、我が愛しの従兄弟。私は帰つてきたあああああ…」

サカサは何処からともなく白衣の下から折り畳み式のバズーカを取り出す。

「なんだおもちゃ？！なんだそれ！バズーカを取り出す…？」

「なんとなぐだー」

詳しきは前回のあとがきをチェック

などとふやけでいたら、竹やぶから何やら配が…。フム。

「…面白こじとになつてこる、な！」

田標を家から後ろにあつた竹やぶに向かつて発射する。と、同時に竹やぶからオレンジ色の影が飛び出してきた。

「ほじゅつ。

ちなみにこのバズーカから発射された物の正体は暴徒鎮圧のために作つた超粘着性の接着剤。ドロッとした白い粘液がオレンジ色の影を包み込んだ。

「でやああああーうべ。て、なんだこれええええー…？」

「ふむ、狼女のコスプレか？」

ハロウインはまだのはずだが…。

と考えていたら、今度は家の方からも気配がしたので振り向こうとすると金に光る手錠が手足に一つの間にか装着されていた。

ガチャイ。

「…動かないでください」

「おいおい、今度は死神コスか?」

声から察するにツルギと年齢がそう変わらないくらいの女の子だ
ら。そして、首筋に当てられた黒い金属に黄金の鎌。

…参ったな。これじゃあ、身動きは取れない。ここは…。

「…フェイト?あなた、フェイトなの?」

「…!…誰、ですか?私の名前をどうして

「私は。リースです」

俺の後ろからついてきた猫が淡い白い光を放つ。その光は猫を包み込んで人型になるとそこから美人というより可愛らしいといった印象のショートカットの一十代の女性が現れた。

「…リース。お前の会いたかったフェイトって…」

その光景に後ろの女の子は悲鳴を上げることはしなかつた。が、少しばかりの動搖が鎌の動きから見て取れた。ちなみに俺はリースの姿は見慣れている。というか、堪の「ストップですよ」…はい。

「…はい。それじゃ、そこにいるのはアルフ?」

「え、ええ? ! な、なんでリースがここにって、か、体が動かな
いいいいいい!」

リースが接着剤の中でもがき、訂正。固まり始めた接着剤で動け
なくなつた狼女に目を運び、再び俺の背後に目を向ける。

「…ほ、本当にリースなの?」

サクッ。

「ちょ、ちょっと、今キレた。すこし鎌で俺の首の皮が切れた!」

「…フェイト。アルフ。少し見ない間に大きくなりましたね」

あのー、お一人さん。いい雰囲気の所悪いんだけど…。

「…これ、どうにかして!」

身動きの取れない俺とアルフの声が沈みかけた月夜の晩に響いた。

第十六話 合流！！（後書き）

あとがき。次回予告はやらない。

サカサ「いきなりオチを言うのか？」

と、サカサが首をひねっている傍で。フェイトとリースの抱擁し合っていた。

フェイト「リース！」

リース「フェイト！」

ザクツ。

サカサ「イッテエエエ！なに、まだあの時のままなの俺？！」

アルフ「もがーもがもが！」

バインド状態のサカサにバルティッシュが突き刺ささっていた。その横では固まつた接着剤で身動きが取れないアルフ。何故か顔が赤い。

フェイト「今までどこいたのリース？」

リース「南国の方よ。フェイト。詳しくは一次小説。リリカルなのか？黄金の瞳。バジリスク。を見てね」

サカサ「何気に宣伝か？作者よ？」

ナンノ「トヤラ」?

アルフ「むふーむふー」

サカサ「の使い方間違つていないか?それと、アルフ。お前、ちゃんと呼吸できているか?」

アルフ「…む、ん」

サカラ「ふむ。出来てないんだな？おーい一人とも。そろそろア
ルフがやばいぞ。顔が青い。ついでに言うと俺の首にもバルディツ
シユが刺さってそこから血が出ているんだが」

フェイト「リース」

リース「フェイト」

サカサ「やばい！『氣づいていない！』あ、意識が…」

たかB「まあ、あとがきにあるように次回予告はやりません。だつてここにいる一人は一人だけの世界に。もう一人はアツチに行つてしまつたので」

というか、もう一個の方を書き上げないと話が進まないからだろう？

夜空を背景に大きく映し出された笑顔のサカラ。

たかB「はー。まあじくその通りです。まあ、それを読まなくて
も楽しんでもらえるよ！」次のお話は書きまわよ」

なんで私もこの扱いなんだい？
と、同じように映し出されるアルフ。
たか B 「何となくです」

第十七話 たとえ火の中、水の中。砲撃の中…は、まつこ…（前書き）

ようやく更新できました。
間を開けてすみません。

もう一個のサイドストーリーを書き上げていたら遅れました。
なに？これは広告かだと？

はい、そのとおりです。

できることなら、この小説ともども感想ください。
もう、苦情でも何でもいいです（泣）

第十七話 たゞ火の中、水の中。砲撃の中...せ、めつこ...!

すずか視点。

「でもすいじい音だつたね。おかげで皿がさめなかつた」

「あの一人の國太わがついやましこわね」

アリサちゃんはふすまを挟んだ部屋の方を見て呟いた。すると、部屋の扉からお姉ちゃんと恭弥さんが入ってきた。

「あ、一人ともまだ起きている。早く寝なさい」

「もうこりお姉ちゃんだつて起きるじやない」

「まあね。それよりなのはちやんとツルギ君は?」

「あの一人なら隣の部屋で寝てしまよ。あいつたゞひやましい神経してゐるわ」

「何!...一緒に寝てこむだと...」じつはまこられな

アリサちゃんの答えに恭弥さんが慌ててふすまに手をかけようとしたらお姉ちゃんに止められた。

「落ち着きなさい、恭弥。今は深夜なのよ。それにツルギ君はなのはちやんこへんな」とはしないわ。あの子の好みはアリサちゃんやなのはちやんみたいな元気な子よつ、そうねえ...すずかみみたいに少しおとなしめの子じやないかしり」

そ、 そうなの！
わ、 私みたいに大人しい子が…。

「な、 何でそんなことが分かるんですか！」

「えー、 だつて初めてツルギ君と会つた時、 ツルギ君はとても体を消耗させていてね。 その時につぶやいた言葉が「ど、 どうせ死ぬなら畳座敷の上でしおどしの音を聞きながらぬるい緑茶を飲みたかつた」で、 言つていたの。 これはどう見ても純和風。 しかも落ち着いた空間を望んでいると見たわ」

な、 なんて年よりくさい。 はつ、 それじゃあ私はみんなよろ・・・。

軽く落ち込んだ私にアリサちゃんが背中に手を当てる。

「あー、 すずか。 落ち込まないでね。 例えそうだとしてもツルギはツルギが好きな人は…。 何というか…」

「…あー、 そうだつたな」

「ん？ なーに恭弥、 アリサちゃん。 人の顔を見て？」

「… いえ、 何でもないです」

恭弥さんとアリサちゃんはお姉ちゃんを見て言葉を濁らせる。
まあ、 ツルギ君はお姉ちゃんが好きだった。 というべきなのかな?
一応、 謄めはしたみたいだけど、 まだ好きでいる可能性もないわけじゃないし。

「それにしても二人はツルギ君のことをよく知っているようだが
？」

「そうね。どうせあの轟音。一応ノエルやオジサマの話じゃ、ち
よつとした土砂崩れが起きたみたいだけどこまでは影響がないみ
たいだし。皆が寝付くまで少しだけツルギ君のことを話しましょう
か」

「…そうね。ツルギがどれだけ馬鹿でその従兄弟のサカサがどれ
だけやっかいを今のうちにレクチャーしておくれ」

「前もつていうとツルギ君はとても馬鹿ね。いい子だけど。逆に
サカサさんは凄い人よ」

「そうね、すごい馬鹿よ。あいつは。サカサは変人ね」

ツルギ君は馬鹿。サカサさんは凄い変人。
いきなりすごい説明で始まった。

「私があつたのは南米にある、とある村の神殿でそこには宝が眠
つていてると言わっていたんだけど、ツルギ君はサカサにいわれてそ
れを村の人には許可を貰わずに持ち出したんだけど…。それは全部、
サカサさんの指示でツルギ君が捕まって鞭打ちの刑に処されている
間にサカサさんはその宝が昔のお米の保存食だという解説してね。
村人たちにその作り方を教えて最後には村の農耕文化を発展させて、
また違う国に行ってしまったんだけど…」

サカサさん。従兄弟が鞭打ちを受けている横で研究で…。
ツルギ君にもう少し優しく接しようかな?と考えていたらお姉ち
ゃんは言葉を一度切つて再度、言葉を紡ぐ。

「宝を盗まれた時の部族の皆が言つたの。『これで五度目だぞ。小僧。いい加減気付け小僧。わし等に確認を取れ。あのお前の連れはお前が捕まるたんびに横で笑つていたではないか』てね。サカサさんはツルギ君が捕まっている間に普通なら一ヶ月はかかる神殿の調査やジャングルの生態を三日で調べあげたらしいわ。ようはその部族の足止めをツルギ君にさせたかったわけね」

五回も同じことを繰り返しているなら、いい加減疑おうよツルギ君。

「まあ、そんなわけで人を信じすぎて痛い目に合つのがツルギ君で、それを見て本来の目的を果たしながら爆笑するのがサカサさんね」

…サカサさん。本当に厄介な人みたい。
と、サカサさんのイメージが何となく固まつてくると今度はアリサちゃんが話し始めた。

「じゃあ、今度は。まあ、サカサとツルギを擁護するみたいになるかもしけないけど私がイギリスで熊と間違えてツルギに獣銃発砲した後の話なんだけどね」

なのは視点。

ツルギ君の行動パターンは二つ。

ある程度離れていると突撃しながら近接戦闘。あまりにも遠距離になるとすぐ近くに転移してからの近接戦闘。

接近したら常に拳を振る。う。

以上の事から遠距離攻撃出来ないという私は真逆という戦闘スタイルだった。

バインドやバスターを使つたら必ずと言つていいほど私の近くに接近してくる。そして、その予測は的中した。

ツルギ君のデバイス？の避来矢はもの凄く頑丈でアクセルシュー
タは拳で叩き落されるがデイバインバスターなら弾き飛ばすことが出来る。

レイジングハートも学校で見た鎧よりも空を飛んでいる今の状態
は防御力が下がっている。たぶん、空を飛べるようになったから防
御力を落ちたのではないかという見解。

そして、鎧ではなく黒い袴だった時は更に防御力はないと判断し
た。つまり、ツルギ君の防御力は。

兜付き鎧 → 飛行機能付きの鎧 → 袴

ということになる。

たぶん、兜になると私のデイバインバスターじゃダメージはない。
だけど、ツルギ君もそれだと攻撃できないから兜なしの鎧で
今も戦つているんだろう。

常に遠距離からの攻撃だとツルギ君は避けたり転移して近接戦闘
を行う、これでは私の攻撃は当たらない。それなら…。わざと罠を
仕掛ける。

バインドした後はツルギ君にバスターを放つ。

でも近距離で止めて撃つと爆発の余波で私も危ない。その為、弱
めのバスターとなり決定打にならない。

遠距離からだと強めのバスターが撃てるのだが、バインドを力任せに碎いてバスターが届く前に転移で回避される。

中距離だとどちらも中途半端になる。というか中威力のバスターを撃てるがツルギ君を吹き飛ばす程度でダメージは少ない上に

下手したら攻撃される恐れもある。

そこでバインドした後はバスターのチャージ時間を長くする。

ツルギ君は遠距離でバインドされそれを碎くと必ず私のすぐそばに転移してくる。それは正面だつたり側面や足元だつたりするが転移される直前にはレイジングハートがそれを探知してくれる。そこに長めにチャージしたバスターを打ち込めばツルギ君に大ダメージを与えることが出来る。

正直、あまりにも近づきると今までタメーションを負ふかツルギ君の方がダメージは多いと判断したレイジングハートを信じて私はその機会を待つ。そして、

「デイバイイイイイイイ」

「くそお、避来矢いい！」

「バスタアアアアアアアアア！」

私の思った通りに事が運び、ツルギ君に強めのデイバインバスターを至近距離で当てることに成功した。

すずか視点。

ツルギ君はサカサさんと共に誘拐グループの居所を強襲した。といふ所でアリサちゃんは言葉を一度切つてふすまの向こうを一度覗いた。

ツルギ君が起きていなかを確認するとソファーの上に座り直して言葉を紡ぐ。

「そこでサカサの立案した作戦は実にシンプルだったわ。正面からツルギに向かわせる。その剣を狙つた誘拐犯をはるか後方からスナイパー・ライフルで狙撃する。もちろん、私とパパの援護もかねてね」

「単純すぎるでしょ！もう少し搖動とか、囮とか別の手段があつたはずじゃ」

「ううだぞ！それにツルギ君自身そんなに強いわけでもないだろ？」

お姉ちゃんと恭弥さんは驚きのあまり声を荒げてしまひ。隣でツルギ君たちが寝ていることに気づくと慌てて深呼吸して気分を落ち着かせる。

私も思わず声を荒げてしまいそうになるが口を押えて何とかこらえた。

「で、でもそんなことしてよく無事だつたね」

「無事じゃなかつたわよ？私たち親子は無事だつたけどツルギは左腕と背中に銃弾を受けて摘出に半日ほどの手術を受けてたもの」

アリサちゃんはため息をつきながら補足してくれる。

「うーな、なんで……」

「だつて、いくら援護射撃がるとは言つてもそれは致命傷から援護するだけだつたんだもの。私たち助けられないかもしけない、代わりにツルギ自身は絶対に無傷で済む援護射撃。

私たちを絶対に無傷で助けられる。だけどツルギ自身は無傷では

済まない援護射撃。ツルギは迷わず、後者を選んだみたいだつたし

…

アリサちゃんはやや顔を赤らめて話してくれる。

女の子としては嬉しいかもしけないけどそれは無事だつたから。もし、ツルギ君に何かあつたら逆に悲しんでいたかもしれない。

「でもね、ツルギはサカサを…。ううん、ツルギは信じられるものがあればどんなところにだって突き進んでいくわ。それこそ、火の中、水の中。てね」

そこで再び呆れた顔になつてふすまの向こうで寝ているツルギ君の方に顔を向けると再び溜息を吐く。

そして、今日一番の笑顔を見せた。

「あの時のツルギはサカサのことを本当に信じていた、心の底からね。だからこそ周りにどんなに怖い人や銃があつても真っ直ぐに私に手を伸ばして助けに来てくれた。…本当に馬鹿みたい。というか馬鹿でしょ」

意地悪な、それでいて嬉しそうな笑顔に私は少しだけアリサちゃんに嫉妬したのかもしれない。

なのは視点。

ドオオオオオオオ。

いつもより長めにチャージした分バスターは数秒間放出され続け、

その光の中で拳を突き出したツルギ君の姿は光の中に埋もれていった。…はずだつた。

オオオオオオ。

桜色の景色に黒い影が見えた。その陰はどんどん色を濃くしていく。そして、

「捕ま、え、たああ！」

その黒い影から銀の手甲が突き出していくと私の顔を掴む。そして、桜色の光の中から一番防御力の低いボロボロの袴姿で全身を焼かれたツルギ君が飛び出してくる。

「やるぞ避来矢！」

「認識阻害、開始！」

信じられない！？ツルギ君は砲撃中の私のディバインバスターの中から這い出てきた。

そこで初めて気づいた。ツルギ君は元からこの手段で私に攻撃を加えるつもりだつたことに。

ディバインバスターを撃つ前だと強制キャンセルを行いプロテクションで弾かれる。

その直後も同様。それなり…。

ディバインバスターを撃つていてる最中ならプロテクションを使わることもない。しかも、射線上以外からの攻撃だとプロテクションを張られるかの所為も考慮して、ディバインバスターの真正面から突っ切ることによりプロテクションは張られることがない。

「システムに強制介入？！？」マスター、エ、ラー発、生」

「れ、レイジングハート？！」

右手に持つレイジングハートに魔力を込めようとしたが、何故か私は左手に魔力を集中していた。そして、いつの間にか、ツルギ君は右手で私の顔を、左手でレイジングハートを掴んでいた。

「バリアジャケット、強制解除！レイジングハート、強制、待機！試行！」

キインッ。

私の身にまとっていた白のバリアジャケットは解除された。そして、待機状態になつたレイジングハートはツルギ君の銀の手甲の中に納まつた。

「え、そ、そんな…」

「避来矢の認識阻害。上手くいったな」

「主、一度とこんな真似はしないでくださいね。いくら推進力が一番あるとはいえるような砲撃に耐えながら突き進むという猪みたいな真似は。今回はずまくいったといえ」

ツルギ君は右手でがつちりと私の頭を掴みながら意地悪な表情を見せ、手甲から聞こえる声と合わせて私に言つ。

「〔俺達の勝ちだ。なのは（嬢）〕」

「〔わわら〕

ツルギ視点。

あれからなのはを地面に降ろすと、ふくれつ面になりながらもレジングハートからジュエルシードを一個を取り出し、俺に渡してくれた。

「…むー

「そんなに唸らないで、なのは」

フロイトの事情を知った後だからどうやら変なテンションになっていた。宣戦布告だけで済ませるつもりだったのに目の前にジュエルシードがあるとわかつたら、いてもたつてもいられなくなり勝負になっていた。

つい、いらっしゃしてやつた。反省しています。といった感じか？

「…ずるいよ。強制解除だなんて」

「そういうな、避来矢が言つにはなのはの生身とレイジングハートに触れた状態じゃなきゃあんな荒業は使えなかつたんだし」「

避来矢のことを信頼して俺はなのはの砲撃の中に飛び込んだ。

避来矢の 黒斗雲 は防御力がない代わりに推進力。スピードと滞空制御が鎧形態の状態より秀でている。

その能力を信じて桜色光線の中に飛び込んでいった。

巨人に後ろと前からすりつぶされるような痛みが襲つてきたがそこは我慢して突撃を行つた。結果として俺の無謀な行動と避来矢の

作戦が成功していたからいいものの失敗していたら逃げていたかもしれない。

ちなみに避け矢の作戦は。

避け矢の認識阻害は人から魔力、そして機械^{デバイス}まで騙し通せる。まず、レイジングハートに接触してなのはが行っていた強制キヤンセルの応用で、強制待機状態にする。これは認識阻害。つまり、避け矢がマスターのなのはだと思わせて待機状態にするものである。しかし、それだけでは待機状態にはもつていけない。

なのはが直接魔力をレイジングハートに注いでいる間はなのはとの回線が残っている。だから、なのは自信にも認識阻害をかける必要があった。

なのはに認識阻害をかけて魔力による接続。ようは右手に持ったレイジングハートを左手に持っていると認識させて魔力の注入を阻害。そして、回線が途切れた所で主導権を奪取。それを行つたうえでレイジングハートに強制待機を命じたということになる。

そして、待機させた場所が空中。いくら才能があり、頑固者のなのはとはいえ空を飛べなくなつた以上、降参の道しか残されていない。

「もう一回、もう一回だよ。」

「だーめ。いい加減帰らないと明日というか今日が辛いよ。士郎さんや恭弥さんたちに悪いよ」

「うー、でもー」

「これ以上」「ねるのならバラすよ。魔法少女だということ。アリサやすずかにも」

「そ、それは駄目！」

「じゃあ、諦めて。まあ、ジュエルシードをまた取りつようになつたら勝負するかもしれないから」

「うー」

再び唸りだすのは、ちなみに彼女は俺の背中におぶられている。いきなり空に放り出されたような状況に陥つて腰が抜けた様子。そして、隣でトコトコと歩いてくるおじ「フューレット」のコーンに声をかける。

「そうか、これはお前たちが発掘したのか。なんか似ているな、避来矢と」

「そうですね。それより僕はこのジュエルシードがとても気になります」

コーンの前には白いジュエルシードが浮かんでいた。
浄化したジュエルシードを見てみたいといつので避来矢から取り出してコーンに渡すとコーンはそれをプカプカと魔法で浮かべる感じと眺めていた。

「…確かに魔力は安定しているし穏やかになつていて。でも、これをどこに隠していたんですか？夕食前に自販機の前で小銭を取り出そうとした時に偶然なのが見つけましたが、僕が見に行つたときには財布の中にはありませんでしたよね？」

「ん？ああ、それは畠の中」

「へ？畠の中って？」

「俺たちの世界では麻薬の持ち込みの際には胃液にも溶けない袋に薬を入れてそれを飲み込んで体の中に保存。俺の場合は半日も持たないから夕飯前に吐き出して、その時の胃液の苦みを消すために自販機でお茶を買った。そしたらそれを見られた。というわけだな」

「……この世界の人達はそんなことが出来るのなのは？」

「出来ないよつ、といつかツルギ君何ができるの？」

「……海外でな。サカサが美味しいピラフの店があるとか言って食わせてくれたんだけど。その中にとある組織の秘密金庫の鍵があつてな。その組織が飯食つていてる途中で襲つてきた。それを撃退したらボディブローを食らつた。それが始まりだった」

「…………」「」

「次はまつまいピザ屋があるとか言つて」

「「もつこいからー。」」

俺が声をかすれさせながら説明しようとするとい人は話を切り上げた。

「うう、泣いてなんかないんだからね。」

それから、ユーノと話し合つてゐるといの淨化したジュエルシードを調べたいと言つ出した。

「……じゃあ、もう一個のジュエルシードと交換なら……。あと、このいとは誰にも言わない。俺達だけの秘密にすむ」と

「えーと、ユーノ君？」

「…仕方ないか。もうすぐ時空管理局の人達も来るだろ？し。それまでに調べられるだけのことは調べたいし」

なのはがユーノに近づくのと、いつ視線を向けるとユーノはしぶしぶ頷いた。

「じゃあ、交換。なのは」

「うん。レイジングハート、もう一個出してくれる」

「プラットアウト」

なのはのポケットが光り出すとそこからジュークエルシードが一つ飛び出でくる。それは俺のポケットの中にある//一一避来矢に吸い込まれていった。

それから、夜が明ける前に何とか旅館にたどり着くとユーノ作り出した幻に合流。

忍さんやメイドさんたちより早く起きたのでばれる」とはなかつたが、昨晩の戦闘の疲れを温泉に入つて取ろうとしたらそのまま眠つてしまい、溺れかけた。

女湯では同様になのはが溺れかけた。

直前までユーノと念話していくなかつたら、その異変に気づいたユーノが助けを呼ぶことなく小学生一人が被害者の湯けむり事件に発展しているところだった。

昼過ぎに温泉旅行を終えて、夕方の翠屋の前まで送つてもうつ。これで一件落着かと思っていたのだが… そつはいかなかつた。

「あら、誰か来られましたよ、サカサ？」

「んー、おお、ツルギ。元気にしていたか？」

「…ツ、ツルギ?…」、これはその

「なあ、いつまでこれを続けるんだい?」

「…なにやつてんだ、サカサ?何があつたんだ、アルフ、フェイ
ト?」

家に帰ってきた俺が見たもの。それは…。
メイド服を着たアルフと同じくメイド服をつけた猫耳をつけたフェイト。

フェイトは猫耳装備のメイド服を着た状態を見られて恥ずかしいのか顔を赤くしてアルフの後ろに隠れた。反対にアルフは疲れた顔をしてサカサに文句を言つていた。

そして見慣れないショートカットのお姉さん（もちろんメイド服着用）が撮影の助手を務めながら、一階の居間で撮影会を行つていた。

俺はお土産に買つてきた温泉まんじゅうをその場に落として目の前の光景に呆然としていた。

本当に何があった?

第十七話 たとえ火の中、水の中。砲撃の中…は、もつこ…（後書き）

よつやく戦闘パートを抜け切れたよ。

あとがき。

ツルギ「いきなり本音がこぼれたな。しかも、『あとがき』の前
「」

たかB「…だって、やつとサカサの一件が片付いたと思つたらお
前はなのはどガチンコバトル中だつたし、ギャグは書きたくてもか
けなかつたし…」

なのは「…結局私が負けちゃつた。まあ、あの流れで負けたら駄
目すぎるもんね」

アリサ「…なんか久しぶりにここに来た気がするわ」

ツルギ「お帰り。アリサ。よくもまあ俺のことを馬鹿馬鹿と言つ
てくれたな（涙）」

アリサ「頑張できる」

ツルギ「出来ると思つていいのか！出来るわけないだらつー（大
泣き）」

なのは「言い切つたーまあ、今回まつツルギ君とアリサちゃんの思
い出話も交えていたしね…。無印編、何話で終わるか」とやつ
「ひさびさ

アリサ「下手すると30話以上

たかB「考えたくもない！」

ツルギ「いや、考えろよ！」

アリサ「でも、このままだとなのアレ。魔法少女の必殺技の代名詞と言われるアレを受けるのはフロイトじゃなくてツルギになりそうね」

ツルギ「！？」

たかB「まあ、予定としては

(グッ)

ツルギ「今、誰か握り拳を握らなかつたか！？」

ソンナコトハナイヨー。

ツルギ「作つてゐる、絶対に喜んで握り拳を作つてこりやー！」

なのは「次回予告 KY対KY 前編！」

アリサ「あら～もう管理局執務官が来るの？でももう一つのKYつて？」

ツルギ「（ Pruitt）」

何故かアリサと目を合わさないツルギ。それを見たアリサ

はああ、あいつかと頷く。執務官もん。どうか死なないでね。ヒア
リサは無言で十字を切った。

たかB「どうわけで次回をお楽しみに」

第十八話 KY対KY 前編！（前書き）

久しぶりに
力いっぱいのコメティイー！

第十八話 KY対KY 前編！

場所は夕暮れ時の公園。

そこには一人の少年と一人の少女がいた。

「…なのは、俺を騙したのか？」

「ち、違うよ、こんなことになるとは思わなくて…。ク、クロノ君。ツルギ君を離してあげて…」

体中に無数の焦げ跡を作りながらも、ツルギはなのはとトゲ付きロープにも似た黒装束の青年を睨みつける。

すでに避来矢の残存エネルギーは底をついたためベースである大剣の状態でロープの少年の手に握られていた。

「それは出来ない。彼の行つたことは全てが犯罪だという自覚があり、僕等管理局のことを君等から知らされていたにもかかわらず、敵対していたことからも明白だ。何より不確定要素の高いこの武器も油断ならないからね」

時空管理局執務官クロノ・ハラオウンがツルギに向かつて杖を向ける。

「では、君が所属している組織やグループ。仲間の数と構成。そして…コードダブルオー。とはどのような物なのか喋ってもらおうか？」

「コードダブルオー。

それはサカサガジュエルシード探索の為に編み出した作戦術であ

る。

「これを喋れば大幅にこちらが不利になるばかりか、それを利用して彼らに利用される恐れがある。

「… 言えるかよ」

ツルギはクロノを睨みつけながら三日前に発動させた作戦コードダブルオーを決して言つまいと胸の中で誓つた。

三日前。

ツルギ視点。

「つまり、少し前までフュイトとアルフに戦い方を教えていたお姉さんで、サカサに助けられた恩返しの為に使い魔契約を結んだと？」

「はい。その節は大変な目に合わされ、お世話になりました」

お礼と皮肉を言われてしまつた。すいません。うちの従兄弟サカサが。悪気や茶目っ氣はあつたと思いますが隕石が落ちてきたと思つて諦めてください。

サカサがパソコンをいじつている背中をちらりと見た後に再び、リニスさんに視線を戻す。

「あの、といひで何でメイド服なんかをつけていたんですか？」

「ええ、実はサカサが言つには『こついう搜索は人海戦術が一番。だが、しかし。ここには高町という名の裏に通じる人間がいる。表

向きにも裏向き的にも大げさなことは出来ない。しかし、その間。且つ、それを見た人たちには声をかけづらい上に関わりたがらない作戦がある』とか仰つてましたが……私には見当がつきません。ただ、コードネームはダブルオーだとか

「

某機動戦士作品。リリカルなのか？に介入する！なわけあるかああああ！

てか、このツツコミ自体がなんだ？

などと頭の中でセルフツツコミを入れているとサカサがフェイトに何か言って台所に向かわせた。かちやかちや。と、なにやら紅茶のセットケーキをお盆に乗せている様子がうかがえた。

ちなみにリースさんは狼モードになつたアルフの毛づくろいをしながらちゃぶ台を挟んで俺と談話していた。：残念なことにメイド服は既に脱いで白の長袖シャツとロングスカートをつけていた。俺的にはアルフとリースさんのメイド服姿をもつと見ていたかつたのだが……。

「そう、それだよツルギ君！それが、その気持ちが今回の作戦に必要なのだよ！」

いや、俺は何も言つてねえぞ、サカサ。あと意味も分からん。ちなみに振り向いたサカサの顔には俺と同じ数だけ、青あざが数個できていた。

その理由。

帰宅後にこれまでの経過を話したら、

「一週間近くもこの町について、それだけのチャンスがありながらものに出来ず、こちらの素性をばらすとは馬鹿だろお前！このクズ！」

「うう、で、でもジュエルシードはフェイトの母ちゃんの所にあるのも合わせて九個はあるし」

プレシアの所に六個。うち一個は未浄化ジュエルシード。避来矢の中に三個の計九個。

しかし、サカサとしてはその浄化したジュエルシードが見たかつたのでござ立腹だった。

あれだけの事があつたのに生きているだけでも儲け物のはずなのに怒られていると、

「まあ、俺は一個。あ、いや、今は一個だがな。わっはっはっは

「おりやああああ！」

からからと笑うサカサの顔が俺の拳で歪む。
先にゴングを鳴らしたのはそっちだ！

それから一十分ほど従兄弟喧嘩をしてリースさんの自己紹介を交えながら今の状態という理由だ。

「それで、その内容とはなんなのですサカサ？私たちは全然理解できないのですが」

「ふつ。先人は言つた『考えるな、感じろ』と。フェイトちゃん、カモン！」

それは先人なのか？明らかに未来の人人が言つたような？といふかさつきからサカサの発言に危機感を覚えるのは何故だ？

「全然わからないんだけど。…なあ、ツルギ、リース。本当に信

用できるの」いつ？「

「「信用は出来ないけど、結果は残すから信頼はできる」「

アルフの質問に俺とニースさんの声が重なる。

「…意味が分からないよ」

うん、俺もよくわからないよアルフ。と答えようとしたらサカサ
が何やら力チューシャのような物を俺の頭に着ける。え？なにこれ？

「サカサ、なんのつも」

「お、お待たせしました。」「こ主人さみや」

…はっ！俺は何処！？今は誰！？

サカサに頭に着けた物について質問しようとしたら目の前にいた
とても可愛らしい物体が、得体のしれない何かを照射して俺の時間
を止めた。その威力は絶大で混乱の効果も發揮していた。

「あ、あううう。か、噛んじやつた。……て、なにー?い、いきなり抱きついて、ツルギ!?て、リニスー・アルフまで!?」

サカサの指示で、一人だけ未だにメイド服のままのフェイト。E：猫耳（魅力+3）。

顔を赤らめたフェイトを俺、リニスさん。いつの間にか人型に戻ったアルフが鼻血を出しながら三位一体のスクラムを組み、フェイトを抱きしめていた。

「――はっ！俺たちは（私たちは）一体何を？！」

気が付けば俺たち三人は皆、鼻血を出しながらもフェイトの頭を撫でていた。そこに理性でもなければ感情もない。ただ本能に従つてフェイトをみんなで可愛がっていた。

「ふつふつふつふ。それが日本が生み出した未知のエネルギー。

萌え というのだ」

「ど、どういうことですか？」

「そうだよ、サカサ！？あたし等に、いや、フェイトに何をした！？」

「…何だ、この怒りや誇り、信念？いや、そのどれも違うのに体が勝手に動く。感じたことのない力が体、いや心の底から湧きあがつてくる！？」

「あ、あううう」

上からサカサ・リニスさん・アルフ・俺・フェイトの順番。

顔を赤くしたフェイトを見ただけで俺たち三人の中にある何かが膨れ上がった。

「諸君も感じ取つただろう。それが萌えであり、今回の作戦の要。感じただろうその胸に湧き上がる力。いや、感情を。…この作戦はそのエネルギーを己が主力として戦うAKI A戦士たちの力を借りるのさあああああああああ！」

な、なんだつてえええええええ！ × 4。

と、心の中で絶叫する俺達。

内、一名まだ頭を撫でられている。

コードダブルオー。

それは大(〇)きな、お(〇)友達作戦。の略である。

この日本には雨や風だけではなく、たとえ殴られようとも骨を折られ内臓を潰されようともその 萌え なる心を秘めた力で目的を達成するスーパー民族。

普段は一般市民として混じっているがそれに通じるものがあるればその戦闘能力は跳ね上げる。それを極めた者は、人を（人としての生活費を）捨て、獸を超えた（野生獸が目を覆いたくなるほど）異様さを持ち、時に神として崇められる存在である。

そんな彼らの情報ワーク及びフットワークの高さは、思わず世界最高レベルの技術を収めたサカサでも唸らせる。

そんな彼らの協力を得て、ジュエルシード搜索を行おうという作戦である。

なお、この作戦に参加することが出来るのはサカサの厳選した上で行われるチャットを通した面接を通過した紳士たる猛者たちだけ。

() 内の事について、サカサはあえて喋つていません。

「その為にもフェイトにメイド服をつけてもらつたのだよー。」

「ば、バ力な。確かにそんな彼らの協力を得る事が出来れば、まさに鬼に金棒。サカサに核ミサイル発射スイッチだ。なんと心強い。だが、しかし…。」

「そんな彼らが事情も話さない俺たちに協力をしてくれるのか?」

「するととも!奴等は確かに目的のためにならどんなことでもやつてのける。だが、同時に紳士でもあるー。」

不安を滲ませた俺の言葉にサカサは力強く答える。

「ど、どにそんな根拠が…」

「根拠だと?…ツルギ、それはお前もわかっている。いや、感じている筈だ。それを教えてやるーフェイトよ、俺の教えた無条件降伏の必殺魔法を唱えるのだ!」

「え、えーと、その、あう。あの、あのね、ツルギ」

フェイトは顔を赤らめながら上田づかいで最強魔法を唱えた。

「お、お兄ちゃん。わ、私のわ、お願いを聞いてくれたら、う、うれしいな」

・

ゴバツ。

これはツルギの悲鳴です。

「……はつ、俺は一体？」

気が付けば次の日の朝になっていた。

仕合の日は朝一から晩まで、何の調停がなく、

今日。というか、一日中フェイトが俺・アルフ・リースさんの三

人と目を合わせるたんびにびくついていた。何があつたの？

ちなみに今日は連休最後の日。すすかからメールを見てサカラにすずか襲撃の件を相談するとそこはリースさんに向かわせるはずだったのだが、俺とアルフ同様に貧血だったのでサカラが直接月村家に行つてなんとかしてくるそうだ。

夕方ごろになつて、月村家の自動セキュリティーレベルを最大にまで改造してきたりしい。一個中隊を引き連れていかないと突破できないレベルにしたらしい。ここは本当に法治国家日本なのか？さて、貧血でダウンした三人を放置、というか三人から逃げ出すごとにジュエルシー^ド探しに言つたフェイトは夜まで頑張つたけど成果を上げられずとぼとぼびくびく帰つてきた。

さて、明日は登校日だ。何故か学校が遠くに感じてしまう。

サカサにそれを話すと明日にはここを引っ越すそうです。俺が正体をばらしたので高町の人、いずれこちらの世界に来るだろう管理局対策の為、拠点を動かすとか。学校が終わったら直接そこに向かうことになった。

なんか、すいません。

ちなみに今日の夕飯はサカサが作ってくれたレバーラ炒めだった。

そんなバカみたいな一日を過ぎてしている間にも俺たちの敵。は言い過ぎか？

とにかくなのは達にも動きがあったことを俺たちは知らなかつた。

なのは視点。

今日も日が落ちてから夕食を取った後にユーノ君と一緒に空からジュエルシードを探していると、目の前の空から青白い光が出てきた。

その光に驚いていると中から一人の男の子が現れた。

「時空管理局執務官のクロノ・ハラオウンだ。君がユーノ・スクライアでいいか？」

光の中から出てきた男の子は私ではなく、まずユーノ君の方に目を向けて口を開いた。

「は、はい。僕の申し出に答えてくれてありがとうございます」

ユーノ君は少し慌てた口調で答えた。私も急いで自己紹介をした。

「た、高町なのはです」

「……ん、失礼だが君はこここの世界の人間か？」

「は、はい。そうです」

「彼女は僕の協力に答えてくれた人です」

「……ふむ。詳しいことはアースラで聞こいつ。と、思つたが今日はもう遅いだろ？から、彼女の方は明日の空いている時間にそちらからもう一度声をかけてくれ。ユーノ。君の方は今からでも来れるかい？」

「はい。出来るだけ早くこの事件を解決したいので僕の方は構いません。けど……」

ユーノ君は私の方をちらりと見て言葉を濁した。その様子を見てクロノ君は顎に手を当てて考える素振りをすると、何か思い立ったのかユーノ君の心情を察した。

「……ああ、探索の方ならうちの局員が隨時行つているからござという時にも対応できる。なんなら、彼女を家まで送つた後にでも連絡してくれ。僕はその間この周辺を探索しておくから」

「あ、ありがとうございます」

こうして私、高町なのはは管理局のクロノ君と会合い、その明日、アースラへと赴くこととなつた。

そして、その日を境に本格的にジュエルシードと向き合つていいく

ことになつた。それはツルギ君の完全な敵になるといふことを意味していることを私はまだ知らなかつた。

第十八話 KY対KY 前編！（後書き）

あとがき

ツルギ「あれ？ KY要素がないんだが……」

サカサ「それは次回に露見するみたいだぞ」

フェイト「それにしても早い命流だね。まあ、そうでもしないとパワー・バランスが……」

なのは「5対2はさすがに無理なのーー！」

サカサ「そうだな遠距離砲撃が主体のなのはに補助のユーノだけで俺らを相手にするのはちょっとつきついし。ここでせめてクロノを足さないと原作ヒロイン陣やばいよな」

リース「フェイトとツルギ近接戦闘型が2名。近代兵器の使い手、文字通りの砲撃^サ要員が1名。アルフとリース補助が2名。あ、私は補助の方ですよ」

なのは「フルボッコなのーー？」

ツルギ「あ、いや、一応。サカサはしばらくはサポート要員に回るらしいぞ。リースはその補助をするから、実質3対3・・・かな？」

？」

ユーノ「いや、彼のサポートはある意味前線より恐ろしいものを感じるんだけど……」

ユーノ「それにしてもダブルオーで、」

サカサ「なにかね？不服かね？」

リース「恐ろしいですね日本」

ツルギ「あの撮影した写真で、もしかして…」

サカサ「無論アップした。ちなみにツルギに着けさせた頭のアレは小型マイクとカメラが付けたので、あの時の映像と音声もアップしている。安心しろ、いくら厳重にプリントしない限り、保存しようと三日後には綺麗に消えているから」

リース・ツルギ・なのは・ユーノ「「「「そんな！もつたいない

フヒイト「みんな?...」

サカサ「じゃあ、この場を收めきれそうになくなつたんで、次回
予告といふか。 次回KY対KY 中編！ あ、一枚千円からな。十
枚に一枚の割合で猫口スのフェイトがあるから」

リース・ツルギ・なのは・ユーノ「「「「ダースでくれ！！」」」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7035v/>

リリカルなのか？無を有する剣

2011年11月17日21時11分発行